遊戯王 trust of world

スマイル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王　ｔｒｕｓｔ　ｏｆ　ｗｏｒｌｄ

【Ｎコード】
Ｎ３００５Ｙ

【作者名】
スマイル

【あらすじ】
＊＊５Ｄ'ｓの世界からＧＸの世界へのタイムトラベルものです。＊＊

主人公『不動カイト』が織り成す学園生活。デュエルアカデミアにて起きる闇との戦いを仲間達と共に立ち向かっていく。

タクティクス、知識共に中の下。当時の資料を読み漁りながら進めていきます。

単純に、シンクロ召喚を展開したいのが本音だったり。

第０話　第一次報告＆ａｍｐ；前振り

第０話　定時報告

ス「いや～、ついに手を付けましたよ、遊戯王に。かなり前からデュエルやってますけど、仲間内、兄弟内では全く勝ってませんけどね」

？？「そんなんがよくこの小説描こうと思ったよな…正直不思議だぜ」

ス「おやおや、アナタはどちらサン？」

？？「この小説の主人公、って言ったら笑う？」

ス「いえいえ、弱小たるワタクシの分身でございましょう？」

？？「何を隠そう、って違うわヴォケェ！！」↑思いっきりアッパー

ス「あぱすっ！！？」

？？「ホントに主人公だっつってんだよ。この能無し！！」

ス「ぜ、全力、全開、ッスか…（がくっ）」

？？「ま、いっか。さてさて、いよいよ始まります、『遊戯王ｔｒｕｓｔ　ｏｆ　ｗｏｒｌｄ』。初回はこんなんですけど、次回から本編に入ります。できれば長い目で見ていただけたら幸いです。

どうぞ、よろしくお願いします！！」

第1話　仲間との絆、運命の初戦（前書き）

とりあえず、第1話です。

キーカードは…『レッド・デーモンズ・ドラゴン』

カ「レベル8のシンクロモンスター…守備表示モンスターの効果破壊と、攻撃宣言しなかった自分のモンスターをエンドフェイズ時に全て破壊する効果を持った強力カード」

ス「ジャック・アトラスのエースモンスターだ。シンクロ素材に縛りがない分、容易に召喚できるし、レベル8モンスターの中でも妥協召喚で出す人はまずいないだろ」

第1話　仲間との絆、運命の初戦

とある昼下がり、

学生服を着た少年と、フリルがついた青いコートのおかっぱ頭が会場内で決闘（デュエル）をしている。

ここはデュエルアカデミア試験会場。既に俺の前一つまり、会場にいる少年までは試験が終わっている。ちなみにあの青コートは少年を「ドロップアウトボーイ」と呼び、蔑んでいる。ま、受験番号１１０番じゃそう言われるしかないか。会場では無骨な歯車だらけの機械人形が、翼の生えた超人を見下している。機械人形は『古代の機械巨人（アンティーク・ギア）』。翼の生えた超人は『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウイングマン』だ。どちらの攻撃力が上かは言わずもがな。その時、会場内が摩天楼に変わる。

（摩天楼－スカイスクレイパー－…か。終わったな）

『フレイム・ウイングマン』の効果も併せれば、もう終わったも同然だ。観客席から１Ｆの廊下に向かうと同時に歓声と試合終了のブザーが聞こえる。どっちが勝ったかは見ない。見たところであの少年と戦う訳じゃない。

（さて、どのデッキで行くかな、と）

ベルトに通っているホルダには三つのデッキがそれぞれ入っている。どれも皆引退したプロのデュエリストから託されたデッキだ。とりあえず左側のデッキで試してみるか。

デッキと共に決闘盤（デュエル・ディスク）を取り出す。皆が使っている一般生産タイプ

とは全く違い、モンスターカードゾーンは分割せず一列に並んでおり、ディスクが丁度手の甲の辺りに装着するタイプ。こいつの名は「ホイール・オブ・フォーチュン」。デッキと共にこれを渡してくれた人からは「必ず勝ち続けろ！！」と脅迫（？）してきたけど、デュエルには勝ちもあれば負けもある。今は命がかかっているわけではないので、試用ってことでこの人のを使うことにした。

ある程度調整が終わったところで、先程の少年がこちらに走ってくる。

「アンタか、俺の次にデュエルすんのは」

「ああ」

息を切らしているのは急いでいるからじゃない。早く見たくて急かすために来たようだ。

「さっきの人が待ってるぜ。早く言ったほうがいいんじゃねえの？」

俺の対戦相手はあの人か……あんまり気が進まないな、あの人相といい…

「解ったよ、そう急かすな」

「頑張れよ？あの人結構強いぜ」

「それも知ってる。あと、お前。名前は？」

「俺は十代、遊城十代だ。アンタは？」

「カイト…『不動　カイト』」

そう名乗ると、十代の横をすり抜けるように立ち去る。とっとと行きましょ。待たせたとあっちゃ、決闘者（デュエリスト）としては失格だ。

「来たようなノ～ネ。ワタシが試験担当官のクロノス・デ・メディチなノ～ネ」

「受験番号９番、不動カイトです。よろしくお願いします」

ちゃんとしたお辞儀の後に目にしたのは、目を丸くしているクロノス試験官。

「何か？」

「い、いえ、礼儀正しくてよろしいノ～ネ。ちなみに遅刻した理由は何ノ～ネ？」

「ちょっとばかり渋滞に巻き込まれまして…」

「そうなノ～ネ。それより早くデュエルを始めるノ～ネ」

試験官がディスクを起動させるのに合わせて、俺もディスクを起動させる。何だか似てるな、あの人のディスク……

「「決闘（デュエル）！！」」

クロノス　ＬＰ　４０００

カイト　ＬＰ　４０００

「先攻は私なノ～ネ、ドローニョ……私は『古代の機械騎士（アンティーク・ナイギア）』を召喚するーノ。そしてカードを二枚伏せてターンエンド」

クロノス　古代の機械騎士　ＡＴＫ＝１８００　ＤＥＦ＝５００

伏せカード　二枚

ふぅん……セオリー通りか。あの二枚のどちらかは『奈落の落とし穴』、もしくは保険として『聖なるバリアー ミラーフォース ー』かな。じゃあ、こっちはこっちのセオリーで、

「俺のターン、ドロー。手札より魔法（マジック）カード『ハリケーン』を発動。魔法（マジック）・罠（トラップ）カードゾーンに置かれているカードを全て手札に戻す」

「なっ、何でスト～～ッ！！」

竜巻によって伏せられていたカードが全てクロノス試験官の手札に加わる。

「更に、相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない時、手札よりレベル５の『バイス・ドラゴン』を特殊召喚できる。来い！！『バイス・ドラゴン』！！」

紫色の無骨なドラゴンが咆哮と共に光の中から現れる。緑の翼を羽ばたかせ地に降り立つと、機械仕掛けの騎士に威嚇する。

バイス・ドラゴン　ＡＴＫ＝２０００　ＤＥＦ＝２４００　↓
ＡＴＫ＝１０００　ＤＥＦ＝１２００

「レ、レベル５のモンスターを特殊召喚…って、ステータスが下がってまス～ノ？」

「これがこいつのデメリットだ。この方法で特殊召喚されたこのモンスターの攻撃力・守備力は半分になる。まだだ、俺は手札から『ダーク・リゾネーター』を通常召喚！」

音叉を持った小柄な悪魔。それだけしか説明できない。ただ、シュールだ。

ダーク・リゾネーター　ＡＴＫ＝１３００　ＤＥＦ＝３００

「レベル５の『バイス・ドラゴン』に、レベル３の『ダーク・リゾネーター』を……チューニング！！」

「チュ、チューニングでス～ト！！？一体何を……」

狼狽するクロノス試験官を差し置いて、デュエルは続く。アンタの言葉……今使わせてもらうぜ。

「『王者の鼓動、今此処に列を成す。天地鳴動の力を見るがいい。』シンクロ召喚！！」

『ダーク・リゾネーター』音叉を弾いた瞬間、三つの機械的な輪になり、『バイス・ドラゴン』を包む。その中から五つの光が列を成し、一筋の光となったとき……赤銅と赤を纏った異形の竜が俺の後ろに降り立つ。焔を纏って…

「我が魂…『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！」

「こ、攻撃力…３０００でス～ト！！？『青眼の白竜（ブルーアイズホワイトドラゴン）』と同じステータスなノ～ネ！！！」

ま、確かにこっち（・・・）じゃ驚くことだろうけど、攻撃力３０００なんてばら撒かれてるようなモンだし、気にしない気にしない。

『レッド・デーモンズ・ドラゴン』　ＡＴＫ＝３０００　ＤＥＦ＝２０００

「す、すっげ～…」

「何か、怖い…」

「カッコイイ～～、あんな召喚初めて見た！！」

十人十色とは言うけど、ホント、凄い反応。けど、客寄せパンダじゃねえんだ。一気に行くぜ。

「バトル！！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で『古代の機械（アンティーク・ギア）騎士（ナイト）に攻撃！『アブソリュート・パワーフォース』！！！」

『レッド・デーモンズ』の手の平から放たれた焔によって、機械仕掛けの騎士は溶解し、爆発それに巻き込まれるようにクロノス試験官のＬＰも減っていく。

「あ、アンビリバボ～！！」

クロノス　ＬＰ　４０００　↓　２８００

「な、何て攻撃なノ～ネ……も、もう私の場がガラ空きなノ～ネ」

「俺はカードを三枚伏せ、ターンエンド」

「くくっ……私のターン、ドローニョ」

あの人のあの台詞にあの間延びしたような喋り方…何とかなんねえかな？妙にカチンとくる。とはいえ、俺の手札はゼロ。手首についているカードホルダーには手札が一枚も無い。ま、次の手も読めなくは無いけど…何が出るかな？

「私は手札から『古代の歯車（アンティーク・ギア）』を守備表示で召喚。そして手札から魔法（マジック）カード『機械複製術』を発動する～ノ。表側表示で存在する攻撃力５００以下の機械族モンスター一体を選択して発動。選択したモンスターと同名モンスターを2体までを自分のデッキから特殊召喚する～ノ」

古代の歯車（アンティーク・ギア）＊３　ＡＴＫ＝１００　ＤＥＦ＝８００

歯車に車輪が付いた人形が守備表示で三体現れる。しょうがない…次のターンで一掃するか。なんて考えてると、クロノス試験官が何かほくそ笑んでいる。気持ち悪っ！！

「カードを二枚伏せ、ターンエンドです～ノ」

（フフッ…これでシニョールカイトは二ターンの間はこれを破壊しなけれ～ばダメージを与えられないでしょ～ル。です～が、私にはまだ伏せカードがあるのです～ノ）

「俺のターン、ドロー」

来たのは『ロスト・スター・ディセント』か。一応の保険としては充分だな…けど、あの伏せカードは恐らく攻撃反応型か。『ハリケーン』で手札には戻したけど…さっきの推察どおり十中八九『それら』だろう。

「カードを一枚伏せ、バトル。『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で『古代の歯車（アンティーク・ギア）』を攻撃！！」

あっちは読みどおりとばかりに、何もしてこない。恐らく終盤あたりに意表をついて発動するだろう。だったら……

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』の効果発動！！」

「な、何です～ノ！！？あひゃあぁぁっ！！！」

攻撃は歯車に当たった瞬間、誘爆するようにして残りの二体も破壊される。その爆発が収まる頃には、クロノス試験官のモンスター

カードゾーンはガラ空き。

「い…一体、何が起きたんです～ノ！？」

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』の効果……このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃したとき、ダメージ計算後、相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する」

「……」

口をアングリと開けたまま驚いている試験官を尻目に、伏せカードを発動させる。

「更に伏せ（リバース）カードオープン。速攻魔法『サイクロン』発動。中央のカードを破壊する」

カード一枚分の小さな竜巻が伏せカードを弾き飛ばす。破壊したカードは…『聖なるバリア－ミラーフォース－』。運が良いんだか悪いんだか…。

「俺はこのままターンエンド……アナタのターンですよ？」

「わ、私の…ターン、ドロー…ッ！？」

その表情で俺は知ってしまった。多分あの人の手札にはモンスターがいない。その表情から推測すると、あの伏せカードは……特殊召喚型の罠（トラップ）じゃない。

「タ、ターンエンド、なノ～ネ……」

もう逆転の一手も残っていないような、肩を落としたクロノス試験官にはちょっと申し訳ないけど、降参（サレンダー）しない以上は決闘（デュエル）は続行。つまりは、俺がクロノス試験官のＬＰを０にしない限り終わらない。

「俺のターン、ドロー……そのままバトル！！なんですけど…クロノス試験官」

「な、何なの～ネ？」

「ブルーアイズみたいな終わらせ方だったら納得します？」

「そ、それはどういう「答えは聞きませんけどね」お、鬼なノ～ネ！！！！」

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で直接攻撃（ダイレクト・アタック）！！『灼熱のクリムゾン・ヘルフレア』！！！」

手の平に集まるはずだった焔が、『レッド・デーモンズ』の口に渦を作る。練り上げるように溜められた焔を一気に吐き出したところでデュエル終了のブザーが鳴る。

クロノス　ＬＰ　２８００　→　０

「お、おい…嘘だろ…あいつのＬＰ減ってねえし」

「つ、強い。あのクロノス先生を無傷で倒しやがった……」

「か、カッコイイ……」

ありがとうございました、と礼をして、そのまま会場を後にしようとした俺は観客席の見てしまった。闘争心剥き出しの男子達と、目をハートマークにして黄色い声援を送る女子達の二極だった。こ、怖い……これがホントの『天国と地獄』ってか……てか、この状況じゃ両方とも地獄だわ！！

廊下を戻る最中、十代とは会わなかった。慌てて来ておいて慌てて帰る。ちょっとした台風だな……ポケットからロケットを取り出すと、その中に填め込まれている写真を見つめる。

「やっと第一歩だ。絶対に約束、護るからな……義父（とう）さん……」

そこには優しい表情で写っている自分と義理の父……『不動遊星』だった。

第1話　仲間との絆、運命の初戦（後書き）

やっと一話投稿です。

デュエルの描写って難しいです。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第2話　出遭いと入学　明日への誓い（前書き）

さてさて、第2話でございます。

デュエルはありませんが、キーカードをば。

キーカードは…『スター・ライト・ロード』

ス「自分フィールド上のカードが破壊される効果が発動した時、その効果を無効にして破壊し、エクストラデッキから『スターダスト・ドラゴン』を特殊召喚する誘発即時効果の罠（トラップ）カード」

カ「『スターダスト・ドラゴン』の特殊召喚は任意だけど、二枚以上破壊される効果のみが対象で、正規の召喚方法じゃないから『スターダスト・ドラゴン』の効果では蘇生できない。デメリットはそれぐらいか。終盤じゃ殴り倒されるし」

第2話　出遭いと入学　明日への誓い

アカデミア島へ向かうフェリーの中。

見事合格した俺は、ボストンバッグを枕にして寝転んでいる。あの後がまあ大変だ。怒涛と言っても良い。

試験後、お世話になっている海馬コーポレーションで一週間程、デッキのテスターとして寝泊りしていた。休憩は朝と夜だけ。食事休憩は昼食のみという何ともスパルタな一週間だった。

『こちら側』に来たときに社長と会って経緯を話したところ、オカルト話と一蹴され追い返されそうになったとき、丁度カードケースの中にあった『伝説の白石』を見せたところ、異常なまでに喰い付いてきて、テスターとして雇ってくれることになったのだ。それからは前述の通り、怒涛としかいえないほどの仕事を押し付けられた。何でも以前まで雇っていたテスターがそのあまりの仕事の量に根を上げ、逃げ出してしまったという。何とも教科書どおりの進み具合だ。こういうの何て言うんだっけ……ああ、『テンプレ』か。ソレは兎も角。持ってきたディスクも調整してくれたりと至れり尽くせりだが、フェリーに乗る数時間前まで報告書の山と格闘した。しかも徹夜で。義父（とう）さんと一緒にD・ホイールを組み上げたときも徹夜だったけど、二晩連続は流石に身体に堪える。

てことで、今は朝寝中。っていってもまだ起きてるし、陸を離れてまだ数分。しかもこの人の量では寝るに寝れない。足を組んで頭の後ろで手を枕代わりにしているが、それでもこの揺れようはちょっと寝れるモンじゃない……人でごった返している中、ある一人の男が俺の頭の上にやってきた。黄色い上着と白いズボン、ガタイが

良さそうな顔付きだけど、ちょっと理知的にも見える。たしかコイツは受験番号1番…筆記試験が首席だったな。

「やあ、ちょっと良いか？」

「嫌だ。俺はこれから寝るんだ……とはいえ、これじゃあ寝れない、か」

体を起こすと、やっぱり五月蠅い…そんなにデュエルしたいなら外に出ろよ。風強いし、お前等全員飛ばされて来い。寝れないストレスに苛まれている俺に、男は同情するように肩に手をやる。

「原因は俺じゃないが、悪いな。多分、浮き足立ってるんだろ？」

「それ、使い方おかしいぞ。『浮き足立つ』っていうのは不安で落ち着かない様子のことだ。日本語を勉強する為に俺に話しかけたのか？」

「とんでもない。試験の時にお前が見せた『あの』召喚方法について聞きたかったのさ」

ほら来た。そういうのはもうちょっと後にして…くれないか。俺の周りでベラベラ喋り倒してるコイツ等に比べれば、こっちが尚の事落ち着く。

場所を変えようと立ち上がると、その男『三沢大地』もついてくる。ほとんど人気のいない、というか何人か女子がいるけど気にしない。手摺に寄りかかると溜息混じりに話を切り出す。

「さて、『シンクロ召喚』について知りたいんだったか？」

「『シンクロ召喚』…そういう名前なのか？どういう理屈だ？」

「単純だよ。それぞれ素材となるモンスターの『レベル』を合計したレベルのモンスターを特殊召喚するのさ。俺が試験の時に出したモンスターの『レベル』は8。素材になったモンスターはそれぞれレベルが3と5、それで召喚できる。ただし、素材となるモンスターの中に必ず『チューナー』と付くモンスター1体が必要だ。更にこの召喚方法は特殊召喚扱いだから、その気になれば場に5体並べられる」

「つまりはレベルの足し算、か。原理は単純だな」

「まあな、いくつか例外はあるが……俺はあまり使いたくない。タクティクススピードと場の読みが必要不可欠になる」

「それは見せてはくれないのか？」

「客寄せパンダじゃねえんだ、そんなに大盤振舞いする気は更々無い。これに関して付け加えるのなら、『シンクロ召喚』するモンスター……『シンクロモンスター』は融合デッキに入れられる。これでいいか？」

「ああ……参考にさせてもらうよ」

何の参考にするんだか……考えられるのは『メタデッキ』か。けど、『あれ』は……ちょっと。でも特殊召喚を止める、もしくはデメリットに変える構成にすれば、あるいは……。う～ん、敵に塩を送りすぎたか…俺は馬鹿だ。

「ねえ…もしかして、あの人じゃない？」

「そうだよ。きっと」

「結構奇抜な格好だけど、良い人そう…顔も悪くないし」

「あたしはまあまあだと思うけど…」

その後、三沢と他愛ない話をしていると耳に入ってくるのは……ヒソヒソ話や陰口だ。大声で言いたい、ハッキリ言って『耳障り』だ。こっちの話がまともに出来ない。ていうか俺の格好、おかしいか？おかしいよな。

黒のＹシャツに赤のズボン。更に赤いチョッキなら誰だって目を引く。まあ、黒いコートのお陰で目立たないだろうけど……。

「そういえば三沢、遊城十代って知ってるか？」

「ああ…クロノス先生を倒した奴だろ？ある程度っていうか、君とは負けず劣らず噂になってるよ。融合デッキを使いこなすデュエリストだってさ」

そんなんで比べられると、正直怒りのやり場に困る。コイツ、解って言ってるようだ。見掛けによらず頭の回転は早い。

「融合……『Ｅ・ＨＥＲＯ』だったか？たしかに召喚速度や手札回りは充分に速いけど……シナジー出来るカードが多すぎて使い辛いな。一度だけ使ったことがあるけど、事故率が高過ぎる」

「ピーキー、と言った方が無難だな。正直、俺でも使いこなせそうに無い」

まさかこんな所で同じ意見と出会うとは……。

あのデッキの弱点は『偏り』や『縛り』ではなく、自分とデッキの『対応速度』の違いにある。欲しいときに来ない。必要な場面じゃないのに手札に来る、といった『擦れ違い』のような事が頻繁に起こる。まさかデュエル開始時の一番上のカードが『ホープ・オブ・フィフス』だった時は正直ゲンナリした。墓地には何も無いですよ～、てな顔になったし。

「ま、アイツらしいデッキなんだろうけどな……俺とは大違いだ」

「君は『シンクロ召喚』主体のデッキだろ？」

「そうなんだけどな…俺は自分で『組んだ』んじゃなくて、『借り』てるんだ。ほとんど」

「え？そうなのか？」

俺が持ってるデッキは全部で五つ。その内の一つはかけがえのない大切なデッキだ。これを主に使って行こうとは思うけど…『こっち』じゃステータスが必要、低レベルは要らない、なんていう事だから俺の精神がもつかどうか……

「でも、借りてるからと言って疎かには出来ない。コイツ等は…特にこのデッキは、俺にとって大切な人から託されたデッキなんだ」

手の中にあるデッキの一番上には『スターダスト・ドラゴン』。こ

れは俺の義理の父親『不動遊星』から託された絆と想いが込められている。そんなの、無下に扱うわけにはいかないだろ…。

「余程大切なんだな……そのデッキが。お、見えてきたぞ」

三沢の視線の先には島が見える。山の頂上辺りには三つの塔に黄色いドームが見える。あれが『デュエル・アカデミア』か……長い三年間になりそうだ。

その後、長くて有難い校長先生のお言葉を拝聴してから各寮に分かれて移動する。事前に渡された制服の色は青。つまり『オベリスク・ブルー』だ。あのエリート気取り、嫌いだし……あまり関わらない方が良いかも。それに俺、青嫌いだし。わざと降格しようかな…『オシリス・レッド』の方が居心地良さそうだ。あの古びた感じが何とも…なんて考えてる間に寮の部屋に入るけど…ここ、ホテルか何かか?えらい広いし、ベッドもデカい。終いには寮の食事。朝昼晩とフルコースだというから何だか腹が立つ。ていうか既にご立腹状態です。適当にバッグを放ると、着替えもせずソファに寝転ぶ。フェリーで寝れなかった分、こっちで安眠させてもらうとす……る……(怒)。

何かゴチャゴチャウルセえな。何だよ、ったく。考えてみれば、ここ二階だし…デュエルフィールドが丸見え。しかも言い争ってる中に、あの遊城十代までいる。一緒にいるのは確か……在籍中の帝王（カイザー）の弟、だったか。相手は勿論『オベリスク・ブルー』の生徒。あ、ゴメン。もう限界。

窓を全開にすると、ベランダに出て身を乗り出す。

「貴様、まんじょ「ウルセー！！！！！静かにしろ！！寝れねえだろうが！！！」……ッ！！」

まるでテレビを点けたら大音量だったみたいな表情で全員がこちらを見ている。その輪の外には金髪の女子までいるし、彼女は耳を塞いでいる。フェリーの乗員にまで聞こえたんじゃないか？今の。

「テメエら、揃いも揃って仲良く出来ねえようだな……次に俺の安眠妨害してみろ？完膚なきまでに叩き潰してやる」

まるでジャックが乗り移ったかのように俺の周りが赤く染まる。おお、コレが『荒ぶる魂』って奴か。今なら使いこなせそうだ。ベランダから飛び降りて赤と青を交互に見る。別に複数でも良いんだけどな…。

「貴様、『オシリス・レッド』の奴等の肩を持つのか？そんな小さい奴がこの『オベリスク・ブルー』にいるのは、ここの品格を下げるのと同じだ。今度からは「何フカシこいてんだ？俺はテメエ等だけに言ったんじぇねえんだよ。幼稚園からやり直して来いよ。青二才（サニー）」」

「え……俺も？」

「当たり前ッスよ、アニキ。これは元はと言えば僕達が勝手に…」

「そこのメガネ、理解したか？次は無えぞ……誰だろうと『手加減しない』」

それはつまり、1ターンキルされても文句言うな、って事だ。まあ、実際やったことないし、やる気もない。でも脅しには充分でしょ？

「万条目さん、コイツですよ。ノーダメージでクロノス先生を倒したの」

「そうだ、コイツだ。見たこと無い召喚方法を使ってた…」

あのツンツン頭……アイツがこの愚図共のアタマか……威厳だけは一人前だけど…

「ほう…確か『不動　カイト』だったか？」

「テメエのようなサルに、名乗った憶えは無いけどな」

「サ……こ、この俺を侮辱するとは、貴様…っ！！」

「どのお前だか俺には見当が付かない……喧嘩はゴメンだが、デュエルなら何時でも受けてやる…『王者（キング）』の弟子である俺が…」

「キ…キングだと？一体だ「お前は知らなくて良い。二度と俺のやることに口出し、手出しはするな」…っ！」

二度目の台詞被せが終わったところで俺は部屋に戻る。全員言葉を

失っているようだが、やりたいことを邪魔されれば誰だって怒る。でも、今の俺はかなりマズい事をした。あの場にいる全員に『宣戦布告』をしてしまったのだ。いつも一言足りないんだよなあ。

部屋に入り、ドアを閉めるとほぼ同時にノックが聞こえる。また安眠の邪魔をするか……今度は丁重にしないとな。いつまでもコレじゃ埒が明かない。

「はいはい…次はどちらさ…ま、ってアンタ…」

「こ、こんにちは…」

ドアを開けた先にはさっきの輪の外にいた女子。名前はまだ知らないが、何だが申し訳なさそうにしている。おれ、何かしたかな…？あ、ヤバい。

「その…さっきの事だけど……」

「いや、アンタは、その……何つーか、巻き込まれた？って感じだから、気にしなくて良いぞ」

「そ、そう…良かった…」

「俺はああいうのはハナから大嫌いだけど、初対面なら誰だって仲良くしたいだろ？」

「ええ……そうね」

な…何だ、この会話。まるでカップルが喧嘩した後の空気だろが…な、何とかせねば……。

「「あ、あの……」ど、どうぞ？」

駄目だ…完璧におかしい……どうしてもこの空気から脱出できない。

「出来ればなんだが…ハイ」

差し出した手に疑問を感じているが、取り敢えず友好の印ってことで。

「俺はカイト、『不動　カイト』だ。よろしく」

「明日香よ、『天上院　明日香』。よろしくね、不動君」

握手。

それだけで本当に友達になれそうだ。かといって小さい輪にまとまったまま過ごしたくないな…後で十代達にも謝っておくか。衝動的とはいえ宣戦布告しちゃったし。

「取り敢えずこれぐらいにして、俺…寝るわ」

「ま、待って」

「？…どうした？天上院」

「明日香で良いわ。その、万条目君の事だけど…あまり関わらない方が良い、って言いたくて…」

何かしおらしい……さっきまでは凛々しく見えたのに…

「ま、相手になるなら容赦しないし……適当に放っておくさ。ただ…」

「ただ？」

「俺にとって『許せない』事をしたら、その時は…本当に『叩き潰す』けどな」

誰に向けたわけでもない威圧は、明日香にとっては恐怖の対象だろう。目の前でそんなんされても困るし、怖い。

「てことで、今度こそ寝るわ。二晩徹夜はキツいし…」

「え、ええ。ごめんなさい…勝手に」

「良いんだよ。もう友達、だろ？早いけど、おやすみ」

「……おやすみなさい…」

そう言ってドアを閉めると、ソファに寝転ぶ。何かどっと疲れた。色々ありすぎだろ…此処に来てから。今度からはあのイメージを常に出せるようにしなきゃな。『アレ』を使いこなす訓練には丁度良い。

そこで一瞬にして思考が切れた。それこそ本当に糸が切れた人形のように……。

数時間後。

部屋の前にシルバーのワゴンが止まってる。見てみると、味付けしてただ焼いただけの肉や野菜が並んでいる。それにラップしてある皿の脇にはメモが。何々……

睡眠ばかりじゃなくて、食べなきゃ駄目よ？

天上院

あんたは、俺の母親かっつの。

第2話　出遭いと入学　明日への誓い（後書き）

長々と申し訳ありません。

デュエルに関しては構想中ですので、しばしお待ちを。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第3話　デュエルでも　必要なもの（前書き）

第3話でございます。

本日のキーカードは……『紅蓮魔竜の壺』

ス「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』がフィールドにいる時に発動できて、デッキからカードを二枚ドロー出来る」

カ「サポートカードの意味合いが強いし発動条件に縛りがあるけど、蘇生制限も無く、尚且つハンド・アドバンテージを取れる可能性がある一枚だ」

ス「実際に使ったら『死者蘇生』と『手札抹殺』引けましたよ？」

カ「マジか！！？」

第3話　デュエルでも　必要なもの

明日香が食事を届けて数分後。

皿を空にした俺は、食堂まで持っていこうとした時にそれはやってきた。

明日香だ。

いつも思うけど、皆して暇なのな。俺にばっかり構ってないで自分のこと何とかしようぜ…なんていうのを晴らすようにしてきたのは明日香の言葉だ。

『外でデュエルが行われる』と。

しかも相手はあの万条目とかいう取り巻きの大将様。ホント、皆暇だねえ…。

仕方ない。安眠妨害の代償を払わせるか…早足で皿を返した俺はそのままデュエルフィールドへ向かった。

ブルー寮・デュエルフィールド

暗がりであまり見えないが、青い制服の何人かと十代、メガネの小僧が向かい合っている。そこに飛び込むようにして明日香が注意するが聞いてはもらえない。ここは制裁……じゃなかった、助け舟でも出すか。

「だったら俺が誰かを相手してやるよ……さあ、誰が相手だ?」

すでにセットしてるディスクを胸の高さまで持ち上げると、向こうは誰が出るかを話し合い始める。そして、一分もしないうちに、

「僕が行きましょう…なに、すぐに化けの皮を剥がしてやりますから」

カチン

「よく言った……」

「ちょっと!!それじゃあアナタが来た意味が……」

「悪いがそれは聞けない。手痛い竹篦返しがどれほどか、教える為のモンだ…邪魔しないでくれ」

男の子にだって意地があるんですよ、どんな時でもね。てか、いつまで余裕かましてんの?人の安眠妨害しておいてよくもまあ、そんな顔が出来るものだ。考え出したらどんどん怒りが熱を持ち始める。なのに頭がクリアなままだ。

「ほお、アナタも随分と余裕ですが、すぐにそんな顔を消してあげますよ」

「おい…」

「何ですか…?」

「そんな安い挑発に乗ると思ったか？今の俺は機嫌が頗る悪い…
…このままじゃ気が晴れねえ。気晴らしだ……とっとと派手な決闘（ライブ）
を始めるか」

「いいでしょう……「決闘（デュエル）！！」」

取り巻き　ＬＰ＝４０００

カイト　ＬＰ＝４０００

ソリッドビジョンが起動すると、虹色に輝きだす。ＬＰが４００
０に固定されると、向こうのデッキからカードが五枚せり出す。俺
のディスクは一呼吸置いてから自動的にシャッフルされた後、自分
でカードを五枚引き抜く。
今の手札は、

・パワー・ジャイアント

・二重召喚

・紅蓮魔竜の壺

・ダーク・リゾネーター

・グローアップ・バルブ

……これ、やって良いよな？てか、出来るぞ。

「何を固まっているのですか?私のターン、ドロー……私はカードを一枚伏せて、ターンエンド」

取り巻きの後ろからは「もう来たのか…」やら「アレが見れるのか」やら聞こえるが、正直に言おう。

無駄だ。

「俺のターン、ドロー」

来たのは…『クリエイト・リゾネーター』。うん、これ決定。手札に加えると大きく深呼吸する。

「どうしました?まさか手札事故ですか?」

その言葉に大きな笑い声が聞こえてくる。よし、殺ろう。

「んな訳ねえだろ……手札のモンスターを墓地に送り、『パワー・ジャイアント』を攻撃表示で特殊召喚!」

墓地に『グローアップ・バルブ』を送って、出てきたのはビビットカラーのクリスタルで出来た巨人。

パワー・ジャイアント　ＡＴＫ＝２２００　ＤＥＦ＝０

「な…攻撃力２２００のモンスターを特殊召喚だと!?」

「このカードは、手札のレベル４以下のモンスターを墓地に送ることで特殊召喚できる。そして、墓地に送ったモンスターのレベル分だけ、このカードのレベルは下がる」

「すっげ～……いきなりレベル５のモンスターが出てきた」

「しかも攻撃力は２２００…」

「レベル以外のステータスは変わらないまま特殊召喚できて、尚且つ序盤では攻撃力でボード・アドバンテージを取れる。召喚権を行使しなくても充分に制圧力があるわ」

「明日香…半分正解で半分不正解」

「え…？」

「まだ行くぞ。手札から『ダーク・リゾネーター』を通常召喚。そして、レベル５となった『パワー・ジャイアント』にレベル３の『ダーク・リゾネーター』をチューニング」

音叉から波紋が広がり、それに重なるように悪魔が三つの輪に変化する。

「『王者の鼓動、今此処に列を成す。天地鳴動の力を見るが良い』……シンクロ召喚！！！」

五つの光が一筋の光に変わったとき、炎となり、紅蓮の竜が羽ばたき、咆哮を上げる。

「我が魂、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン　ＡＴＫ＝３０００　ＤＥＦ＝２０００

「な……たった1ターンで攻撃力３０００のモンスターを…」

「頭痛薬飲んだか？鎮静剤打ったか？まだまだこれからだ……レベル８のシンクロモンスターが特殊召喚に成功した時、手札の『クリエイト・リゾネーター』を特殊召喚（サモン）。手札から魔法（マジック）カード『二重（デュアル）召喚（サモン）』を発動。この効果によりこのターン、もう一度だけ通常召喚が出来る」

普通はここまでしなくて良いけど、一応保険って事で。

「更に、墓地に存在する『グローアップ・バルブ』の効果発動。デッキの一番上のカードを墓地に送ることで、このカードを特殊召喚できる。蘇れ、『グローアップ・バルブ』」

グローアップ・バルブ　ＡＴＫ＝１００　ＤＥＦ＝１００

球根から覗く目が怪しく光るとフィールドに現れる。これで全て揃った。後は俺の技量次第だ。理由は不純だけど、怒って良いことだよな？てか、すでに俺の魂は暴れまわってます。

「もう誰にも……止められないぜ。荒ぶる魂…『バーニング・ソウル』！！」

それに呼応するかのように『レッド・デーモンズ』が赤く輝きだす。操られるかのように二体の『チューナー』も赤い光を纏う。

「レベル８の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』に、レベル１の『グローアップ・バルブ』とレベル３の『クリエイト・リゾネーター』を、『ダブルチューニング』！！」

シンクロ召喚の時の緑の輪ではなく、四つの焔の輪が『レッド・デーモンズ』を包み込む。

「『王者と悪魔、今此処に交わる。荒ぶる魂よ、天地創造の叫びを上げよ』……！シンクロ召喚！！！」

光の中なら出てきたのは、紺色の焔の模様が付いた赤い竜。二対四枚の翼が荒々しく羽ばたき、焔とともに産声を上げる。

「真紅の灼熱…『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』！！！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ＝３５００　ＤＥＦ＝２５００

「そ、そんな……」

「レベル１２のモンスター……しかも攻撃力が…」

「すっげーっ！！！俺もアイツとデュエルしたいぜ！！」

「ソリッドビジョンなのに……熱い」

やっぱレベル１２のモンスターを生で見るのは皆初めてか……俺も最初に見た時は、ビックリしたよりも正直、怖かった。映像として映し出されるこのモンスターが今まで見たどのカードよりも『重く』、そして『熱かった』。

「『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』の第一の効果。このカードの攻撃力は、墓地に存在するチューナーモンスター１体につき５

００ポイントアップする。俺の墓地にいるチューナーは3体……よって『スカーレッド・ノヴァ』の攻撃力は１５００ポイントアップ」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ＝３５００　ＤＥＦ＝２５００　↓ＡＴＫ＝５０００　ＤＥＦ＝２５００

「ば、馬鹿な…攻撃力、５０００…」

「行くぞ……覚悟は良いな？『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』で直接攻撃（ダイレクト・アタック）！！『バーニング・ソウル』！！！」

「かかったな…伏せ（リバース）カード、オープン。『聖なるバリアー ミラーフォース ー』発動！お前のフィールド上の攻撃表示モンスター全てを破壊す「『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』第二の効果！このカードは相手の魔法（マジック）・罠（トラップ）・効果モンスターの効果では破壊されない！」な、何だと！！？」

ミラーフォースからの光すら突き破り、相手に迫る。奴は他にカードを伏せなかったのが原因。さらにはＬＰすらも超えており、次のターンは実質周ってこない。

取り巻き　ＬＰ＝４０００　↓　ＬＰ＝０

０と同時にブザーが鳴り、ソリッドビジョンも消えていく。消えていく『スカーレッド・ノヴァ』に視線をやると、何だか笑ったように見えた。……まさかな、主じゃない俺にそんな訳ないか。

「おい……」

「っ！！」

「今のデュエル…酷すぎた。慢心が過ぎる上に、行動一つ一つに余裕があり過ぎる。どうせ他のカードは伏せるだけ『無駄』、『不要』だとか考えてたんだろう？」

肯定なのか、全く動かない。他の取り巻きや万条目ですらも押し黙ったままだ。

「義父（とう）さんの言葉、そっくりそのままお前等に教えてやる……『この世に不要なものなどない。どんな場所にも、どんな人間にも、不要なものなどあるわけないんだ』」

その言葉には皆が驚いていた。哲学にも聞こえそうだが、それは学校でも社会でも、それは通用する。それだけは最初に教えておきたかったし、心に留めておいてほしかった。

「デュエルでも同じだ。どんなにレベルが低くても、どんなに攻撃力が低くても……力を合わせればどんな敵にでも立ち向かえる。だから、『不要』なものなんて、ここにもあるわけないんだ。絶対に…」

第3話　デュエルでも　必要なもの（後書き）

一応ここで第3話、終了です。

中途半端とは言わないで下さい。ちゃんと修正したり次に続くようにしますので。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第４話　静かな時間、突然の来訪者（前書き）

何かデュエルと対話シーンが交互になってる気が……

気にせずキーカードを、

今回は『マジシャンズ・ヴァルキリア』。

ス「自分フィールド上に存在する魔法使い族を攻撃対象に選択できない効果……永続効果にしては場持ちが悪いな」

カ「守備力が１８００じゃ『アームズ・エイド』あたりまでしか止められないし……」

ス「確か数年前じゃ３００００ぐらいの値段だったぞ？ちなみに絵違いの『真紅眼の黒竜』は十万ぐらいだったな」

カ「これがホントの『レアカード』、ってか？」

第4話　静かな時間、突然の来訪者

ブルー寮前・デュエルフィールド

あの憂さ晴らし（デュエル）が終わって間もない時間。未だフィールド内で対峙している取り巻きと俺。

どんなに威張っても、罵っても、『魂』が腐れば自分の全てが腐る。この言葉でどれだけ改心してくれるかなんて考えていない。ただ、デュエルって……楽しくするモンだろ？この歳でそんなグチグチと……おカタいねぇ。

「俺の義父（とう）さんもその言葉と、仲間との『絆』でデュエルを続けた。そこの愚図共はお前の『仲間』か？『絆』か？それすらも履き違えてつるんでるんなら…そいつら全員と相手してやるよ…気に食わないなら……」

そういや、今何時だ？寮の前にある時計は夜の十時半を指している。そろそろか……。

「ま、いいや……こんな時間に青空教室やったって、誰も聞きゃしねえからな。興が殺がれた…帰って寝る」

踵を返して部屋へ戻ろうとする俺の後を明日香が追ってくる。凛々しいお方が何で俺の『金魚のフン』になるかね。別に鬱陶しいとかそんなんじゃないけど……。

部屋に着くと、明日香が部屋に入って良いか聞いてきた。そんな疚しい気持ちなんてコレっぽっちもない上に、寝るまでの暇潰しには丁度良い。話し相手にでもなってもらうか。
ベッドにディスクとデッキホルダーを放ると手近なソファに腰掛ける。足はテーブルの上に組んで。

「ソレ、行儀悪いわよ？」

「かといって、止められねえよ。こうしないと落ち着かない」

部屋なんだし別に。一番落ち着く座り方だし、三年間だけしか使わないんだ……そういう風に使っても文句無いだろ？飲み物は…買わなきゃ無いか。

「アナタ、本当に強いのね……あんな勝ち方、誰も真似出来ないわよ？」

「強かねえよ。ただ、俺もまだまだ格下（ガキ）さ。俺より強いヤツなんてごまんと居るだろ？」

「でも……あの召喚方法は一体何？融合とも違うし、儀式でもない…」

「アレは『シンクロ召喚』。後は三沢あたりにでも聞いとけ…というより、説明がメンドい」

「『シンクロ召喚』……ね「言っておくけど、俺はそれをアンタに教える気も、使わせる気も無い。却って面倒事が増えるだけだ」……面倒事って…」

そんな拒絶の言葉に明日香の表情が曇る。好奇心で使うなら怒るけど、教わるだけで使うならもっと怒る。

こういうデッキは使って何ぼ。経験値がモノを言うデッキだ……それと召喚するモンスターの『レベル予測』も大事だ。手札にチューナーだけの場合、予測の幅が広がってしまうし、チューナーが居なければ次に何を引くかだけでは足りない。戦闘等で素材が無くなったらリクルートが大変だ。後は『召喚するモンスターの効果による状況予測』。使えるシンクロモンスターは十五枚が限界。『こっち』でもそれは変えないけど。相手の戦略を的確に先読みして、その状況に合わせたモンスターを召喚する。もしくは相手の行動をストップさせ、こっちのペースに持ち込む。

「……ま、気が変わったら教えてやるよ。それまでは頭の片隅に憶えておけ」

「わ、解ったわ…」

「そういう事だから、俺は寝る。もうちょっと寝ないとどうも頭がスッキリしない」

「ええ。邪魔してごめんなさい」

なんだか釈然としない気持ちの明日香を半ば追い出す形で部屋に静

寂が戻る。明日からこれが毎日続くのかと思ったら頭が痛くなってきた。誰か俺に『平穏』という言葉をくれ。かわりにデュエルしてやるから。

二日後の夜、どうも外が騒がしい……誰がデュエルしてんだ、と思ったら十代の叫びの後、明日香の叫び声が聞こえた。一体何事？

翌朝。

食堂に現れた明日香に昨日の夜の事を聞くと、どうやら覗き魔を捕まえたらしく、そのお咎めを賭けて十代とデュエルした、との事。そろそろ良い加減勉強してくれ。騒がしくて寝ることもままならない。静かに寝ないとスッキリしないんだよ、俺。

「いい加減、夜ぐらい静かにしろよ。寝れなくて困る」

「寝てばかりじゃなくて、ちゃんと復習したら？それでも授業についていけるアナタには必要ないかもしれないでしょうけど…」

さも当然のように言うな。一応知識だけは入ってるけど、応用力に関してはあまりにも勉強不足なんだ。復習はしてるものの、そこに関しては正直困りものだ。口をつけていた珈琲が空になると同時に明日香が話を切り出す。

「そういえば、アナタってあのデッキ以外にいくつ持ってるの？デッキホルダーが後三つぐらいあったわよね？」

「ああ、デッキは全部で四つ。全部借りモンだ」

「借りてるデッキで入学したの？誰から借りてるのよ？」

「親から一つに、師匠から一つ、知り合いから二つ……かな？どれもこれもシナジーするには難しいカードばかりだ」

特にクロウとアキさんから借りているデッキは種族と名称限定のデッキだ。混ぜこぜにしたら大変危険なデッキだらけを借りたと今更後悔。

「でも、『シンクロ召喚』には特化したデッキだ。リクルートやバーンダメージ対策……破壊耐性とか全体除去なんかも兼ねているし、逆にソレを逆手にして展開できる」

「それ聞いたら、私は勝てなそうね……相手にするのを避けるに

越したこと無いわ」

「賢明だな……俺は男女問わず手加減しない」

話に夢中で珈琲が空だったのをようやく思い出した。話しすぎたのと併せて舌打ちすると、自分の分の食器を片付ける。

「ちょ……ちょっと待ってよ！？」

早々と食器を片付ける明日香を無視して、とっととアカデミアにでも行くか。『平穏』なんて言葉が何か空しく感じてきた。

教室へ向かう途中でも明日香からの質問は絶えない。あまりのウザったさにとうとう俺も我慢の限界を迎えた。肩を掴んで壁に叩きつけると、思いっきり睨んで威嚇する。

「テメエの好奇心を満たすために俺は居るんじゃねえ……そんなに知りたいんだったら辞書でも引いて睨めっこしてろ」

「生憎と、それとデュエルしか知らないの…後、女性には優しく接するって教わらなかった？」

「失礼。こちらも生憎とデュエルと喧嘩しかしてねえんだ。『親しき仲にも礼儀あり』って言葉、憶えとけ」

負けじと睨む明日香だが、どっかの厨二病患者みたいに萌える、なんて言葉は認識していない。ただ、こっちにも『予定』ってのがある。それを終わらせるまでは『こっち』に居なきゃいけないと考え

ると何か気が抜けた。
ヤバいヤバい。俺の脳内、リセットしろ。ここは学校だ、『サテライト』じゃねえんだ。
肩を離すと、おどけたように取り繕う。こんな時にポーカーフェイスが出来る自分に花丸をあげたい。

「なんてな。脅しは嫌いなんだ……悪かったな」

「いえ、私も出過ぎた事を「こぉ～～～～～のぉ～～～～……」…？」

明日香が謝ろうとした時、何かがこちらに迫ってきているのが視界の隅に映った。何か…女子とは思えない形相でこっちに来てるんですけど…。

「クソ野郎ぉぉぉぉぉぉーーーーッ！！！！！」

うん。喰らった俺が言うのも何だけど…素晴らしいドロップキックをお持ちで。

綺麗に両足の裏が俺の顔面を捉えると、数メートル先まで吹っ飛ばされる。仰向けに倒れた俺は熱を持っている顔面に手を当てる。う～ん、鼻はドコだ？

「アンタッ！明日香さんに何してんのよ！！！？」

「ジュ、ジュンコ！？」

「大丈夫ですか？明日香さん…アイツに何されました？」

まるで過保護な親のように心配するジュンコと呼ばれた女子は凄くオロオロしてる。てか、俺そんな野獣に見えるか？

「な、何もされていないけど……大丈夫かしら、彼…」

「良いんですよ、あんな獣放っておいて」

「それはこっちの台詞だ……ったく、投げ飛ばされるのは慣れてるが、まさか吹っ飛ばされるとはな」

「何だ生きてたの？そのまま死んでれば良かったのに」

「随分と辛辣だな……白（ホワイトカラー）」

ジュンコはそれを聞いた瞬間、スカートの裾を掴んで後ずさる。

「蹴っ飛ばすのはそっちの自由だが、スカートでやるのは感心しないな。それと、後ろの水色（ブルーカラー）」

何故気付いたのか、と言わんばかりに気取られた女子が同じように後ずさる。何か、今日になって俺は玩具にされてる気が……ま、いっか。『あの人』の玩具よりかはまだマシだ。

「脅かすために背後に回ったんなら…デンパ消しとけよ。気付いてください、って言ってるようなモンだぜ？」

「お、おっしゃってる意味が解りませんわ？」

「……ったく、これがホントの『踏んだり蹴ったり』、ってか？冗談にしちゃ笑えねえ」

すっかり呑まれてしまった三人をおいて、とっとと教室に入る。てか、こんなんやってた場所が教室の目の前ってどうよ？

その日の夜、明日香に言われた通りに復習を終え、シャワーを浴びていると何か気配を感じる。おかしい…貴重品はそれぞれ部屋中にバラバラに置いてあるのに一つの場所から動こうとしない。部屋を間違えたって感じじゃないな…脅かすのも手だけどこれで女子だったら間違いなく退学モノだ。

一通りシャワーを浴び終わって、着るものを着てからタオルで頭を拭く。前方不注意だけど、拭きながら部屋に戻ると、

「遅かったですね…」

？……何だ？声に妙な『違和感』を覚えてそちらを見ると、見知らぬ女性がベッドに腰掛けている。腰まで伸びた金髪に歳相応に凛々しい表情…コイツ、どっかで見た記憶が……。

「あ～……ドチラサマ？」

「取り敢えず座って下さい。ちょっとお話が長いので…」

「へイへイ」

ベッドのすぐ脇にあった椅子に腰掛けると棚の上に足を乗せる。

「で……話戻すけど、アンタ誰？」

努めて砕けた感じで話すと、向こうは言いたいことを整理しているのか、少し考え込んだ後に意を決して切り出した。

自らの使命と、自らの『通り名』を……

「私は『精霊世界』からアナタに仕えるためにコチラに来ました。
アナタ方側の名前で名乗るとするなら……『マジシャンズ・ヴァルキリア』と申します」

……びっくり。

第４話　静かな時間、突然の来訪者（後書き）

第４話、如何だったでしょうか？

シンクロ召喚主体のデッキの概念は自己流なので、ご容赦下さい。

てか、主に『シンクロン』と『ドラゴン』、『魔法使い』しか使ったことがありません。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第5話　明かされた使命、告げられた名（前書き）

さてさて、今回は殴り書きステージ。

勝手にキャラが動き出したので、そのまま投入。

今回のキーカードは、『くず鉄のかかし』

ス「攻撃宣言時に発動して、相手の攻撃を無効化するカードだ」

カ「更に発動後は再びセットされるから1ターン中に1度だけなら無効にできる」

ス「『シールド・ウイング』2枚とこれ3枚あれば5体で攻められても無傷です」

カ「うわ…鬼畜」

ス「うっせ」

第5話　明かされた使命、告げられた名

『マジシャンズ・ヴァルキリア』

そう告げられた名前に俺は覚えがあった。まだデュエリスト駆け出しの頃、コレに泣かされた記憶があるからだ。まったく2体でも邪魔なのに3体出してくるドアホがいたからだ。俺にとってはすっごくトラウマな一枚だ。確かレア過ぎて今じゃ一握りの人間しか持ってなかったはず……。

いやいや、思考を切り替えなければ。

今この子は『精霊世界』と言ったか？龍可さんから聞いてはいたけど、ホントに実在するとは……

「アナタと使命を共にせよ、との師からの命により、この世界でのサポートをさせて頂きます」

「何でまた、俺のトコに？」

「今から数ヶ月前、私達の世界に『ある者』が現れ、『精霊世界』そのものを荒らしていったからです。『エンシェント・フェアリー』様が何とか退けたものの、今度は『現実世界』にまで悪影響を及ぼしたのです」

「それには覚えがあるし、察しがつく……それが何で俺のトコに来るのか、に繋がるんだ」

「……『紅き竜』の導きでもあるのです」

『紅き竜』。

それについては聞いているし、実際に『見た』し、ここに『ある』。

でもあれは『シグナー』…選ばれた者にしか痣が出来ないはずでは？

「確かにその通りです……ですが、アナタという『異端者（イレギュラー）』に『紅き竜』の痣が付いたのがその証……」

証…か。今の俺の背中には『紅き竜』そのものの痣がある。それも完全な『心臓』まで描かれた……俺に発現した理由も、何故俺なのか全く解らない。

「で…その『ある者』ってのは誰なんだ？まさか『ダーク・シグナー』とでも言うのか？」

「いいえ……『精霊世界』から退く際、『エンシェント・フェアリー』様に名乗ったのです……

……『アポリア』…と」

『アポリア』。ギリシャ語で「問題解決能力の欠如」。そんな名前を持つのは一人しかいない。というか知らない。

「やっぱ、アイツに辿り着くのか……」

「彼を知っているのですか!?」

実際には『聞いた』だけだが。義父さんが倒し、仲間と信じていた奴に裏切られ…倒れた。そう聞いている。だが、俺はそれには疑問を抱いていた。確かに『あの頃』に現れたアポリアは倒れた。ならば、『別の時間』に存在する奴は倒されたのか?時間を遡って介入してきた奴…奴等がもし『他の時間』にまで介入していたとするならば…今アイツが現れたことには納得できる。

「成程……そこまでお考えだったとは、流石です」

「唯の推論だ……と言いたいが、そっちに現れたんなら推論じゃなくなる」

確かに出てきたのにはそれで納得できる。以前、義父さんと話し

た事がある。さっきの通り、奴は『過去の時間』に入り込み、過去を変えたとするなら……俺が今ここにいる世界は『平行世界（パラレルワールド）』ではないのか？

俺の推論はこうだ。

アポリアはＺ－ＯＮＥと共に過去へ遡り、改変することで破滅の未来を回避しようとしていた。だが、時間を行き来出来るのなら、『平行世界（パラレルワールド）』への移動も可能ではないか、と。ベクトルさえずらせば、奴等は別の世界に介入し、こちらと同じ時間軸の出来事を改竄する。そうすると、『平行世界』が『平行世界』ではなくなる。違う道を全く同じ車が、同時に、しかも同じ場所で事故を起こせば、それは既に『違う時間』ではなく、『全く同じ時間』、つまり世界が一つの道に繋がる。

「では、未来はアナタ方の世界と……」

「ああ……繋がるだろうな。間違いなく」

「それを未然に防ぐ為に、アナタが此方の世界に来て…『紅き竜』の痣を彼等から受け継いだ、と考えれば納得できるでしょう」

「だが、俺が『異端者（イレギュラー）』であることも納得してもらおうか」

「…？どういう意味でしょうか？」

「俺は……『シグナー』の一人、『不動　遊星』の本当の子供じゃない。血が繋がっていないんだ」

数年前、完全にやさぐれてた俺を引き取ってくれたのが発端だ。それから一緒にＤ・ホイールを組み上げたり、デュエルの相手をし

てくれたりと、俺と一緒に居る時間を極力作ってくれた。親にしてはホントに満点だけど…それよりもあの朴念仁さを継がなくて良かったと、本気で思ったこともあった。

「では、アナタに痣が出来た理由は……」

「実のところ、サッパリ」

手の平を上に向けてお手上げのポーズ。そうすると『ヴァルキリア』も、目に見えて落胆していた。その分ベッドが沈み込んだように思える。

「ま、俺にはやる理由があるし……俺がやりたいからやるんだ。別にそれ以上に深い理由は無い」

「……」

「それに…正直困ってたンだよ…」

「……何が、ですか？」

困ったように頭を掻く俺に疑問符を浮かべる。此処に来て数日の間に起きた不安、不満を簡単に表すと、

「相談とか、今後の対策とか……色々言える奴が居なかったんだよ。だから来てくれて助かる。ていうか、助かったよ…アリガトな、『ヴァルキリア』」

「い、いえ……そんな…」

言いたい事が言えたところで、話題変更。

「そういえば、ここにいる間は何て呼んだら良い？」

「えっと…好きに呼んで頂いて構いません。本来の名はありますが…その、発音に困るというか……言語自体が違う、と言いますか…」

つまり、言えるは言えるが発音自体が不可能、と。じゃあ、考えるとするか…う～ん、

「……」

「……」

期待してるような視線をこちらに向けてるけど、流石に考えられない。さっきまでの真剣な雰囲気からまるで子供のようにワクワクしてる感じに変わってる。基が基だからか？いや、アレについては審議中のはず……

「じゃあ、『ミーア』」

「『ミーア』……」

考え付くのはそれしかなかった。俺の思考回路小っさ……なんてことはいいけど、頬を赤らめたまま、その名を復唱する『ミーア』。

「ギリシャ語で『女性』て意味だ。あまりに安直だろ？」

「い、いえ。とても素晴らしいお名前です……ありがとう、ござ

います…」

首まで真っ赤になるんじゃなかろうか、っていうぐらい赤くなってる。これでも見た目は普通の女の子だもんな……何か一気にさっきまでの表情に戻ったけどどうしたんだ?

「…誰か来るみたいです。人数は二人…いえ、三人です」

ブルー寮で、三人組で、こっちに来るっつったら…今朝のか……ってぇ!!!!!

「兎に角隠れてくれ」

「何故です?」

いやアナタ、さっきまでの顔はドコ行った?ギャップありすぎて逆に怖いわ!

「『精霊世界』から来たんなら何か出来ないのか?何かこう、人寄せ付けないとか」

「それは出来ますが…詠唱に時間が掛かります」

「どれぐらい?」

「完全詠唱で一時間ほど」

「長いわ!!」

肝心なトコでこんな漫才してる場合じゃない。コレで見つかったら

一体何時間小言に付き合わされることか……考えただけでゾッとする。

考え付くのは……鍵閉めて、電気消す。今はコレが精一杯。ドアの隅に移動して、ノックをやり過ごす。

『おかしいわね…さっきまで明かりが点いてたのに……』

『ほら、だからもう寝る時間だって言ったじゃない…』

『では、また日を改めて…ということで…』

『なんっか、スッキリしないのよね～』

そこでやっと、足音共に喧騒が去っていく。聞こえなくなった所で、ようやく溜息。た、助かった……。

「何故明かりまで消したのですか？」

落ち着いたところにミーア。服装がワンピースのみだからか、月明かりに照らされ、それによって出来る影が彼女のボディラインの良さが窺える。…冷静に解説してる場合じゃない。

「悪いが、今日はここまで。何かどっと疲れた」

「そうですか……お疲れ様です…どちらへ？」

俺はベッドへは向かわず、部屋の中央辺りにあるソファの上に寝転ぶ。勿論スペアの毛布はソファの下に収納済み。それを羽織ると頭の後ろに手をやり、足の組む。

「俺はこっちで良い。ミーアはベッドで寝ろ」

「いいえ、そのような事せずとも「悪いがコレだけは譲れない。諦めろ」……解りました」

横目で見ると肩を落としてベッドへ向かう。そんなに落ち込むことか？でも、流石にいきなり同じベッドでって訳には行かないし……ま、いっか。今後の事は明日から考えよう。

今はもう……疲れた。

この時点で、俺が此処に来て四日目の夜が終わりを告げた。

第5話　明かされた使命、告げられた名（後書き）

精霊登場編でございました。

納得していない人も多々いらっしゃるかと思いますが……敢えて本音は伏せます。

感想、及びご指摘ありましたらお願いいたします。

第６話　次の運命、動く力（前書き）

第６話の投入。最近デュエルの勘を取り戻す為、ＴＦ６を攻略中。

ではキーカードを。

今回は、『棘の壁（ソーン・ウォール）』。

ス「自分フィールド上の植物族モンスターが攻撃された時に発動し、相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊する」

カ「植物族限定の『聖なるバリアー ミラーフォース ー』だな。本家と一緒に運用すると、全体除去が二度も出来る」

ス「ただ…『ブラック・ローズ・ドラゴン』には全く意味を成さないけどな」

カ「あれ、ドラゴン族だし…」

第6話　次の運命、動く力

朝。

眠い目をこすって、体を起こすと、カーテンの隙間から朝日が差し込んでいる。

私一ミーアがここに来てからまだ数時間しか経っていないのに、こんなに静かに眠れるとは……。

結局あの人はベッドを譲ったままアチラに寝ているけど…ってあれ？

部屋の中央辺りのソファに誰も居ない。おかしいな…確かに寝てる間に何処か行った様子は無いけど。テーブルには彼の所持しているデッキにデュエルディスク…必要なものは置いてあるのに、当の本人はいない…。

ベッドを離れ、周囲を見渡すも居ない。やっぱりおかしい……丁度中央あたりに辿り着くと、何処からか寝息が聞こえる。

「……？どこから……」

やっぱり何処にもいない。もしかして……、

床に目をやると、そこにはうつ伏せで寝ている男『不動　カイト』がいた。

「ヒッ！……」

悲鳴を上げそうになるも、それを抑えて後ずさる。というより、何

という寝相だろうか……ソファから落ちても普通気付くはずだろうに…。
でも、何だろう……。何かとても…

「ぷっ…あはははは……あはははははははははっ」

とても想像が出来ない姿だからだ。理知的に見えたり、おどけている様な仕草は歳相応なのに……なのに、なんでこんなにおかしいんだろ？

「……う～～ん…」

「あはははははは……ふふふっ…あはははははっ」

それから数分して彼が目覚めても、私の笑いは止まらなかった。

ったく、今日に限ってウルセェ目覚ましだったぜ。

朝の七時過ぎ。どうにも喧しいと思って目を開けると、腹を抱えて馬鹿笑いしているミーアが俺の頭の上にいた。ソファで寝ていたはずがどうして床だったのか…全く謎だ。

「ほんっと迷惑な話だ……とは言っても、折角の協力者だ。仲良くやっていくか…」

助かったのは本心だ。ここにいる以上、デュエルからは離れることは出来ないし、何かしらの予兆を探せば辿り着くだろうけど、何時、何処で、どんな事が起きるのかも全く予測が立たない。そこに『精霊世界』からの助力があったとあらば、それこそ本当に百人力って奴だ……。今日の夜辺りにでも対策を講じるか……今後の生活に関しても、だけど。

教室に入った俺を待っていたのは、やはり昨日の三人…確か……『ジュンコ』に『ももえ』だったか?何かやけに明日香にくっついて行動してるけど、お前等百合か?

「そっ、そんなワケないでしょ!?馬鹿じゃない?」

「そうですわ。全くもって心外ですわ」

二人して反論するも、明日香に視線を送っても「ヤレヤレ」といった表情。この娘等はこうなると止まらないってか……誰が『地獄の暴走召喚』を発動しろと言った?こっちは特殊召喚するのなんていないぞ。

「で……お前等、何の用だ?言っておくけど、今、俺は機嫌が悪い」

本当に、最悪なほどに、絶望したいほどに。

「何の用って……アンタ、昨日部屋に行っても出なかったでしょ?」

「ん……何時の話だ？」

勿論嘘だ。そん時なんて慌てふためいて咄嗟の行動で凌いでいたのを憶えているけど…やっぱお前等か。

「ね？言ったでしょ…彼は早い時間に寝ちゃうから行っても意味ないって」

「確かにそうですけれども…子供でもそんなに早くは寝ませんわよ？」

「俺は早寝なんだよ。で……一体何だ？そういう話する為じゃねえんだろ？」

「当たり前。くだらない話するぐらいだったら……デュエルで話しつけようって思ってね」

そうだった…ここはそういう場所だった。何から何までデュエルに繋げるんだった……今日、頭痛薬買って帰ろうかな？

「何時やるんだよ？まさか今からなんて馬鹿みたいな事言う気か？」

「んなワケないでしょ？放課後、ブルー寮前で勝負よ！逃げたら承知しないからね！」

「ったく…またあんなん喰らうかよ…てか、そうなんべんも喰らってたまるか！！」

「これで決まりですわね…」

もうイライラを通り越して、何も言えない。こういうのばっかか？
昔のアカデミアって……。プライドの凝り固まった奴等と三年間一緒かと思うと、やっぱり頭痛薬が欲しい。

昼休み・教室内。

「で？何故お前等がここにいる？」

「いいじゃんいいじゃん。気にすんなよ」

「そうッスよ。気にしない気にしない」

そっちが気にしなくてもこっちが気になるんだ。ってか、お前等の考え…もう解ってるし。

「『アレ』の事は教えねえぞ？こっちはこっちで忙しいの」

「そう言わずに、なあ？教えてくれよぉ～」

しなを作るな！鬱陶しい。後ろにいる三沢に助けを求めるも、「デュエルすれば解るかもな」とありがたい言葉をよこしやがる。そうやって俺で遊んで楽しいか？貴様等。

「この野郎共、今すぐ潰して「お～い、不動ク～ン」…あぁ？」

呼ばれて教室の扉の方に視線を向けると……おい、精霊（ミーア）。何で制服着てるんだ？しかも友達のように呼んでるけど、まだ会って十数時間しか経ってないぞ？妙にフレンドリーだな。

「不動君、あんな可愛い娘と知り合いなンスか？」

「まあ、知り合いというか……なんというか…」

「ん？あの人……何処かで見たような…」

マズい！！三沢の知識が働き始める前に早く行かなければ……思考を巡らせ始めようとした三沢の口にドローパン（ハバネロ入り）を突っ込む。一噛みした瞬間、奴の顔が赤くなった刹那、青く変色した。

「三沢、それやるよ。てわけで、俺はここで抜けるわ」

「ズルイっすよ～」なんて聞こえるか、代われるわけ無いだろ。それともメガネ…代わりに『世界』救ってくれるか？

「ごめんなさい。教室まで来ちゃって……って、何処行くの？」

「……」

ただただ無言で教室から出て行く。それについて来るミーアを視界の隅に捉えると、前にもこんな…ああ、入学初日にあったな、そんなん。

人気のない廊下に辿り着くと、ミーアに問いただす。

「おい、一体何の用だ?」

「一応今朝からの報告をしようと思って……」

「今朝からの?」

頷くミーア。はて?部屋を出たのは俺だけだったが、コイツ何処に行ってたんだ?

「今朝から二時間かけて目ぼしい場所に『サーチャー』を仕掛けてきたんです。通常の人間には反応しませんが、『ソレ』以外の物全てに反応するよう仕掛けました」

「『探知機(サーチャー)』?」

「と言っても、魔法概念での『サーチャー』です。目には見えませんが、発見の際には私の頭に報せられるようにしたんです」

そんなん出来たのか?流石魔法使い族。地味な作業でも光って見える。で?

「その制服はどうした?まさかかっぱらってきたのか?」

「それこそまさかです。寝ている間にアナタの記憶を読取（ロード）して魔法によって作り出したんですよ。似合ってませんか？」

その場で一回転すると、綺麗な金髪がソレにあわせて円を描く。その制服でその動き……反則って言葉、知ってる？

「似合ってはいる。でも、あんまり制服で出歩くなよ？」

「何故ですか？」

だから、その無表情に一瞬で切り替わるなって。ちょっと怖い。ホントに怖い。

「そういう作業に出るなら良いけど、あんまり出てくると……お前、人の目に見えないようには出来ないのか？」

「と、言いますと？」

「十代の横に『ハネクリボー』が居たんだが、皆気付かない様子だったんだ。それはお前は出来ないのか？」

さっきの会話中でも、騒ぎに入るように飛びまわっていた『ハネクリボー』だけど、俺と十代以外には全く見えていない様子だった。それって、何か基準みたいなのあるのか？

「『実体化』と『精霊化』ですか……可能ですが、我が師の命では『常に実体化し続けることで魔力の向上を図れ』と……」

逆に魔力使い過ぎじゃね？それ……てか師匠サン、この娘に何させ

る気ですか？

「逆にこの姿でも、私は構いません。こうして不動クンの…『主』の役に立てるのなら、この姿も苦ではありません」

ま、止めはしないさ。何つったって……『パートナー』だから、な。

「それと…一つ、お願いがありまして…」

「ん？何だ？」

「あの……デュエルしてるところを「ここに居たわね！！『不動カイト』！！」…っ！！」

ミーアの言葉を遮るようにして、俺の後ろに仁王立ちしているジュンコ。ど・い・つ・も・こ・い・つ・も……。

「ジュ、ジュンコ、止めなさい。彼を怒らせたら…」

「すみませんが、それは聞けません…明日香さんに『力』で押さえつけたこの獣に鉄槌を下すまでは」

す〜、は〜。

うん、良いよね？

「ブツクサ言ってねえで、本音言ってみろよ？『潰したくて仕方ねえ』ってよ…」

「「「え？」」」

明日香、ジュンコ、ミーアが一斉に視線を俺に向けてくる。そりゃそうだ、さっきよりも『声』が違うから。

「黙って聞いてりゃ、人を動物扱いしやがって……てめえの脳味噌も同じように動物だろうが。聞こえの良いこと言ってるけど、やってる事はそこらの不良と変わらねえよ。気に喰わねえからってんだろ?だったら放課後なんて言わずによ、ここで、今すぐやっても良いんだぜ?てめえが勝ったらそっちにはこの先関わらねよ。逆にこっちが勝ったら、こっちの事には手出し、口出しすんな……解ったか?」

「ふ、不動…君?」

「あ、アンタ……」

「ね、ねえ…不動クン?背中……」

背中?背中がどうした?なんか熱いんだけど……ミーアが窓に映っている俺の背中を指差す。その背中には真っ赤に輝く『竜』が姿を現していた。

「げっ!!ヤバ……ってコレ、どうやったら消えるんだ?」

「……さあ?」

意外に冷たいんですね、ミーアさん。乾いた笑いと共に、『竜』の痣も消えていく。はぁ~、やっと消えた……しかし、なんで現れては消えるかな。

「人様の邪魔してるぐらいなら、自分の事どうにかしてから掛かって来い。それでも邪魔するんなら…全力で『叩き潰す』!!」

これで宣戦布告完了。ジュンコが歯を食いしばってコチラを見てるけど……ハッキリ言って、他のブルー生徒から見れば『無様』だろうな…絶対。

その放課後、予定通りに『カイト　ＶＳ　ジュンコ』の決闘（デュエル）が始まろうとしていた。

第6話　次の運命、動く力（後書き）

第6話、投入完了です。

書いてる途中、「コレ、遊戯王か？」とか思っちゃいました。

やっぱデュエル描かなきゃ締まらないッスね。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第7話　カイトの実力、絆の力（前書き）

第7話、投入です。

今回のキーカードは、『スターダスト・ドラゴン』。

ス「自身をリリースして、破壊効果を無効にする誘発効果と、その効果適用時に自身を特殊召喚する蘇生効果を持つレベル8のシンクロモンスター」

カ「義父さんのエースカードにして、破壊耐性に非常に強い効果を持ってる…てか、やっとお出ましか」

ス「TF6での私のエースカードでもありますよ。最初に見たときから気に入ってます」

カ「レアリティは落ちてるけど、その分使い回しが良いもんだからな。素材に縛りが無いし」

第7話　カイトの実力、絆の力

放課後・ブルー寮前

「「決闘（デュエル）！！！」」

ジュンコ　ＬＰ＝４０００

カイト　ＬＰ＝４０００

約束のデュエルがいま始まった。ギャラリーは少なく、事情を知っている明日香、ももえ、ミーアに加え、十代、メガネ、三沢まで見に来ている。あんまり人の多いところでデュエルはしたくないんだが…そういえば月一のテストって実技も含まれてるんだっけ？今から憂鬱だ……

「何百面相してんの？私の先攻なんだから、ちゃんとしなさい」

出来るかっつの。やる気満々なのはお前だけだ。あの後、何で怒ったのかをミーアに問いただされた結果、反省しなさいとの事で、デュエルを見せる事に。まあ、『パートナー』の実力が解らなきゃ、何も出来んわな。

「私のターン、ドロー！」

カードをドローした後、塾考。どうやら最初から切り札、って訳じ

ゃないようだ。運が良いことにこっちの手札も良くない。何せ罠（トラップ）４枚にモンスター１枚じゃどうしようもない…義父さんからは「デッキの調整も怠るな」と言われ続けていたので、「このデッキ」に関しては、充分な戦略と調整を毎晩欠かさなかった。それが早寝の理由。だって、大事な肉親のデッキだぞ？大事にしないほうがおかしい。

ハラが決まったのか…ジュンコがカードを3枚ほど手札から引き抜く。

「私は『エルフの剣士』を攻撃表示で召喚。更に手札から永続魔法、『連合軍』を発動。自分フィールド上の戦士族・魔法使い族１体につき２００ポイント攻撃力がアップする」

エルフの剣士　ＡＴＫ＝１４００　ＤＥＦ＝１２００　↓ＡＴＫ＝１６００　ＤＥＦ＝１２００

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

成程…彼女のデッキは戦士・魔法使いの混合か、あるいはどちらか一本……か。下手をするとこっちのカードを奪われる可能性もあるけど……憶測じゃデュエルには勝てない。

「俺のターン！」

デッキから引いたカードは…『これ』なら機先を削ぐことができる。

「俺は手札より魔法（マジック）カード、『手札抹殺』を発動！」

「なら…リバースカード、オープン！速攻魔法『サイクロン』を発動！！」

それ、意味無いよ？だって……

「魔法に対するチェーンで『サイクロン』は無駄撃ちだぜ？そのカードの効果はただ『破壊する』だけ。『無効』になるわけじゃない」

「しまった！……しくったなぁ…」

「まだまだ甘い…」

手札を墓地に送り、同じ枚数分デッキからカードを引く。こっちは五枚、向こうは二枚。このアドバンテージはキツいぞ？

「ジュンコ、焦ってるわね」

「相手の手の内が解らないんですもの…無理はありませんわ」

「なあ、翔。何で『サイクロン』じゃ防げないんだ？」

「アニキ……『サイクロン』は「『サイクロン』の効果は相手の魔法（マジック）・罠（トラップ）を一枚選択して破壊する速攻魔法。ただし速攻魔法である特性上、破壊効果のある罠（トラップ）のように無効化することまでは出来ない。例え選択できても、発動までは止められない……今のもそう。チェーン上ではまず、『サイクロン』で破壊され、その前に発動していた『手札抹殺』が発動。でも『サイクロン』には無効化する効果までは付与されてない」……」

翔の隣に居たミーアが淡々と解説に入る。それにはミーア以外の人間はただただ驚いている。まるで以前から知っているかのような…
…そんな話し方だ。

「このアカデミアに居るなら、感覚も大事だけれど……思考と反射の両立も大事よ？遊城十代クン？」

「これならいける、か……俺は手札から、チューナーモンスター、『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

ジャンク・シンクロン　ＡＴＫ＝１３００　ＤＥＦ＝５００

現れたのはオレンジ色の機械仕掛けの人形。腹部にはスターターのグリップが付いていて、ジャンク品のようなエンジンを背負っている

「なぁに？そのちゃっちいモンスターは？アンタ、そういうのしか持ってないの？」

「アホが…『ジャンク・シンクロン』の効果発動。このカードが召喚に成功した時、墓地に存在するレベル２以下のモンスターを守備表示で特殊召喚できる。来い！『ボルト・ヘッジホッグ』！！」

墓地のゾーンから『ボルト・ヘッジホッグ』が守備表示になって現れる。背中に歪に刺さった螺子がフルフルと挙動にあわせて揺れる。

ボルト・ヘッジホッグ　ＡＴＫ＝８００　ＤＥＦ＝８００

「何時そんなの墓地に……最初の『手札抹殺』ね！？」

「可愛いですわ～～」

「でも、レベル３に対して今のモンスターはレベルが２……それにチューナーモンスター、って…」

「それは『シンクロ召喚』に必要不可欠なモンスターだよ」

「三沢君…どういうこと？」

「以前教えてもらったんだが、あの『シンクロ召喚』にはチューナーと名の付くモンスターと、それ以外の素材となるモンスターのレベルを合計したモンスターを召喚する……と聞かされたよ。ここからは俺の考えだが…そのレベル配分こそ、あの『シンクロ召喚』の要なのかもしれない」

「でも三沢君……モンスターだって全てのカードってワケじゃないんだし…あまりその召喚は出来ないんじゃ…」

「だが奴は、「その気になれば五体全てがシンクロモンスターで埋められる」と言っていた。それが本当なら……俺の予想は、奴の実力の十分の一かもしれない」

「レベル2の『ボルト・ヘッジホッグ』に、レベル3の『ジャンク・シンクロン』をチューニング！」

『ボルト・ヘッジホッグ』が飛び上がると同時に、『ジャンク・シンクロン』がスターターを引っ張り、エンジンが唸りを上げる。その瞬間、『ジャンク・シンクロン』が三つの輪に変換された。

「『集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ』！！」

三つの輪が二つの星を繋いで一つになった時、紫色のロボットが白いマフラーを靡かせ、空高く舞い上がる。

「シンクロ召喚！！！出でよ……『ジャンク・ウォリアー』！！」

ジャンク・ウォリアー　ＡＴＫ＝２３００　ＤＥＦ＝１３００

「これが…『シンクロ召喚』。でも、墓地から拾い上げてもレベル5が限界なのね！？」

「だったらまずは先制だ。『ジャンク・ウォリアー』で、『エルフの剣士』を攻撃！！『スクラップ・フィスト』！！！」

右手に填め込まれたナックルダスターで、妖精界の剣士を打ち砕くと、大きな爆発が生じる。それは攻撃宣言を受けたジュンコにも衝

撃が走る。

「うあっ……クッ！！！」

ジュンコ　ＬＰ＝４０００　→　ＬＰ＝３３００

「やったぁ！！」

「まずは先制だぜ！！そのままやっちまえ！」

「カードを二枚伏せ、ターンエンド」

やっぱ義父さんみたいには上手くできないか……確か過去に攻撃力が５５００まで上がったって聞いたけど…それを見たら何だか驚くどころの話じゃなくなるぞ。

「私のターン、ドロー！」

やたらと血気盛んだよね、あの娘。どうやったらそんな怖い顔でデュエル出来るのか……何か、このデッキ使ってると落ち着く。普段はあちらこちらに考え事が一杯あるのに、それが薄らいでいって『デュエル』に集中しやすくなってってる。何だろ？……こんなにも落ち着くなんて……

大きく深呼吸すると、俯いたままジュンコに話しかける。

「…おい」

「何よ!?」

「……肩の力抜けよ。そんなんじゃ自分のエースカードは引けないぜ?」

「黙ってて!!」

じゃあ、何喰らっても文句は無いんだな?よしＯＫ!次のターンで滅茶苦茶に叩き潰してやる。

「私は『ビッグ・シールド・ガードナー』を守備表示で召喚。更に魔法(マジック)カード、『戦士の生還』を発動。これにより、私の墓地から戦士族モンスター1体を手札に加え「さっきの手本を見せてやる。リバースカード、オープン。速攻魔法『ダブル・サイクロン』発動」ちょ、ちょっと!?」

ビッグ・シールド・ガードナー　ＡＴＫ＝１００　ＤＥＦ＝２６００

「相手と自分フィールド上の魔法(マジック)・罠(トラップ)カード1枚ずつ選択して発動する。俺のもう一枚の伏せカードと、アンタの『連合軍』を破壊する」

赤と黄色の竜巻が、伏せカードと『連合軍』を巻き上げ、ぶつかるように破壊される。しかも、伏せたカードすらもこの布石。

「今破壊された伏せカード『リミッター・ブレイク』の効果発動。

このカードが墓地に送られた時、自分の手札・デッキ・墓地から『スピード・ウォリアー』1体を特殊召喚する。現れろ！『スピード・ウォリアー』！！」

砕け散ったカードが再構成され、その中からブレードを履いた戦士が滑り込むように召喚される。

スピード・ウォリアー　ＡＴＫ＝９００　ＤＥＦ＝４００

「すげ……まさかあんな形で召喚するなんて…」

「言ったでしょ？思考と反射の両立、って。あんなの誰でも出来るわ。特にそこの三沢クンなら、ね？」

「流石に召喚までは行かないが……だがボード・アドバンテージでも、不動が有利。やっぱり凄いな。アイツは…」

「そうでもないわ。彼も最初はただボロボロに負けてばっかりだったもの」

「「「「「嘘！！？」」」」」

「誰だって最初から強いわけじゃない……自分の力を知ってそれでも負けない戦い方を見つけた。それが、あの人のお義父（とう）さんと同じ、ローレベルモンスター同士のシンクロ召喚……」

伏せておいて正解だな。『ダブル・サイクロン』は『サイクロン』のようにエンドフェイズ時には使えないし、自分の場にカードが無ければ発動しない。義父さんが持ってる『スクランブル・エッグ』みたいなのも良かったけど、能動的に使うものじゃない。扱いが難しいのも困りものだ。

「私はこのままターンエンド（これならアイツのモンスターでも破壊されないし、次のターンまで持ち越せる。そうすれば『光帝クライス』で破壊できる）」

手札に良いのが来てるようだけど……顔に出てると読まれるって。てか、こういう駆け引きには向いてないよ。戦士族は装備も含めてビートダウン戦法が出来るんだ。単体じゃ…しかも『連合軍』が無いんだぞ？

「俺のターン」

そのカードは『ワン・フォー・ワン』。良し、引導を渡してやる。というより、俺なりの『絆』の力を見せてやる。

「手札から魔法（マジック）カード、『ワン・フォー・ワン』を発動」

「な、何？そのカード…」

「手札のモンスターカードを墓地に送る事で、デッキ・手札からレベル1のモンスター1体を特殊召喚できる。『チューニング・サポーター』を墓地に送り、デッキから『ロードランナー』を攻撃表示で特殊召喚！」

デッキから光と共に、桃色の小鳥が羽ばたきながら降りてくる。

ロードランナー　ＡＴＫ＝３００　ＤＥＦ＝３００

「そして手札からもう一枚、魔法（マジック）カード『シンクロキャンセル』を発動！」

発動の瞬間、『ジャンク・ウォリアー』が光に包まれ、融合デッキに戻っていく。

「今度は何！！？」

「このカードは、自分フィールド上のシンクロモンスター1体をエクストラデッキに戻し、そのシンクロ素材となったモンスター1組が墓地に揃っていた場合、その素材となったモンスターを墓地より特殊召喚する。コレにより、墓地の『ジャンク・シンクロン』と『ボルト・ヘッジホッグ』を特殊召喚！」

ジャンク・シンクロン　ＡＴＫ＝１３００　ＤＥＦ＝５００

ボルト・ヘッジホッグ　ＡＴＫ＝８００　ＤＥＦ＝８００

残像のように残っていた『ジャンク・ウォリアー』が分裂して、『ジャンク・シンクロン』と『ボルト・ヘッジホッグ』の姿になり、フィールドに現れる。

「おいおい……」

「もしかして……」

「更に、手札より『ソニック・ウォリアー』を通常召喚！」

ソニック・ウォリアー　ＡＴＫ＝１０００　ＤＥＦ＝０

『スピード・ウォリアー』と違い、鋭角的なフォルムの無骨な戦士が召喚される。てか、狙ってやってみたけど、これって壮観だな。ローレベルとはいえ、フィールドに５体も埋まってるんだから。

「や、やりやがった…フィールドに５体も並べて……」

「で、でも『ビッグ・シールド・ガードナー』の守備力は２６００……どのモンスターでも倒せませんわ…」

「手札より魔法（マジック）カード、『地砕き』を発動。お前のフィールドの

守備力が一番低いモンスターを破壊する」

「ま、待った待った…」

地面が割れると、『ビッグ・シールド・ガードナー』が何も抵抗できずに落ちて行く。そして無情にも、割れた地面が轟音と共に閉じられた。あのカードは裏側守備表示であれば効果は無効化される。だが彼女は表側表示で召喚してしまったのだ。あのカードは裏側表示であればこそ効果が活きる。それを只守備力だけで判断するとは……。

「おいおい…これでジュンコの場ががら空きだぞ？」

「それでもＬＰは３３００も残ってる……例え場のモンスター全てを使ってのシンクロ召喚でも１体では届くかどうか……」

「お前等に見せてやる！これが俺達の『絆』の力だ！！レベル２の『ソニック・ウォリアー』に、レベル３『ジャンク・シンクロン』をチューニング！！」

今度は『ソニック・ウォリアー』を包む三つの輪。だが心なしか、ギャラリーの目が釘付けになってる。次はどんなモンスターなのか、と……ゴメン、期待を裏切ります。

「『集いし星が、新たな力を呼び起こす。光差す道となれ』！！」

そして今一度、紫の戦士が舞い上がり、拳を振るわせる。

「シンクロ召喚！！！出でよ…『ジャンク・ウォリアー』！！」

ジャンク・ウォリアー　ＡＴＫ＝２３００　ＤＥＦ＝１３００

「はっ！！何かと思えばまたそのモンスター？身構えて損したわ。やっぱりローレベルはローレベルね、役にも立たない」

「それは違う…例えどんなモンスターに破壊されても、どんなにレベルが低くても……俺を支えてくれる、ずっと一緒に闘ってくれる仲間達だ！」

「「「「「……」」」」」

「それでこそ私の『主』です。不動カイト……」

「墓地に存在する『ソニック・ウォリアー』の効果発動。このカードが墓地に送られた時、自分フィールド上にいるレベル２以下のモンスターの攻撃力は５００ポイントアップする」

スピード・ウォリアー　ＡＴＫ＝９００　ＤＥＦ＝４００　→ＡＴＦ＝１４００　ＤＥＦ＝４００

ロードランナー　ＡＴＫ＝３００　ＤＥＦ＝３００　↓　ＡＴＫ＝８００　ＤＥＦ＝３００

ボルト・ヘッジホッグ　ＡＴＫ＝８００　ＤＥＦ＝８００　↓ＡＴＫ＝１３００　ＤＥＦ＝８００

「そして、『ジャンク・ウォリアー』の効果発動！！」

「嘘！！？ソイツも効果モンスターだったの？」

「シンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在するレベル２以下のモンスターの攻撃力の合計分、攻撃力がアップする！『パワー・オブ・フェローズ』！！」

ジャンク・ウォリアー　ＡＴＫ＝２３００　ＤＥＦ＝１３００↓ＡＴＫ＝５８００　ＤＥＦ＝１３００

「こ、攻撃力５８００！！！？」

全てのモンスターから光を注がれ、攻撃力を上げた『ジャンク・ウォリアー』。この効果の真髄こそがこのデッキの象徴、俺のデュエルの『証』。最近、デュエルやってても一撃で終わってるような…ま、良いか。気のせい気のせい。さっきのこの娘の一言だけはちょっと許せそうに無い。

「悪いが容赦なく行かせてもらうぜ！！『ジャンク・ウォリアー』で……直接攻撃（ダイレクト・アタック）！！！」

回転しながら上昇し、何ｍか上で拳を構えると、両肩のブースターを使って急降下してくる。ジュンコ目掛けて。

「うぁ……うわあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

「『スクラップ・フィスト』ォ！！！」

ジュンコ　ＬＰ＝３３００　→　ＬＰ＝０

日も暮れ始め、デュエルを終えた俺達はフィールド内で談笑していた。あの後は正直居たくなかった。

ノーダメージ、しかも戦術どおり行かなかったジュンコがあろうことか、泣き出してしまったのだ。最後はちょっとやりすぎたと思ったけど、それでも全力で応えるのが俺のポリシーなんで、ご容赦下さい。てわけにもいかず、罰として全員分のジュースを買って来い、

と明日香に命じられ、『一人』で買いに行かされた。全員分は辛いんだぞ?そうして皆で談笑を始めると泣いていたジュンコも笑顔に戻り一段落。

「でも、スゴいな。今度、俺ともデュエルしてくれ」

「ま、気が向いたらな…」

「ホント、アニキはデュエルバカなンスから」

「でも、それが十代の良いところだろ?」

なんてな事を話して数分。それぞれの寮に戻り、明日香達とも別れて部屋に戻る。取り敢えずは勝ったものの……アレは何だったんだ?妙にクリアな感覚…そして、反射的に身体がついてくる。何だろ?

「『主』……」

「……って、俺の事か!?」

思考から戻ると、変な事を口走るミーア。何で『主』?俺、そんな偉いことしたか???

「何を以ってその呼び方なんだ?」

「いえ、『精霊世界』から来た以上、誰かを支え、見守っていく存在です。それは媒介が無ければ意味が無い。そしてその媒介を…貴方は既に持っている」

「持ってるって……まさか！？」

義父さんのデッキ・サイドデッキの中身を全部確認すると……いやがりましたよ、『マジシャンズ・ヴァルキリア』。しかも何故かサイドデッキに。

「それはもう貴方自身。肌身離さず持っている事で、私の『守護』によって護られます。これで名実共に我が『主』となりました」

いやいや……ミーアさん？

「はい？何でしょうか、主」

その言葉に俺はミーアを指差す。それには流石にビックリした様子で俺を見つめる。

「それ、出来れば止めてくれ。あと、俺はミーアに命令する為の主には…絶対ならない」

「何故、ですか？」

「主従関係じゃなく、お前は、ミーアは俺の……『パートナー』だ」

第7話　カイトの実力、絆の力（後書き）

キーカードと内容が合ってませんが…すみません。

やっぱデュエルは小説にすると、長い。

これも勉強しなければ。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第8話　独自申請、再会の歌姫（前書き）

え～……今回に関しては、申し訳ございません。

勝手に脳内で動き始めた結果、おかしな事が発生しております。

この話に関しては、不快に思った方は「戻る」、もしくは感想・ご指摘の欄に一言お願いします。

今回のキーカードは……無いです。

カ「無いのかよ！！？」

ス「たまにはいいじゃない。こういうのも」

カ「意外と楽しみにしてる人が居たらどうする！？」

ス「そん時はそん時、って事で…」

カ「……」（パシッ）　↑頭を叩いた音

ス「叩いたか、キミ」

第8話　独自申請、再会の歌姫

翌日。

起きてからというもの、ミーアが何か余所余所しい……必要以上に話したがらない。はぐらかしてはサーチャーの様子がどうとか言って部屋を出て行く。行くのは良いけど、頻繁に出て行き過ぎ。しかも数分おきに出て行く始末。

（俺……何かしたか？）

どう考えても…思い当たる節が無い。てか、そうなる理由を教えてくれ……。

昼休み。

何故か校長室。Ｗｈｙ？……鮫島校長の横には何故かクロノス先生…この人の顔を見てると殴りたくなるのはどうしてだろ？

「折角の休み時間に申し訳ない…実は君に話があってね。隣に居るクロノス先生に勝ち、非公式ながらも負けなし、と聞いてどんな生徒か見ておきたくてね」

よくもまあ、そんな建前がツラツラ出てくるものだ。『サテライト』のガキでもそんなん馬鹿にされてると取るぞ。んな考えはさておき、呼ばれた理由は一つ。

「校長、そんな建前は良いでしょ？」

「おや、バレてましたか。では単刀直入に聞きます。あの『シンクロ召喚』とやらは一体何ですか？」

どうやらクロノス先生がチクッたようだ。しかもこの教師、ブルーの生徒を贔屓しているらしい。あくまで噂だけど、な……さて、どうしたものか？話してもいいが、そこの『軽口（クロノス）』をどうにかしないと……

「話すにあたって二つほど条件が…」

「何でしょう？」

「まずはクロノス先生には退室していただきたい」

「な、何故なノ～ネ！？」

居て当然みたいな言い方するなし。しかもそれだけのことで思いっきり憤慨してるな……もっともらしい理由としては、

「このお話をするにあたっては、校長と俺だけの話にさせていた

だきたいんです。無用に情報を流したくない内容なんですよ」

「……そうですか。では、クロノス先生…」

「わ、解りましたノ～ネ……」

やっぱり上には逆らえないらしい。間接的に追い出したんだ…これで話せるな。

「それで、もう一つの条件は…？」

「それはお話が終わった後にして……まず、『ありのまま』の事を話します」

授業が迫っている事も忘れ、俺は校長に話を切り出した。

『シンクロ召喚』が未来のデュエルで使われている事。

それが下でそこから先の未来が崩壊しかけたこと。

そして、自分の『使命』を……

話し終わったのは一時間ほど。

「これが、俺自身の『ココ』にいる理由です」

そう言うと、校長は深く、深く溜息を漏らした。そりゃそうだ、誰もこんな話信用しないだろ…でも、現実に『シンクロ召喚』が噂として横行してるんだ。信じざるを得ないだろう。肩で大きく溜息をした校長が口を開く。

「成程…凡そは理解しました。ですが、もしこの時代でなければどうするのですか？」

「その時は他の時代に飛びます。干渉し過ぎない程度には消えますよ」

『消える』。それはこの時代から自身を抹消する事。かといってそ

んな便利な事はできないが、神隠し程度にはとられるか。

「……」

「幸い、ここには『三幻魔』があるようです……まずはそこから調べます」

「!!?知っているのですか?」

「さあ……流石に場所までは。ただ、伝承レベルのものは調べさせてもらいますよ」

ここにだって図書室ぐらいはあるだろう。そこで一般生徒が閲覧できないような書物があるならそれを調べる。そしてその事を校長に報告すれば良いだけ。リスクはほとんどないし、逆にこちらが得る情報は多分に増える。情報戦だけでも『相手』に二歩先をいかなければいけないだろうし。

「良いでしょう。古書室での閲覧は許可します。ただし、持ち出しは厳禁なので…」

「それは解ってます。それと、ここでもう一つの条件を提示します」

「何かな?」

「俺のサポートをする為に来た奴が一人、そいつにアカデミア島での行動を認めていただきたい」

これがもう一つの条件。情報と調査…この二つを両立させるには一

人では無理だ。ともすれば必然と一人増える……。

「その方は今、どちらに？」

「大方、下調べしたところを再度回っている頃でしょう。夕方には合流する手筈なので…」

これは嘘。朝からずっと話しかけづらかったのだ、何処行ったなんて知るか。

「では、その方の行動を許可しましょう…何分学校としても敷地としては広いので私も把握できていない箇所があります。何かありましたらその都度報告してください」

解りました、と会釈すると校長室を出る。流石にクロノス先生は居ないか…いや、居たら逆に怖いな。授業以外は何してんだろ、あの先生。

「ああ、すみませんが…」

奥から校長が呼ぶ。けど、こっちの用件も校長の用件も終わったはず……何だか嫌な予感しかしない。

「何か？」

「いえ、良ければで良いんですが……ある人の校内案内をお願いしたいのですが…」

「それって、先生方の仕事では？」

「本来はそうなのですが…それには少し事情が違うのです。このデュエルアカデミアはプロデュエリストを育成する公的機関ですが……それを『子供のゲーム』だとか、『大の大人が必死にする事ではない』という風潮が少なくありません…」

「つまりイメージアップの為…ですか？」

『あの人』もよくそんな世俗的な事を許可したモンだな…

「そうです。そしてそのイメージキャラクターとして、『ある』有名人をこの学園にお呼びしたんです。本来はポスター用の写真撮影なのですが…この学園のイメージを一新するにはどうしても・と」

「ふ～ん…で、その案内役に俺、ですか？」

「流石に生徒には申し訳ありませんが、この件に関しては公欠扱いにしますので」

欠席扱いでも…良いか。ほとんど基礎的なことしか教わってないし、それについては別段困らない。が、他の授業に関してはおいそれと休めそうに無いかも…特に『錬金術学』。アレ、何で通常授業として組み込んだ!?

「良いでしょう…お受けします。が、それは『相手』によります」

そりゃあ、強面のオッサンだったら願い下げ。てか、そんな人に校内案内したら通報されません？

「それには心配に及びませんよ？先方は是非『貴方』で・とおっ

しゃってたので」

？そりゃどういうこと？校長…何か余計な事言いました？おもむろに校長が取り出したのはとある『雑誌』。その雑誌を受け取ると机に腰掛ける。失礼？そんな事言ってられません……てか、『アイツ』、雑誌の表紙すらも飾るか…大変だねえ。それよりもそういう方々とはあんまり面識ありませんけども？

「で？……どなたですか？その物好き…」

その質問を雑誌を指差す事で答える。正確にはその雑誌の『表紙』だ。ま・さ・か……校長、一つお聞きします。

「……本気（マジ）ですか？」

そして二日後。アカデミア島・港。

当然の如く来てしまいましたよ、ワタクシ。良いのかな？お出迎えの当日、初っ端の授業が『錬金術学』……来て早々だけど、単位落としたかも……考え終わるよりも先に、クルーザーが到着する。どこにでもある普通のクルーザーなのだが、俺には見覚えがある。てか、デカデカと貼るんじゃねえよ、自分の名前。

さてさて、『コイツ』なら肩肘張らずに挨拶できるし、マネージャーも顔知ってるし……ん？何か騒がしいけど？

「だから言ってるでしょ？こんな時間掛かるならヘリで来た方が良かったじゃない！！？」

「あら？そういう割には船酔いしてないわよね？」

「昔から船には強いの！解ってるでしょ！！」

ああ、今度こそさらば。俺の平穏…ミーアが一緒でなくて良かった。居たら居たで一から説明しなきゃいけないし…。

クルーザーから出てきたのは紺色のスーツを着た女性。髪もスーツと同じ色だ。いやぁ、久方ぶりッス。と言いたいが、その後に続いて……出たな、台風（テンペスト）。白いパーカーにピンクのワンピース。下はカットジーンズ。帽子まで態々…日焼け対策か？そして顔が隠れるんじゃないかって言うほどの大きなサングラス。てか、二人共こっちに気付けよ。

大きく深呼吸すると、彼女等の声に負けじと挨拶する。

「ＨＥＹ！！！」

その声に二人はやっとコチラに気付く。一瞬「誰？」って顔した人、後で海岸（おもて）出ろ。

「Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ｔｈｅ　Ｄｕｅｌ　Ａｃａｄｅｍｉａ
……Ｍｓ．『Ｓｈｅｒｙｌ　Ｎｏｍｅ』」

仰々しく礼をした後に呼んだ名前…彼女こそオリコンランキング首位を独占し続ける『宇宙の歌姫』……

「あら？久しぶりじゃない……カイト」

彼女の名は、『シェリル・ノーム』。

第8話　独自申請、再会の歌姫（後書き）

これについては面目次第も御座いません。

ファンの方が居たらそれこそ平謝りです。

感想・ご指摘ありましたらお願いします。

第9話　意図的な再会、怒りの決闘（前書き）

え～、暴走第二段でございます。

一応は区切りの良いところで収めますのでご容赦下さい。

さてさて、今回のキーカードは、『デルタクロウ－アンチ・リバース－』

ス「『ＢＦ（ブラック・フェザー）』専用の『ハーピィの羽根箒』といった所ですね。自分フィールド上に『ＢＦ（ブラック・フェザー）』と名の付いたモンスターが存在するときに発動でき、相手フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する全体除去効果」

カ「しかも3体以上存在する時に発動する場合は、手札からも発動できる珍しい罠だな」

第9話　意図的な再会、怒りの決闘

「まさか、本当にデュエルアカデミアに居るとはね」

「言っただろ？ここが『目的地』なんだよ……今まで行った所は全部『通過点』」

アカデミアへ向かう道中、世間話に花を咲かせる俺とシェリル。俺と会ったのは一年前。ライブ会場にバイクで乱入した俺をマネージャー、グレイスさんの雇ったボディガードと勘違いしたシェリルと意気投合（？）して入学試験までの数ヶ月間、世界を転々と移動した。ある時はジュネーブ、ある時はロサンゼルス。その間も俺は彼女のボディガードとして片時も離れなかったし、離してくれなかった。否、ワガママに振り回され続けた。

「にしても驚いたよ。シェリルがココに来るって聞いた時は」

「何をするにも刺激が必要でしょ？それにこの話は二週間前に決まってた事だし」

「てことは俺には内緒だったってか？意地悪過ぎるぜ？グレイスさん」

俺達の斜め後ろにいるグレイスさんに悪態をつく。この人は年齢にそぐわぬほどの悪戯好きなもんだから逆に手に負えない…

「人生には刺激が必要でしょ？」

それで済ませた。うん、確かに刺激は欲しいデスヨ？でも、俺にと

っては心臓が縮んだわ。

「まずは校長と話して、それから滞在用の部屋に案内する。荷物抱えたままで悪いが我慢してくれ」

「嫌。先に部屋に行きたい」

始まったよ……ここで機嫌損ねたら帰りかねないな。要望には応えるか。

「判ったよ。じゃあ、まずは部屋に案内する。そっからは学校内の案内だ」

部屋に案内するとその足で校長室へ。授業中で助かった……これで休み時間だったらどうなってた事やら。

校長室に入るなり、その口調を変えることなく、日程説明。期間としては五日間。今日と明日は下見なので撮影自体は三日目からスタートし、順調に行けば四日目の夕方には終わるらしい。しかも、次の写真集にも使うものも含まれている。グレイスさんの計画力には感謝だな。俺への自由時間まで作ってくれるんだから。

一通りの説明が終わると、そのまま学校内の案内をする。購買だったり、デュエルフィールドだったり。月一試験で使うフィールドも

今は点検中。

「そういえば明後日は月一の試験だから、その時は俺は付き添えない」

一応学生としての本分は忘れていないのでそこは免除して欲しくなかった。校長も時期が時期なのでそのつもりは無かったらしく、試験当日まではシェリルのボディガードとして動いてくれ、との事。

「解ってるわ。そこまで私も鬼じゃないし…赤点取ったら承知しないんだから」

時間にすると、午後には実技試験だから……順番が良ければ彼女の休憩時間には見に来れるはず。『はず』！

「だけど、流石に見に来る訳には行かないわよ？どれだけの生徒でごった返すか……」

やっぱマネージャーとしてはそこか。超が付くほどの有名人だ。ましてや俺がそれに付き添ってると解れば……次の朝陽は拝めそうに無い……。

「ま、それはそっちの時間が合えば、って事だろ？良いじゃねえか。そっちは仕事で、こっちは学業」

「ねえ？デュエル見せてよ。また『あのドラゴン』見てみたい」

シェリルさんご自慢のスキル『ワガママ』が発動しましたよ…ま、性格知ってる都合上、止める気はありませんけど。

「何言ってるの？シェリル。相手が居なきゃ意味無いでしょ？」

本来止めるはずのマネージャーがそれを言いますか……じゃなきゃ『台風（テンペスト）』の付き添いは勤まらないか。でも、見せるにしても相手が居なきゃなあ……かといってこっちから挑んでも『ハズレ』引きたくないし。

そこに、本当は来るはずの無い男『万丈目』が現れた。何人もの取り巻きを連れて……来たな、ハズレくじ。

「何をしている！？道を開けろ……っと、貴様は不動」

「いかにも…それと普通は挨拶するところだろ？そんなツラで挨拶されても嬉しくねえんだけどな」

「五月蠅い！！この間は貴様のお陰で大変な目に逢ったんだぞ！！？」

「お？その様子じゃガードマンにこっ酷く怒られたのか？」

あの取り巻きとのデュエルの後、俺が時間を気にしたのはそれが理由だった。十時半を過ぎると、ブルー寮前を見回りに来るのは計算していたのだ。それを見越してとっとと切り上げて部屋に戻ったけど…ホントに来たのか。

「逃げたさ！！足の速さに関しては誰にも負けないんでな」

「それは褒められたものじゃないんだけどね」

あ～あ、グレイスさんまで呆れ始めてるよ。シェリルに関しては時間ばっか気にしている。もう昼だっけか？だったらコイツラは来な

いし。

「良いご身分だな。女を二人も連れて、しかも授業にも出ずに校内をブラブラと……」

「校長からの許可は取ってあるし、第一頼んできたのは校長自身なんだが…」

「何!!?」

「てか、こっちを見ても何も気付かないワケ?」

親指でシェリルを指差すと、腕を組んで不快な表情をしている。そろそろ昼にするからもうちょっと待ってろ。てか、コイツラと話す俺の身にもなってくれ。

「ま、まさか……あの『宇宙の歌姫』…」

「それよりカイト?お腹空いたんだけど……さっさと案内して」

「急かすなシェリル。てか、この害虫共を追っ払う手伝いぐらいしろよ」

「ヤ。何で私がそんな奴等を追っ払わなきゃいけないの?それはボディガードのアナタの役目でしょ?」

はいそうですね。解りましたよ…それより、こりゃ好都合だな。

「明らかに不満そうだな…だったらデュエルでもするか?そうだな……放課後、改めてココで相手してやるよ」

「な、何だと!!?」

「お前等の誰かが勝ったら、コイツのお守りを変わってやるよ」
ちょっ!!誰のお守りよ!!?」こっちが勝ったら…解ってるな?」

「手出し口出しは一切するな、だな?」

「お、いっちょ前に学習したか……じゃあ、次は散歩だ。Ｃｏｍｅ ｏｎ，ｐｕｐｐｙ．Ｌｅｔ' ｓ ｇｏ」

犬においでおいでをする仕草に憤慨し始めたのは勿論万丈目達だ。
シェリル?後ろで腹抱えて笑ってますが何か?

「良いだろう…今度は俺直々に相手をしてやる……完膚なきまでに「「叩き潰してやる」!!!」

んでもって放課後。

ギャラリーはシェリルにグレイスさん。プラスして、どっから聞いたのか十代、明日香、メガネ、三沢、ジュンコ、ももえ。いつものメンバーじゃねえか。

ま、いっか。ちなみにシェリルは彼等の後ろで立ったまま観戦している。気付かれちゃお終いだからな……今から後の事考えると心臓がバクバクなんですけどね。

切り替え切り替え。コイツ相手なら『師匠』のデッキで行くか。あの大口叩きから考えると『パワーデッキ』で来るかな？それを見越してのこのデッキだ。

「準備は良いか？」

「フン、早くしろ」

急かすな害虫。この間みたいに速攻は無理かもしれないけど、善戦してみせろ。

Ｔｈｉｓ　ｐａｒｔｙ　ｉｓ　ｇｅｔｔｉｎｇ　ｃｒａｚｙ……Ｌｅｔ'ｓ　ｒｏｃｋ．（イカレたパーティーの始まりだ……行くぜ）

「「決闘（デュエル）！！」」

万丈目　ＬＰ＝４０００

カイト　ＬＰ＝４０００

「先攻は俺だな。なぁに、お前にも俺の力を見せてやる、ドロー！俺は『グランド・ドラゴン』を攻撃表示で召喚。更に手札から装備魔法、『ビッグバン・シュート』を発動し、『グランド・ドラゴン』に装備」

グランド・ドラゴン　ＡＴＫ＝２０００　ＤＥＦ＝１００　↓
ＡＴＫ＝２４００　ＤＥＦ＝１００

こりゃ苦戦するかもな…なんて言うと思ったか。

「更にカードを二枚伏せ、ターンエンド」

「一気に攻撃力を上げてきた…今回も短期決戦か」

三沢も唸る。ドラゴン族の主な戦法はモンスター効果とその攻撃力にある。『グランド・ドラゴン』のような召喚ルール効果を持っているモンスターは上級モンスターだけだが、その召喚ルール効果を柔軟に活かした戦術が必要。しかし、万丈目はただパワーだけで判断してこの効果を利用し、アドバンテージを稼いできた。

「だけど、不動君のデッキが読めない以上、彼もどういう戦法で来るか……」

「俺のターン」

来たのは『二重召喚』。これで出来るのは……

「俺は『パワー・サプライヤー』を召喚。更に魔法（マジック）カード、『二重召喚』を発動。これによりこのターン、俺はもう一度通常召喚を行う事ができる」

パワー・サプライヤー　ＡＴＫ＝４００　ＤＥＦ＝４００

つまりは俺の意思で召喚権を使わなくても良い。けど、『コイツ』が来ている以上、出すしかない。

「そして、『パワー・サプライヤー』をリリースし、『ストロング・ウインド・ドラゴン』を攻撃表示で召喚！」

金色の粒子に変換された『パワー・サプライヤー』から再構成されたのは、翡翠色の体表の、風を纏いし竜。フィールドに降り立つと、『グランド・ドラゴン』すらも見下ろす。

ストロング・ウインド・ドラゴン　ＡＴＫ＝２４００　ＤＥＦ＝１０００

「よっしゃあ！これで『グランド・ドラゴン』と並んだぜ！」

「だが、このターンに攻撃しても次の万丈目のターンの直接攻撃（ダイレクト・アタック）で大幅に削られる」

「バトル！！！『ストロング・ウインド・ドラゴン』で、『グランド・ドラゴン』を攻撃！『ストロング・ハリケーン』！！」

風を吐き出すと同時に翼を羽ばたかせ、竜巻を『グランド・ドラゴン』に叩き込もうとするも、負けじと『グランド・ドラゴン』もその両腕を『ストロング・ウインド・ドラゴン』にねじ込んだと同時に爆発。

「くっ！！！……だが、お前のモンスターも…な、何！！？」

万丈目が目にしたのは、煙から晴れても健在の『ストロング・ウインド・ドラゴン』。確かに相打ちになったはず…なのにカードを発動した兆候は確認できない。なら、理由は一つ。

「『ストロング・ウインド・ドラゴン』の効果…このカードは同じ攻撃力を持つモンスターとの戦闘では破壊されない」

「ば、馬鹿な！」

「そんなに驚くなよ……ちょっと考えれば攻略できるだろ？『天才』サマ」

確かに２４００以下のモンスターには勝てる。だがここでネックなのが『同じ攻撃力』なのだ。『元々』が付かない時点でこのカードの制圧力は落ちるが序盤ではこんなにもこの効果が活きる。それだけがこのカードの効果じゃないけどな…

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

「すっげ…あの効果」

「確かにな……下級モンスターに『突進』の効果で攻撃力を上げても、『シフトチェンジ』で攻撃対象を変えられれば一方的に破壊できる…使い方としてはそんなところだろうな」

「あの柔軟な思考力…あれが不動君の『武器』…」

「前の子達、やっぱり驚いてるわね」

「アイツがそんなにひょろかったら私は雇ってはないわ」

「俺のターン、ドロー！」

さあ、どう出る？こっちは上級モンスターが一体、しかも生半可な

攻撃力じゃ殴り負けるぞ?言ったはずだ、ちょっと考えれば解る、って。

「俺は『仮面竜』を守備表示で召喚し、ターンエンド」

仮面竜　ＡＴＫ＝１４００　ＤＥＦ＝１１００

あ、そ。よっくわかった……お前もただの『愚図』なんだな。んなこと言ったら義父さんに怒られるけど…ゴメン、すっごく落胆してます。

「じゃ、俺のターン」

あ～あ、一気にやる気無くなったな。一応向こうはリクルートしてくるだろうけど、手は打っておくか。

「手札から『フォース・リゾネーター』を攻撃表示で召喚。レベル６の『ストロング・ウインド・ドラゴン』とレベル２の『フォース・リゾネーター』をチューニング！」

『フォース・リゾネーター』の手から放たれた電撃が二つの輪を作り、『ストロング・ウインド・ドラゴン』を包む。

「『王者の決断、今赤く滾る炎を宿す、真紅の刃となる！熱き波濤を超え、現れよ』！！」

その光の筋から現れたのは、二振りの長剣を携えた赤い剣士。その名も…

「シンクロ召喚!!焔の鬼神!『クリムゾン・ブレーダー』!!」

クリムゾン・ブレーダー　ＡＴＫ＝２８００　ＤＥＦ＝２６００

「そしてリバースカード、オープン。罠（トラップ）カード、『リビングデッドの呼び声』!このカードの効果により、俺の墓地に存在する『フォース・リゾネーター』を特殊召喚する」

今一度現れた『フォース・リゾネーター』ですらもちょっと肩を落としている。何か、「こんな奴を倒すためにまた出て来たのか」的な感じ……そう落ち込むなよ、お前の『効果』使うから。

「『フォース・リゾネーター』の効果を発動。このカードを墓地に送り、自分フィールド上の表側表示のモンスター1体を選択し発動する。選択したモンスターが攻撃するとき、このターンのダメージステップ終了時まで相手は、モンスターを対象にする魔法（マジック）・罠（トラップ）・効果モンスターの効果を発動する事ができない!俺が選択するのは勿論、『クリムゾン・ブレーダー』」

墓地のゾーンにカードを送ると、そこから電撃が発せられ、万丈目の場の伏せカードが雷を帯びる。これで発動を封じたけど……これって裏を返せば『メリット』だよね?

「『メリット』ッスか?」

「ああ。あのカードの効果は自分フィールド上のモンスター1体を選択と言ってた。発動制限自体が『選択したモンスターを対象』ではなく、『全てのモンスターを対象』に発動できないんだ。簡単に言えば、フィールド上全てのモンスターを対象にした効果すらも発動できない。この場合だと、『亜空間物質転送装置』が使えないな…あと『強制脱出装置』か。ただし『魔法の筒』は対象を取らないから発動は出来る」

「何でだ?」

「またアニキは……あ「『魔法の筒』は攻撃宣言時、モンスターの『攻撃力』を相手のLPにダメージとして返す効果。攻撃宣言したモンスターにも、攻撃対象になったモンスターにも対象を取っていない」…また言われたッス」

「キミか…奴のデュエルあるところにキミがいるが、一体何者だい?」

「私は……」

彼の、何だろうか?

「バトル!!『クリムゾン・ブレーダー』で、『仮面竜』を攻撃!!『レッドマーダー』!!」

紅い炎を纏った回転斬りで『仮面竜』を両断。だが、決定的なダメ

ージは与えられず、しかも相手に特殊召喚を許してしまう。
「『仮面竜』の効果発動。戦闘により破壊されたとき、デッキから『仮面竜』１体を特殊召喚する」

仮面竜　ＡＴＫ＝１４００　ＤＥＦ＝１１００

「ちっ、ダメージステップ後だから意味が無いか…カードを二枚伏せ、ターンエンド」

伏せてもこっちには効果が生きてる。それで奴の行動自体を制限できる。こっちの優位に変わりない。

「俺のターン、ドロー！」

次は何かな？コイツもちょっと考えればすぐ解る問題だぜ？さっきヒントは言ったしな。

「手札から『デビル・ドラゴン』を守備表示で召喚。更に手札から魔法（マジック）、『二重召喚』を発動！！」

デビル・ドラゴン　ＡＴＫ＝１５００　ＤＥＦ＝１２００

お前…ちゃんと勉強しろよ。てか、パワービートもそろそろ飽きてきたな。自分の伏せカードも確認しないで……

「これで揃った！！『デビル・ドラゴン』と『仮面竜』生け贄に……何だ！！？エラーだと！！！？」

「『クリムゾン・ブレーダー』の効果だ。このカードが戦闘によってモンスターを破壊した次のターン、相手はレベル5以上のモンスターを召喚・特殊召喚が出来ない」

「そんな！！！」

それには流石にミーア、シェリル、グレイス以外の全員が驚く。

「そんな効果が……」

「それじゃあ、万丈目君は実質1ターンは何も出来ないの？」

「魔法や罠は使えるが、壁モンスターしか出せず反撃も出来ない。しかも召喚制限とくれば、万丈目の伏せカードは恐らく攻撃力強化か、相手の行動制限。『威嚇する咆哮』ではないだろうが…それでもこのターンで体勢を整えないと次で終わる」

おやおや、長考か……横槍入れると面倒だから黙ってるけど、それでも長い。夜が明けるぞ？

「よし、カードを一枚伏せて「リバースカード、オープン。速攻魔法、『サイクロン』発動。今伏せたカードを破壊する」…くそっ！」

破壊したのは『奈落の落とし穴』。一応は破壊したけど……この局

面だと正直微妙。じゃあ、伏せは何かな？それがワクワクするんだけど。

「ターンエンドだ！！」

だから、怖い顔するなよ……スマイルスマイル、てか？

「俺のターン」

ま、やりますか。このデッキにも入れておいて正解、だな。

「手札から魔法（マジック）カード、『シンクロキャンセル』発動」

「げっ！！」

発動した瞬間、ジュンコがビクビクし始めた。ああ、あれはトラウマだもんな。やったのは俺だけど。

「自分フィールド上のシンクロモンスター1体を選択し、そのモンスターをエクストラデッキに戻す。そしてそのシンクロモンスターのシンクロ素材となったモンスターが1組、墓地に揃っている場合、素材となったモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。戻って来い！『ストロング・ウインド・ドラゴン』、『フォース・リゾネーター』！」

『クリムゾン・ブレーダー』の残像が光に変わり、二体のモンスターに実像に変わる。

「そしてもう一度、レベル6の『ストロング・ウインド・ドラゴン』と、レベル2の『フォース・リゾネーター』をチューニング！」

同じように雷の輪が『ストロング・ウインド・ドラゴン』を包み、一筋の光に変わる。

「『王者の鼓動、今此処に列を成す！天地鳴動の力を見るがいい』！！！シンクロ召喚！！！」

現れるは赤銅の焔の竜。そして俺の背中には……『紅き竜』の痣が背負われる。

「我が魂……レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！！」

今、第二ラウンドが、始まる。

第9話　意図的な再会、怒りの決闘（後書き）

お話中に気になる部分・訂正箇所が御座いましたら気兼ねなくどうぞ。

感想・ご指摘も承っておりますので、お願いします。

第１０話　疼く痣、そして終劇へ（前書き）

第三弾でございます。

まさかの!?という感想を頂きました。

感想をくれた方、お返事できず申し訳ございません。

今回のキーカードは……『共鳴破』。

ス「『リゾネーター』と名の付いたモンスターがシンクロ召喚に使用される度に相手フィールド上のカードを一枚破壊できる永続魔法」

カ「発動後2ターン目のスタンバイフェイズ時に破壊される自壊効果もあるが、1ターン内の制限が存在しないのがメリットだな」

第１０話　疼く痣、そして終劇へ

「やっと出したわね…」

「でも私が見たいのは『アレ』じゃないわ」

『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を注視するグレイスとシェリルだが、今にも憤慨しそうなシェリル。初めて見るドラゴンではあるが、

「私が見たいのは……あの『白い』ドラゴンよ。あんな無骨なカードじゃない」

「あら？力一辺倒のじゃなくて？」

意外にもあのカードではなく、他が目当てらしい。いずれにしても、カイトの『あのデッキ』では召喚出来ないのを知るのは、この後のようだ。

レッド・デーモンズ・ドラゴン　ＡＴＫ＝３０００　ＤＥＦ＝２０００

「出たな……それがお前のエースカード、か」

「…違う」

「何だと！！？」

そりゃそうだ。誰も『レッド・デーモンズ・ドラゴン』がエースなんて言ってないし、知りもしない。

「このカードは、俺の師匠のエースカードだ。俺のじゃない……誰がそんなこと言った？」

にしても、痣が前より熱い……何でだ？『紅き竜』はシグナー足り得る人間にその痣を託す、と聞いているけど…まさかねぇ。ま、デュエルに集中しますか。

「バトル！！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で『デビル・ドラゴン』を攻撃！『アブソリュート・パワー・フォース』！！！」

「何！！？『仮面竜』ではなく、『デビル・ドラゴン』だと！！？（そうか！そういうことか！！！）」

そこで笑うか？普通……でもいっか。

「『レッド・デーモンズ・ドラゴン』の効果発動！！！「な、何だと！？」このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、ダメージ計算後に相手フィールド上の守備表示モンスターを全て破壊する！！！」

簡単に言うと、表示形式限定の大掃除、ってトコだな。ダメージ計算後だから計算時に発動する効果が発動すると意味が無いが……伏せカードはそんなトコロか？……って、おい。

何も発動しないんかい！！！！！

「くそっ！！！！！一体何が……モ、モンスターが…」

あ～あ、もうやる気無いぞ！？てか、ドローしても何も無いなら勝手に終わらせる。

「お、おいおい……何てモンスター効果だよ！？」

「でも、何で『デビル・ドラゴン』を攻撃したんでしょうか？」

「恐らく、『仮面竜』のモンスター効果を警戒したんだろう…『仮面竜』は相手からの攻撃によって破壊された時、同名モンスター

を特殊召喚する効果。攻撃宣言したのが『仮面竜』だった場合、ダメージ計算後の効果により、新たな『仮面竜』が特殊召喚され、万丈目のフィールドには壁モンスターが残る」

「だから敢えて『デビル・ドラゴン』を攻撃して、効果破壊したのね」

（だが、それだけがあのカードの効果とは思えない……まだ何かあるはず…）

「ターンエンド！」

もう俺の中はグチャグチャ……これじゃあ義父さんとの『約束』を曲げたかな……エンド宣言しちゃったからもう降参（サレンダー）出来ないし…けどココまで来たから最後までやるか。

「俺のターン、ドロー！」

引いたのは……、

「俺は永続罠（トラップ）、『リビングデッドの呼び声』を発動！このカードの効果により、墓地から『仮面竜』を特殊召喚する「リバースカード、オープン。速攻魔法『ダブル・サイクロン』を発動し、自分と相手フィールド上のカードを一枚ずつ破壊する。お前の『リビングデッドの呼び声』を破壊し、俺も『リビングデッドの呼び声』を破壊する」……まさか速攻魔法を二枚とも伏せるとは！！」

「罠（トラップ）を一枚も伏せずに1ターンやり過ごしたンスか!?」

「本来は一枚は囮（ブラフ）として伏せるのがセオリーだが、まさか……」

「……」

「どうしたの?シェリル……シェリル!!?」

「俺はこれでターンエンド!!」

「俺の「カイトォ!!!!!」…シェリル!?」

おいおい、グラサン外すなって。バレるっつの!!

「アンタ、そんな気持ちでデュエルしてるの!!?アンタがしたかった事はそんなチンケな終わり方で『満足』するの!?」

……

「そんな事なら最初からやらなきゃ良かったでしょ!?それがアンタのやり方?その気持ちを捨てて、『全力で』向かっていきなさい!!それなら勝っても負けても後腐れ無いでしょ!!!?」

「シェリルって……」

「あの『シェリル・ノーム』!?」

そうだ……そうだった。俺は……、

「ありがとう、シェリル……」

「は!?」

「目ぇ醒めた……後、お前に預けた『アレ』、持ってるか?」

「『アレ』……?「持ってるわよ」ってグレイス!?」

グレイスさんが放ってきたのは、コート。それさえあれば……俺は『俺』でいられる。そのコートは俺の師匠、『ジャック・アトラス』のコート。ブルーの制服を脱いでそのコートに袖を通す。サイ

ズとしては充分合うけど、やっぱ派手だな。

「そ、そのコートは一体!?」

「気にするな。何も変わらねえよ…ただ、俺の『モチベーション』が戻っただけだ」

「それだけか?だがそれだけでデュエルに勝とうとでも言うのか?」

「悪いが、3ターン以内でケリを着ける」

てか、今までのを帳消しにするにはもうやるしかないでしょ。見てくれよ……師匠(ジャック)。

「改めて……俺のターン!!」

引いたのは……手札補充には充分だ。てか、これに助けられるとは……

「魔法(マジック)カード、『紅蓮魔竜の壺』を発動!!自分フィールド上に『レッド・デーモンズ・ドラゴン』が存在する時に発動でき、デッキから二枚ドローする。ただし、このカードを発動したターン、自分は召喚・特殊召喚は出来ない!」

二枚ドロー……一枚で何とか出来るか。

「俺なりのエンターテイメントを見せてやる。魔法(マジック)カード、『光の護封剣』を発動!!これにより、3回目のお前のエンドフェイズまで、モンスターは攻撃出来ない!」

「エンターテイメント、だと!?」

おぉ、おぉ…怒っちゃって。1ターンは余裕だろ?

「俺はこのままターンエンド」

「くっ!舐めやがって……俺のターン、ドロー!!」

お解りかもしれないが、奴は怒ってます。それこそコケにされっぱなしで何もしないほうがおかしい。けど、俺の手札には『コール・リゾネーター』に『クリエイト・リゾネーター』。これで一発です、ハイ。

「俺は手札から魔法(マジック)カード、『強欲な壺』を発動!これによりデッキからカードを二枚ドロー!!更に手札から『ミンゲイドラゴン』を召喚。そして手札から魔法(マジック)カード、『二重召喚』を発動し、もう一度通常召喚を行える」

ミンゲイドラゴン　ＡＴＫ＝４００　ＤＥＦ＝２００

二枚目か…考えたな。というより、あの『ミンゲイドラゴン』って今引いてたよな?

「『ミンゲイドラゴン』を生け贄にする時、このカードで二体分の生け贄にすることが出来る。俺は『ミンゲイドラゴン』を生け贄に、『フェルグラントドラゴン』を召喚!!」

粒子に変換された『ミンゲイドラゴン』から姿を変え、金色の龍がその姿を現す。いや～、生で見ると綺麗だな……

フェルグラントドラゴン　ＡＴＫ＝２８００　ＤＥＦ＝２８００

「どうだ！！？このデッキの最強モンスター、『フェルグラントドラゴン』の神々しい姿は！お前のその不細工なモンスターよりも輝かしい姿を、その目に焼き付けるが良い！」

え～、そこのキミ。ドヤ顔でシェリル見るな。良い事言ったような顔してるけど、当の本人は見向きもしてませんよ？

「それよりも綺麗なの見てるから勘弁。てか、そこにいる歌姫様のほうが千倍は綺麗だぜ？」

「あら？解ってるじゃない？」

「ば、馬鹿にして……カードを一枚伏せ、ターンエンドだ！！」

「馬鹿にはしてないが…事実だろ？俺のターン！！」

やっぱやり辛い…なんて、言ってられないか。でも、流石中等部トップ…その腕は飾りじゃないか。う～ん、言った手前どうするかな

？このまま特殊召喚しても良いけど、あの伏せカード……補助効果なのか？というより、あのカードの効果じゃ一発で終わりは出来ないか。それでも…

「面白くなりそうだ……バトル！！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で『フェルグラントドラゴン』を攻撃！！『アブソリュート・パワー・フォース』！！！！」

「それなら、リバースカード、オープン！罠（トラップ）カード、『和睦の使者』を発動。このターン、自分のモンスターは破壊されず、戦闘ダメージは０となる！」

ちっ、厄介なカードを…だが、それもこのターンだけ。次こそは、

「このままターンエンド！！」

「俺のターン、ドロー！」

マズい……勢いでターンエンドしたけど、奴が『サイクロン』と『フェルグラントドラゴン』の効果を使えば『レッド・デーモンズ・ドラゴン』は破壊される。かといって、何も伏せないままなのはこのターンだけにしないと・な。

「来ないか……俺はコレでターンエンド」

これで次のターン、『光の護封剣』は消えて奴は攻撃可能になる。どうする？温存していたこの二枚を使うか……使うよな、普通。

「自分フィールド上にシンクロモンスターが存在する時、手札の『クリエイト・リゾネーター』を特殊召喚することが出来る。来い

！」

これまたシュールな悪魔だな。背中に花を一輪背負ってるとか無いよ…

クリエイト・リゾネーター　ＡＴＫ＝８００　ＤＥＦ＝６００

「更に、『アタック・ゲイナー』を通常召喚！！」

アタック・ゲイナー　ＡＴＫ＝０　ＤＥＦ＝０

「荒ぶる……荒ぶるぞ……俺の『魂』がぁ！！！！」

赤いオーラと共に、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』が舞い上がり、全てのフィールドに火の粉が飛び散る。

「レベル８の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』に、レベル３の『クリエイト・リゾネーター』とレベル１の『アタック・ゲイナー』を…ダブルチューニング！！」

素材指定の後、二体のチューナーモンスターがそれぞれのレベルの数の輪に変わる。そして炎の輪となり、『レッド・デーモンズ・ド

ラゴン』を包み込む。

「『王者と悪魔、今此処に交わる！荒ぶる魂よ、天地創造の叫びを上げよ』！！！シンクロ召喚！！」

そして……荒ぶる悪魔の竜が、『痛んだ赤色の焔竜』の名の下、フィールドに降り立つ。

「現れろ！！我が半身！！！！『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』！！！！！！！！！！！！」

第１０話　疼く痣、そして終劇へ（後書き）

最近、ＴＦ６にて『キメラテック・オーバー・ドラゴン』で遊星相手に一１５１００叩き出しました。

やりすぎたなぁ…と感じる今日この頃です。

感想・ご指摘ありましたらお願いします。

第１１話　新たな光、次なる試練（前書き）

前話にて、手札枚数における事故が発生していたので訂正致しました。

ご迷惑をおかけして申し訳ありません。

今回のキーカードは…『デモンズ・チェーン』

ス「相手フィールド上のモンスター1体を選択して発動し、選択したモンスターは効果を発動できず、攻撃宣言できない」

カ「ただし、選択したモンスターが破壊された時に破壊される…扱いは簡単だけど、あまりマイナーじゃないカードなんだよな。使ってる人なんて見たことないし…」

第１１話　新たな光、次なる試練

えっと、すでにテンプレ化……ゲフンゲフン、もといセオリー化しかけてる『スカーレッド・ノヴァ』を召喚。しかも手札は一枚だけ。間違ってもここでは使わない。使えば後々自分の首を絞めるだけ…てか、こんな使い辛いデッキだったっけ？

「それは以前見た……」

「ああ、これが『レッド・デーモンズ・ドラゴン』の一つ目の進化の形、『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』」

「一つ……他にもあるというのか！？」

ま、それはおいおい教えていくか……でも『スカーレッド・ノヴァ』が何か落ち着かない感じだな……闘って良いのかどうかソワソワというか、一歩先に出れないっていうか…

「迷ってたら負ける！！…墓地にいる『アタック・ゲイナー』の効果！このカードがシンクロ素材となったとき、相手フィールド上のモンスター１体の攻撃力を１０００ポイントダウンさせる！」

「な……ということは…」

「ああ、『フェルグラントドラゴン』の攻撃力を１０００ポイントダウン！！よって『フェルグラントドラゴン』の攻撃力は２８００から１８００になる」

フェルグラントドラゴン　ＡＴＫ＝２８００　ＤＥＦ＝２８００
↓　ＡＴＫ＝１８００　ＤＥＦ＝１８００

「くっ！！」

「更に『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』は、墓地にいるチューナーモンスター1体につき、５００ポイント攻撃力がアップする。俺の墓地いるチューナーは3体！よって『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』の攻撃力は…」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　ＡＴＫ＝３５００　ＤＥＦ＝３０００　↓　ＡＴＫ＝５０００　ＤＥＦ＝３０００

最早これもセオリーっていうか、当然の攻撃力。単純に『レッド・デーモンズ』から即座にシンクロ召喚すれば当然3体はチューナーが墓地に送られる。最低数値で驚かれてもこっちが困るんだけど…

…てか、5体も墓地に落とした師匠は恐ろしい……

「てことで、バトル！『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』で『フェルグラントドラゴン』を攻撃！『バーニング・ソウル』！！！」

「好きにさせるか！！リバースカード、オープン！カウンター罠（トラップ）、『攻撃の無力化』！相手モンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる！」

ブラックホールの様な壁が現れ、『スカーレッド・ノヴァ』の攻撃の軌道が逸れる。たしか『攻撃の無力化』って攻撃が吸い込まれるんじゃなかったっけ？こっちは体当たりだから吸い込まれたらたまったモンじゃないけどな。

「カードを一枚伏せ、ターンエンド！」

これでまたハンドレス。今伏せないと怖いことになるから……『フェルグラントドラゴン』の効果だけは要注意だからな。

「俺のターン、ドロー！！」

今更だけどしつも～ん。キミ、ドローする度にシェリル見てるけど……何で？？？この姫様はちょっとやそっとじゃ動きませんよ？しかもその当の本人は『スカーレッド・ノヴァ』をジッと見てるし……そんな気に入らないのかな？泣くぞ、こん畜生。それにやっと『光の護封剣』も消えて、条件としてはイーブン。だけどアドバンテージはこっちが有利。

「俺は『フェルグラントドラゴン』の効果を発動！自分の墓地に存在するドラゴン族モンスター１体を選択し、選択したモンスターのレベル１つにつき２００ポイントアップする。俺は墓地の『グランドドラゴン』を選択。『グランドドラゴン』のレベルは４。よって『フェルグラントドラゴン』の攻撃力は８００ポイントアップする！！」

フェルグラントドラゴン　ＡＴＫ＝１８００　ＤＥＦ＝２８００
↓　ＡＴＫ＝２６００　ＤＥＦ＝２８００

だが『スカーレッド・ノヴァ』の攻撃力には遠く及ばない。それを承知で……まさか、

「行くぞ！！！『フェルグラントドラゴン』で、『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』を攻撃！！「それは通さない！リバースカード、オープン！永続罠（トラップ）、『デビルズ・チェーン』！」何！！？」

「フィールドで表側表示の効果モンスター1体を選択し、そのモンスターの効果は無効化され、攻撃も出来ない！選択するのは…『フェルグラントドラゴン』！！」

カードから伸びる鎖が『フェルグラントドラゴン』を締め上げ、地上に叩き落す。のた打ち回る『フェルグラントドラゴン』に鎖が軋みを上げる。てか、こんな形で攻撃も封じるのか…

「ちっ！（手札の『死者蘇生』で何とか出来ればと思ったが…まさか効果だけではなく攻撃まで封じるカードがあるとは……だからこそ、俺は…）ターンエンド、だ」

エンド宣言の時の声が一段と小さく聞こえたのは気のせいか？

「俺のターン！」

引いたのは…って、ちょっ、何でこんなカード持ってるんだ、師匠！！？てか今の状況にはピッタリか…一撃で決める！！

「手札より装備魔法、『魔力の足枷』を発動し、『フェルグラントドラゴン』に装備する」

現れたのは、顔の付いた巨大なモーニングスター……ではなく、足枷。てか、足枷の鉄球にトゲ付いてて良いのか？その足枷が『フェルグラントドラゴン』の右足首の辺りに填められ、どんどんと弱っていく。

「な……どういうことだ！？」

「このカードを装備したモンスターの元々の攻撃力は１００になる。そして、装備モンスターのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ時に５００ポイントのライフを払う」

「１００…たった１００だと！！？」

フェルグラントドラゴン　ＡＴＫ＝１８００　ＤＥＦ＝２８００
↓　ＡＴＫ＝１００　ＤＥＦ＝２８００

「しかもご丁寧にも『フェルグラントドラゴン』は攻撃表示…ライフの心配はしなくて良いぞ？一撃で終わるからな」

「く……くそっ！！」

「悪いが、俺の『魂』はお前に容赦はするな、と言っている！バトル！！『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』で『フェルグラントドラゴン』を攻撃！『バーニング・ソウル』！！！」

炎を纏った紅蓮の竜が万丈目に止めの一撃を加え、ＬＰがゼロと同

時にその長くも激しい攻防戦に幕が下りた。

「全く……長いのよ！！あんなの、ちゃっちゃと手早く終わらせれば良かったじゃない！そんな長ったらしいデュエルばっかりだったの？」

万丈目が退場してから数分後。只今、シェリルよりのお説教中。目当てが見れなかったのがそんな不機嫌の理由なのか、当り散らす場所が俺しか居なかったようで……てかお前の目当てって、まさかとは思うけど、

「機嫌は戻ったか？」

「戻るワケ無いでしょ！！？」

「そりゃご尤もで……お前が見たかったのって…こっちか？」

義父さんのデッキからあるカードを取り出し、それをシェリルに見せる。

「そう！！それよ！何で出さなかったのよ！？」

だって……違うデッキだし、相性合わないし、シナジー薄いし……理由を挙げればキリが無い。でも…

「これ…義父さんのデッキのエースなんだ。今使ったのは師匠のデッキだからな、入れるわけにはいかなかったんだよ」

憂いを含んだ表情でそれを言うと、シェリルの顔が曇る。親からの大事な物を大切にしないなんて、親不孝も良いところだ。それはシェリルも充分承知してるはず。

「そう……そうだったんだ…」

「それに、月一の試験でコイツを使うかもしれない…生半可な使い方じゃあ勝てないだろうしな」

「解ったわ。なら、それで勝ちなさい！そうじゃなきゃアナタが私のボディガードとして勤まらないわ」

そことボディガードと何の関係があるんだ？一応は喧嘩じゃ負け無しだけど…そこだけ義父さんと一緒なのはどうかと思ったことはある。

「じゃあ、ミーア。行くぞ？」

「はい…後、私からもお説教させていただきますので」

「お前等揃って、俺を何だと思ってやがる!!?」

「彼女がどう思ってるかは解りかねますが……私は、その…『パートナー』ですから……」

ミーアの顔が幾分赤い。パートナーでそんなに赤くなるかな?でも、何か勘違いしてるようだ。

「ちょっ、ちょっと!!その『パートナー』ってどういうこと!?聞いてないんだけど!?」

ここにもいたよ、勘違い……てか、やっぱ一言足りない。

「ああ、それは…ちょっとした仕事だよ。頼れるデスクワーク役が居なくてな…そういうのが得意だってんで」

これは一応本音なんだけどな。チマチマした仕事はどうも苦手だし……あ、D・ホイールの整備とかは得意だし、ディスクの調整も自分なりに何とか・か。

「それよりミーア、お説教って何についてだ?」

「勿論、今のデュエルについてですが…何か?」

ああ、聞いた俺が馬鹿だった。それしか無いわな…

「だったらカイト?明日はよろしくね。場所については明日の朝

に連絡するわ」

そう言ってグレイスさんと連れ立って、デュエル場を後にするシェリル。てか、そろそろ授業に出させてくれ。グレイスさんのスケジュールだけじゃ追っ付かない気がしてきた。何せ最近、デュエルしかしてないような？

「いいなぁ、不動君……あの超有名人と仲良しなんて…」

「しかもお互い名前で呼び合ってるし」

「これはもしかして……」

最後の、黙ってろ。代わるか？絶対一時間で根を上げるぞ。

「只の雇い主だよ。歳も近いし、気にするな」

「にしては何でも知ってるような口ぶりだったわよ？」

そりゃそうだ。一年近く寝食を共にしてるんだ。知らないほうがおかしい。てか、今着てるコートは試験の数日前にグレイスさんを通してシェリルに渡しておいたコートだ。『何時か帰ってきて、お前の仕事を手伝ってやる』って約束と共に。一応はまだ契約も生きてるそうなので卒業後の進路としては申し分無い。

「ねえ？そのコートだけど……」

「ああ、俺の師匠の現役時代のコートだよ。ディスクと一緒に渡されたんだ」

ちなみにD・ホイールの方は丁重にお断りした。はっきり言うけど、あんな趣味の悪いのには乗りたくない。やっぱ派手みたいだな。

「まだまだ格下さ。受け継ぐには程遠い」

「でも、デュエルはすっごく強いじゃん！今度、俺ともデュエルしてくれ」

「前にも言ったが、気が向いたらな」

「それか今やろうぜ？」

「人の話聞いてんのか！！？このドアホ！！」

皆の笑い声が木霊する中、どうしてか心が安らぐ俺がいる。何故だろう？義父さんにも言われたな……俺なりの絆を見つけ出せって。これが……『絆』になるのかな…？

その後、ミーアの予告通りにお説教を喰らいました。しかも明け方まで……皆して俺を殺す気か？

第１１話　新たな光、次なる試練（後書き）

これにて、ＶＳ万丈目編は終了です。

３話ぶっ通しは疲れた。

万丈目のデッキはドラゴン族主体にしました。どんなデッキだったかはちょっと忘れましたけど…

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第１２話　白銀の翼、届かない目標（前書き）

いよいよ試験突入です。

誰を相手にするか悩んだ結果をどうぞ。の前に、

今回のキーカードは、『バスター・モード』。

ス「シンクロモンスターをリリースして、そのモンスターに『／バスター』と名の付いたモンスターを特殊召喚する」

カ「罠（トラップ）カードだからバトルフェイズ中でも使える不意打ちの一撃には丁度良いな」

第１２話　白銀の翼、届かない目標

月一試験前日。

部屋で勉強中、隣から聞こえる大声に頭を悩ませる。何故かシェリル達の滞在用の部屋が俺の部屋の隣なんだ？あの校長、狙ってやってるだろ……集中出来やしない。

そこにミーアが珈琲を持ってやってきた。何でも、食堂へ行って持って来てくれたようだ。よくバレなかったな？

「どうですか？調子のほうは…」

「見て解らないか？隣をどうにかしなきゃ無理だ。と言いたいが、簡単過ぎて笑いそうだよ」

『向こう』の方がルール上は変化しているものの、基本的なフェイズ内の行動までは変わらないし、強いてあげるならエクストラデッキが融合デッキになってるぐらいでさして問題ではない。

「たしかに騒がしいようですが…その様子だと問題点は無いようですね」

「そうだな……そっちはどうだ？」

「こっちもさして異常はありません。ですが、これぐらいでは安心できません……何時『アポリア』が来るのかまでは予測出来ませんし」

「言い忘れたが、奴は別の姿になってるかもしれない…」

ミーアもそれには目を丸くした。実際に会ってはいないにしても、そこまで用意周到にしてくるだろうか？という疑問はあったようだ。

ホセ

ルチアーノ

プラシド

彼女にはこの三人の名前は伝えたので警戒はしてくれる。が……

「そうすると、もう一度サーチャーを作り直さなければ…」

「結構時間かかるか？」

「場所としては多くありませんが……それでも全て作り直すのに一日ほど」

だったら心配無いか。奴とてとんでもないスピードでこっちに来るわけじゃない…だとすると、

「『パラドックス』の時のように、過去から変えていくつもりか……時間があったら過去の出来事も調べてみる」

ミーアが頷くと、そのままベッドに向かっていき、脇にある椅子に腰掛ける。何をするわけでもなく外を眺めているが気にしてる余裕は無い。俺は教科書を閉じると、そのまま義父さんのデッキをいじ

り始める。

「…？勉強は良いのですか？」

「実技もあるんだ…そっちに集中する。今回は義父さんのデッキでいくよ」

使うって伝えてしまった以上は、万全にしなきゃ。ただでさえ周り難いデッキだし……。

そして試験当日。

ちょっと飛ばすけど、筆記試験は問題無し。途中、十代達が遅れて試験を受けてたけど遅れた理由は聞かない。どうせ寝坊して余計な

事したんだろ？それに、善悪関係無しに遅れても自分の人生なんだ、後悔しないで欲しい…

その昼休み、多くの生徒が絶望した顔で購買から出てくる。何だ？何でも新発売のパックが全て売切れになっていた、という。それも大人買い……何か犯人が解ったんですけど？人気の無くなった購買で昼食を買うと、ほぼ入れ違いでシェリルが入ってきた。

「お？撮影はどうした？連絡来なかったけど……」

「休憩がてらの撮影場所の検討。アンタは？」

「見ての通り、メシだけど…お前もドローパン目当てか？」

「あんなギャンブル紛いのゲテモノなんて食べたくないわ…それよりこっち」

そう言って手に取ったのは普通のサンドイッチ。しかも野菜中心の。

「お前も大概菜食主義者（ベジタリアン）だな……」

「何よ、いけないの？」

いやいや、良い事だけど…昨日も野菜中心じゃなかったか？偶には肉とか食えよ。とか思ってる間にさっさと会計済ませて購買を後にする。う～ん、やっぱ台風だな。さっと来てさっと帰る……っと、

「おい」

「ん？」

「後でメールする。順番が判ったらな」

「りょーかい」

軽く敬礼して足早に立ち去る。多分気付かれるのを見越して急いで戻るんだろうな…でも、きっと誰かには捕まるぞ、絶対。

試験会場では、数人がデュエルを終えて各々が一喜一憂している。負けた者、勝った者、筆記試験と総合しても意味無いだろう。恐らくは筆記は飾り。本命は実技か……実力主義のあの社長らしい。というよりも、実技が八割、筆記が二割ってトコだろう。

所変わって、試験会場のデュエル場。そのフィールド傍の廊下で待機してる俺にミーアが歩み寄る。

「やっと見つけました。お届け物です」

って、お前は宅急便のお姉さんか?そんなつまんないツッコミよりもその手にあるのは……デュエルディスクに、洋服が一着、綺麗に折畳まれている

「それ…一体誰から?」

「決まってるでしょう。アナタのお義父さんからです」

なぬ?

「それは一体どういう…?」

「明け方頃に『エンシェントフェアリー』様が龍亜さんからの言伝を…それで一度精霊世界を通じて未来(あちら)世界に戻り、預かってきたんです」

アナタ、淡々と言ってるけど…端から聞いたらドンデモ作業の連発してるって気付いてる?つまりはコレを着て臨めって事か……

「それと、アナタのお義父さんから伝言を頼まれました…

『試験に勝てば俺からは卒業だ。お前はお前の絆を自分の力で作れ』、と」

全く……無駄にハードル上げてくれちゃって……

「……」

ブルーの制服を脱いで、『ソレ』に袖を通す。うん、ピッタリ。そしてグローブの部分は外して、デュエルディスクを装着。態々自分のD・ホイールから外して渡してくれるんだから無駄に親馬鹿だよな。

この際良いか…これで負けたらミーアに渡して返せば良いし、逆に勝ったら俺のものだもんな。ただし調整は欠かさないけど。

「似合ってますよ」

「『馬子にも衣装』って言いたいんだろ?」

「お世辞は嫌いなので…」

じゃあ、ホントに似合ってるって事?でも裏を返すと師匠のコートは似合わないってか……師匠、コートも謹んで返却しますんで。てか、無表情でお世辞じゃないって言われてもこっちはどう言えっつの?

「じゃあ、行きますか」

「私は観客席に……それと」

「まだ何かあんのか？」

「勝ったら、……褒めてあげます」

俺は子供かっつーの。

実技試験・デュエル場

いや～、緊張する。てか、誰が相手だ？これでこの間の取り巻きとかだったら怒るぞ？容赦しないし。

相対したのは、ツインテールの女子。薄い紫色の髪をしてちょっとツリ目のキツそうな性格そう。

「アンタが相手か？

「そ。藤原雪乃よ、よろしく」

そう言って握手を求めてくる。意外と礼儀正しくてビックリした。

「不動カイトだ。こちらこそよろしく」

握手を交わすと、丁度クロノス先生がやってくる。うん、唐突に殴りたくなってきた……多分生理的に嫌いなんだと思うことにして…

…掻い摘んで説明すると、学園での非公式戦負け無しという戦績上、他の生徒では釣り合わないとの事での組み合わせらしい。

「これに勝っても負けても両者にペナルティはありません～ノ。お解りでしょうか？」

お互いに頷くと定位置へ。距離を開けて向かい合うと、互いに自分のデッキをシャッフル。といってもこっちはオート。それには藤原も他の生徒も驚きの声を上げる。
しまった。いつものクセでそのままシャッフルしちゃったよ。も、もう遅いか……

「随分と便利ね」

「義父さんのお手製だからな。ちなみにカード選択も自動」

他にも録音機能等々、既にディスクを通り越して万能器具だ。

「んな事より……さっさと始めよう。後が閊えてるんだ」

「そうね…それじゃあ、

「決闘（デュエル）！！！」」

カイト　ＬＰ＝４０００

雪乃　ＬＰ＝４０００

「先攻は私ね…ドロー」

熱くなる性格ではない・か。冷静に分析して手持ちで対処できるようにデッキ構築されてるんだろうな……そして、やっぱり何か気持ちがスッキリする。とっても判り易く言うと、視野狭窄ではなく、逆に全てが広く見える。視野全体に意識を集中できるようだ。その気になれば相手のクセを初見で見破れそうだ。

「私は『マンジュ・ゴッド』を攻撃表示で召喚して、効果を発動」

マンジュ・ゴッド　ＡＴＫ＝１４００　ＤＥＦ＝１０００

「このカードが召喚・反転召喚に成功した時、自分のデッキから儀式モンスター、もしくは儀式魔法を手札に加える事が出来る。私は『高等儀式術』を手札に加えるわ」

とすると、あのデッキは儀式召喚特化型か……あのサーチ手段からすると、一度召喚しないと回転しづらいのか。

「カードを二枚伏せて、ターンエンド」

何もしない。なら手札にモンスターが来てないのか。先にモンスター、次に儀式魔法がセオリーでも何か考えがあるんだろ？

「じゃあ、その前に……」

大きく深呼吸。慌てない慌てない……これは命賭けてるワケじゃないし、焦りは無しにして。

2回目。

3回目。

「俺のターン！！」

勢いよく、それでいてカードを痛めずに引き抜く。手札は申し分無いが、無理はしない。焦れば相手の思うツボだ。ならこっちも、

「手札より魔法（マジック）カード、『手札抹殺』を発動！これにより、お互いの手札を墓地に送り、その枚数分だけカードをドローする」

「嘘!?いきなり『手札抹殺』!!?でも、こっちは止める気は無いわ」

じゃあ、遠慮なく。今の手札も悪くは無いが、ほとんどが墓地で機

能するカードだ。墓地に送って……五枚ドロー。っと、確認が終わったところで、

「墓地の『ダンディ・ライオン』の効果を発動！」

墓地から枯れかけている向日葵が顔を出し、フィールドにタネを飛ばす。タネが埋まったと思うと、そこから綿毛が二つ現れる。

「このカードが墓地に送られた時、自分フィールドに『綿毛トークン』２体を守備表示で特殊召喚する。ただしこのトークンを特殊召喚したターン中、『綿毛トークン』をリリースできない」

「あの中にいたのね…というか、『リリース』って何？」

「俺なりの『生け贄』の呼び方だよ。子供が言うには語弊があるだろ？」

「それもそうね…お次は？」

落ち着こうね。深呼吸をオススメするよ……手札に目を通すと、そこにはコミカルなガス缶と、青い巨体の大男。でも今は使えない……なら、

「俺は『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

ジャンク・シンクロン　ＡＴＫ＝１３００　ＤＥＦ＝５００

「それは……意外と趣味が悪いのね」

「何も無いなら黙って見てろ……自分フィールド上に、『ジャンク』と名の付いたモンスターが存在する時、『ジャンク・サーバント』を特殊召喚できる！」

ジャンク・サーバント　ＡＴＦ＝１５００　ＤＥＦ＝１０００

今度は継ぎ接ぎだらけの機械の人形。オレンジのへっぽこ機械に継ぎ接ぎ人形。馬鹿にしたいならお好きにどうぞ？ただし、笑った分だけの代償は払ってもらうけどな。

「一気に四体……どんな展開力なの？」

トークンを含めても四体が限界か……『ボルト・ヘッジホッグ』の効果は使わないほうが良いな…このデッキじゃ一度が限界だし。

「レベル４の『ジャンク・サーバント』に、レベル３の『ジャンク・シンクロン』をチューニング」

「チューニング？じゃあ、ソレが噂の……」

スターターを引っ張った『ジャンク・シンクロン』が三つの輪になり、『ジャンク・サーバント』を星に変えながら包み込む。

「『集いし怒りが、忘我の戦士に鬼神を宿す。光さす道となれ』！！」

そして現れたのは、骸骨の様な仮面に、巨大な剣を携えた赤き鬼神。

「シンクロ召喚！吠えろ、『ジャンク・バーサーカー』！！」

たとえどんなに冷静でも……エンジン全開で……振り切るぜ！！

第１２話　白銀の翼、届かない目標（後書き）

試験第一弾、如何だったでしょうか？

短くて申し訳ございませんが、ご容赦下さい。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第１３話　いつか見た流星、Ｃｌｅａｒ　Ｍｉｎｄ（前書き）

さて、試験編第二話です。ちょっとぶっ飛ばしてますけど気にせずご覧下さい。

今回のキーカードは、『ファイナル・アタック』

ス「出しちゃいました、オリジナルカード。効果はシンクロモンスター１体を選択し、そのモンスターが戦闘を行う時、攻撃力を倍にする効果。そしてエンドフェイズ時にその選択したモンスターを破壊する」

カ「出さないといってた割には出したな。しかもアニメオリジナル」

ス「元々はそうだけど、本来はＳｐ－スピードスペル－だし、正式に使えたのはＷＣＳ２０１１だからね」

第13話　いつか見た流星、Ｃｌｅａｒ　Ｍｉｎｄ

ジャンク・バーサーカー　ＡＴＫ＝２７００　ＤＥＦ＝１８００

赤き鬼神の登場で一気に会場のボルテージが最高潮に達する。それでも冷静に見つめる者、いつも以上に興奮する者、様々な感情が入り混じった会場は、デュエルが終わるまで止むことは無いだろう……

「それがシンクロ召喚ね……いいわ、ゾクゾクしちゃう…」

あの～、これ一応デュエルなんだけど…いいか。彼女のフィールドには伏せカードが二枚と、『マンジュ・ゴッド』。あの伏せカードが気になるけど…先制あるのみ！

「『ジャンク・バーサーカー』の効果発動！墓地に存在する『ジャンク』と名の付いたモンスターをゲームから除外することで、相手フィールド上のモンスター１体の攻撃力を、除外したモンスターの攻撃力分下げる！俺が除外するのは、『ジャンク・サーバント』」

墓地のゾーンから出てきた『ジャンク・サーバント』を上着の内ポケットにしまい、そのカードの攻撃力分だけ『マンジュ・ゴッド』の攻撃力が下がり始める。というより、あれの攻撃力は既にゼロ。

マンジュ・ゴッド　ＡＴＫ＝１４００　ＤＥＦ＝１０００　↓
ＡＴＫ＝０　ＤＥＦ＝１０００

「攻撃表示が仇になったな。『ジャンク・バーサーカー』で『マンジュ・ゴッド』を攻撃！」

「ダ・メ。罠（トラップ）カード、オープン。『攻撃の無力化』を発動。相手の攻撃を無効にして、バトルフェイズを終了するわ」

やっぱり攻撃を防いできたか。だが、それも予測の内だ。

「カードを一枚伏せ、ターンエ「ここで、罠（トラップ）カード、オープン。『強制脱出装置』を発動。私の場の『マンジュ・ゴッド』を手札に戻す」何！？」

地中から出てきた何かしらの装置に『マンジュ・ゴッド』が捕まり、そのまま直上に射出。ある程度の高さまで飛ぶと、そのままカードに戻り彼女の手札に戻った。

一体何が狙いだ…態々自分のカードを手札に……まさか！

「くっ！！ターン、エンド」

「私のターン、ドロー」

「ねえ、三沢君？何で態々自分のモンスターを手札に戻したンスか？」

「恐らく…手札に儀式モンスターを加えるためだろう」

「どういうことですの？」

「そうだよ！！『センジュ・ゴッド』があれば簡単だろ！？」

「その『センジュ・ゴッド』が手札に来てなかったら……？」

三沢の言葉に一同がハッとする。

「確かに『センジュ・ゴッド』は、召喚に成功した時、儀式モンスターを手札に加える効果を持っている。だが、『マンジュ・ゴッド』よりもサーチ範囲は極端に狭い……とすれば、『マンジュ・ゴッド』を可能な限り使い回して、儀式召喚に繋げるしか方法は無い」

「私は『マンジュ・ゴッド』を再び召喚して、効果を発動。今度は儀式モンスター、『終焉の王デミス』を手札に加える」

やはりソレが狙いか…確かにあのモンスターは召喚しないと効果を発動できない。しかし、儀式召喚は特殊召喚扱い……とすれば、ピースは揃ったか。

「更に手札から儀式魔法『高等儀式術』を発動。手札の儀式モンスター1体を選択し、そのカードとレベルの合計が同じになるように自分のデッキから通常モンスターを墓地へ送って、儀式モンスターを特殊召喚する。デッキから『エルフの剣士』と、『ヂェミナイ・

エルフ』を墓地に送って、『終焉の王デミス』を特殊召喚！」

彼女の両端に現れた松明から青い炎と共に星が四つずつ巻き上げられ、ソレが一つになったとき…白銀の鎧を身に纏った、文字通り終焉の王が降り立つ。

終焉の王デミス　ＡＴＫ＝２４００　ＤＥＦ＝２０００

「出たか…儀式モンスター。まさかお目にかかれるとは思わなかった」

「それは良かったわね…ついでに『終焉の王デミス』の効果発動！自分のライフを２０００支払う事で、相手フィールド上のカードを全て破壊する！『終焉の嘆き』」

紫色のオーラと共に藤原のライフが一気に半分に下がる。そのオーラを吸い切った『デミス』が、持っている巨大な斧で俺のフィールドを一掃する。

「ぐっ！！！！」

ぅわぁ～…ホント強烈。ライフ２０００は痛いが、それでも相手のフィールドを除去できるんだ。破格の効果だな…。

「さぁて、お次は…バトルよ。『終焉の王デミス』で直接攻撃（ダイレクト・アタック）！」

これが通れば、確実に負ける。てか、敗北へ大きく前進してしまう…だがここは、

カイト　ＬＰ＝４０００　→　ＬＰ１６００

敢えて受ける！！！

「ぐぁああっ！！！」

振り下ろされた一撃に大きく仰け反る。結構キツい一撃だ。もう半分も残ってない…だが、諦めない！諦めるか！！

「あらあら…そんな一撃でもう終わりかしら？次で決めるわ…カードを一枚伏せて、ターンエンド」

っ痛ぇ～……

「俺の……」

何だ？手が、震えて……カードが…取れない。くそっ、止まれって！！

「どうしたの？ま・さ・か、怖いの？」

怖い…？

何が？

負けるのが？

今まで負け続けてきたのに、今更？

違う……俺は、

「俺のターン……ターン、エンド」

「ちょっと…何もしないの？ま、良いわ。私のターン、ドロー」

そうだ。いくら負けたって、いくらボロボロにされて、カードを破り捨てられても……それでも、それでも！！

「バトル！！『終焉の王デミス』で直接攻撃（ダイレクト・アタック）！！」

俺は……負けない！！

轟音。

今まで無傷で勝ち続けてきた男がここで敗れる。それには、対極の構図が出来上がっていた。尊敬、畏敬、様々な感情が会場内を包む。その中には悲しみにも似た感情が一つ。それは十代達だ。

「あいつが…負けた？」

「そんな…あいつが負けるなんて、アタシに勝っておいて…自分はそれかよ？」

「あっ！！皆、見て！ライフが…」

翔が指差したのは、電光掲示板。そこにはカイトのライフが一桁もライフが減っていないままだった。

「って事は…」

「ボウヤ……一体何をしたの？」

煙から晴れたのは、無傷の俺。てか、『デミス』がデカ過ぎなんだよ。それじゃあ見えないだろ？

「手札にあった『ジャンク・ディフェンダー』の効果を使った…こいつは相手の攻撃宣言時、手札から特殊召喚出来る。これで『デミス』の攻撃を防いだ」

コイツは『手札抹殺』の時に加わったカード。『ニトロ』と『サルベージ』が来てたけど…コイツ等じゃあ行動がワンテンポ遅れる上に、『デミス』で一発。
ソレを見越して、ワザとターンエンドしてた。

「ふぅ～ん、結局負けるのが怖いんだ？「違う…」何？」

「俺は負けたって構わない。いくらでも侮辱されたって反論して、それを正していく。だけど、それでも……『負ける』よりも一番怖いのは、『絆』を失うのが一番怖い。その『絆』を失わないために、俺は進む…俺には、やらなきゃいけないことがあるんだ！！」

そう。俺は義父さんに誓ったんだ。絶対に失わない。壊してはいけないモノを…絶対護るって！！

「なら、それを見せてみなさい。このままターンエンド」

だったらそれにこたえなきゃいけないでしょうに。
とはいえ、相手はライフコストがあるとはいえ、制圧力が高いモンスターに伏せカードが一枚。ん？あの場所って…賭けてみるか。

俺は絶対に負けない……そして、『絆』を繋ぐ！！

「俺の……

タァァァァン！」

引いたのは、『ミスティック・バイパー』。

「来たか！」

これが俺の…逆転の一手。これで戦局を引っ繰り返せる！

「俺は『ミスティック・バイパー』を通常召喚！」

出てきたのは小太りな笛吹き師。こいつを甘く見るなよ？

「『ミスティック・バイパー』の効果発動。１ターンに一度、このカードをリリースする事で、デッキからカードを一枚ドロー出来

る。そして、ドローしたカードがレベル1のモンスターだった場合、もう一度ドロー出来る。『ミスティック・バイパー』をリリース！」

金色の粒子に変わり、デッキからカードを引き抜く。引いたのは一つ目の鉄屑。

「俺が引いたのはレベル1『アンノウン・シンクロン』…よってもう一枚ドロー出来る」

そしてもう一度デッキからドロー。

「一気に二枚も増やして…運が良いのね。でも、そんなドローじゃ『終焉の王デミス』は破壊出来ないわよ？」

「勝負はこれからだ！手札より『アンノウン・シンクロン』を特殊召喚！」

虹色の渦から出てきたのはアンテナを一本生やした一つ目の鉄屑。ここから一気に行くぜ。

「このカードは自分フィールド上にモンスターが存在しない時、デュエル中に一度だけ特殊召喚出来る。更に手札から魔法（マジック）カード、『二重召喚』を発動！これにより俺はもう一度通常召喚を行うことが出来る。『アンノウン・シンクロン』をリリースし、『サルベージ・ウォリアー』をアドバンス召喚！」

再び虹色の渦が現れその鉄屑を飲み込むと、今度は水色の体色をした大男が現れる。

「アドバンス召喚？…何ソレ？」

そんな疑問、今は要らないだろ?とっとと次へ。

「『サルベージ・ウォリアー』の効果!このカードがアドバンス召喚に成功した時、墓地にいるチューナー1体を特殊召喚できる。蘇れ!『ジャンク・シンクロン』!」

鎖に引っ張られて出てきたオレンジ色の機械人形。これで…

「レベル5の『サルベージ・ウォリアー』に、レベル3『ジャンク・シンクロン』をチューニング!」

スターターを引っ張ると同時に、エンジンが唸りを上げ、三つの輪に変換される。そしてその輪が『サルベージ・ウォリアー』を包み、五つの星に変わる。

「見ててくれ、義父さん!これが俺達の『絆』だ!『集いし願いが、新たに輝く星となる。光さす道となれ』!!!」

そしてその五つの星が一筋の光になる時、

「シンクロ召喚!!!!!」

『星屑』の竜が眩い光と共に、その姿を晒す。まるで『主』の願いに堪えるが如く。

「飛翔せよ！！『スターダスト・ドラゴン』！！！」

スターダスト・ドラゴン　ＡＴＫ＝２５００　ＤＥＦ＝２０００

「すげ～…」

「綺麗…」

それぞれの感嘆の言葉と共に、『スターダスト・ドラゴン』が光を撒き散らす。その輝きは、息子になったばかりの俺がいつも見ていた……義父さんのデュエルに出てくるエースモンスター。

「レベル8のシンクロ召喚……こんなに綺麗なモンスターがいたなんて…」

「これが俺の『絆』……俺のエース、そして…義父さんのエースモンスター。『スターダスト・ドラゴン』だ」

「でも折角で悪いけど、退場してもらうわ。罠（トラップ）カードオープン、『奈落の落とし穴』を発動。これでアナタのモンスターを破壊して、「『スターダスト・ドラゴン』の効果を発動！」な……ここで効果を使うの！？」

「『フィールド上のカードを破壊する』効果が発動した時、このカードをリリースする事で、そのカードの効果を無効にし、破壊する！」

こっちじゃチートだろうけど、向こうは平然と使えるし、対処法はいくらでもある。でも所見じゃそれは推し量れない。

「そんな効果を召喚時に使うなんて…」

「羽ばたけ！『スターダスト・ドラゴン』！！『ヴィクテム・サンクチュアリ』！！」

名前の通り、星屑となって『奈落の落とし穴』を包み込み、粒子へと変えていく。そしてその粒子が分かたれ、それぞれの墓地に収まる。

「このままターンエンド…と言いたいが、墓地より『スターダスト・ドラゴン』の効果を発動」

「な！？まだ効果があるの？」

「このカードは、自身の効果が適用されたターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためにリリースされ、墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。再び飛翔せよ！」

墓地より淡い光と共に、『スターダスト・ドラゴン』がその姿を再び見せる。

「何て効果だ！！実質ノーコストでカードを破壊できるなんて…」

「ズルイ、を飛び越えて反則ッスよ…」

「私のターン、ドロー……『終焉の王デミス』を守備表示に変更。カードを二枚伏せて、ターンエンド」

やっぱり…思ったとおりだ。ならこっちから仕掛けてみるか。

「俺のターン！」

おいおい、今頃来るなよ……もう墓地行っちゃったっていうのに。でもまだ早いか？いや仕掛ける！！

「墓地にいる『グローアップ・バルブ』の効果を発動！」

「何時の間に…ふぅ～ん、最初のか」

「その通り、デッキの一番上のカードを墓地に送ることで、『グローアップ・バルブ』を特殊召喚出来る！来い！」

グローアップ・バルブ　ＡＴＫ＝１００　ＤＥ＝１００

「更に手札から『チューニング・サポーター』を通常召喚！」

中華鍋を被った小柄な戦士が球根の化け物の隣に降り立つ。こっから先は使いこなせるか、ちょっと不安だけど……俺だって、やってみせる。だって俺は…

「俺はレベル1の『チューニング・サポーター』に、レベル1『グローアップ・バルブ』をチューニング！」

「嘘！！？今度はレベル2のモンスター！？」

色々難しいんだぞ？このレベル調整……どうやったってレベル一つ分は事故るから。だったら純粋に召喚したほうが良いに決まってる。

「『集いし願いが、新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ』！！」

『チューニング・サポーター』を包んだ輪が一筋の光と共に、F1の胴体をしたロボットに姿を変える。

「シンクロ召喚！！希望の力、シンクロチューナー『フォーミュラ・シンクロン』！！」

フォーミュラ・シンクロン　ＡＴＫ＝２００　ＤＥＦ＝１５００

「今度はレベル2！？」

「そんなシンクロ召喚すら可能なのか？アイツは…やはり、俺の予想を遥かに超えている」

「でも、それで戦闘破壊しようというのなら無駄なことね…」

「一体だけで力を測るなよ…」

「？？？」

ああ、一体じゃ確かに弱いさ…でもな、いくらステータスが低くても…

「どんなに力が無くても、手を取り、力を合わせることで…『絆』を繋げることで、こいつ等は強くなる！！義父さんが俺に手を差し伸べてくれたように…俺は、こいつ等を信じる！！」

「……」

「墓地にいる『チューニング・サポーター』の効果。このカードがシンクロ召喚の素材として墓地に送られた時、デッキからカードを一枚ドロー出来る。そして、『フォーミュラ・シンクロン』の効果をチェーンして発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、デッキからカードを一枚ドロー出来る！」

「ま、また二枚も……言ったでしょ？そんなドローだけじゃ…？」

その瞬間、目の前がクリアになる……頭の中も…これは！？

そうだ。俺は『不動　カイト』だ。俺は…自分を、こいつ等を信じると言ったんだ。同じ人間には決してなれない。所詮猿真似に過ぎない。それでも…俺は、

『不動　遊星』の息子だ!!

「俺の新たな境地……『クリアマインド』！！！」

赤い光が俺のフィールドを支配し、その中心には俺。その上に二体のモンスターが直列に並ぶ。

「な、何よ！！？」

「レベル８、シンクロモンスター『スターダスト・ドラゴン』に、レベル２、シンクロチューナー『フォーミュラ・シンクロン』をチューニング！！」

『フォーミュラ・シンクロン』が直上の遥か先で二つの輪に変わる。そしてソレを合図に『スターダスト・ドラゴン』が真っ直ぐ突き進む。二つの輪を通過したとき、俺の下に舞い戻るように加速してく

る。

「『集いし夢の結晶が、新たな進化の扉を開く。光さす道となれ』！！！！」

その口上の後、更に加速を付けて俺の真横で空間転移する。

「消えた！！！！？」

その瞬間、俺のエクストラデッキの一番上が光を放つ。これを引けば…俺は、勝てる！！

「『アクセルシンクロ』ォ！！！！！」

引いたカードは……『流星』の名を持つそのカードは……、

「生来せよ！！『シューティング・スター・ドラゴン』！！！！！」

第13話　いつか見た流星、Ｃｌｅａｒ　Ｍｉｎｄ（後書き）

びょ、描写が…全く以って滅茶苦茶だ。

後日、修正致しますので…

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第１４話　試験終了、饗宴へ……（前書き）

久々の更新でございます。

さあ、今回のキーカードは…『集いし願い』

ス「オリジナルカード第二弾です。効果は…」

カ「ドラゴン族シンクロモンスターが墓地に5体以上存在するときに発動。『スターダスト・ドラゴン』をエクストラデッキから特殊召喚し、墓地に存在するドラゴン族シンクロモンスターの攻撃力分だけ攻撃力がアップする…ってここまでチートだろ！！？」

ス「更に、相手モンスターを戦闘で破壊したとき、墓地のドラゴン族シンクロモンスター1体をエクストラデッキに戻す事でもう一度戦闘できる。ただし、エンドフェイズ時に『スターダスト・ドラゴン』はゲームから除外される」

＊この効果はＴＦ６版なのでご容赦下さい。

第１４話　試験終了、饗宴へ……

シューティング・スター・ドラゴン　ＡＴＫ＝３３００　ＤＥＦ＝２５００

出来た……俺にも、『クリアマインド』が。あぁ、泣きそう…でも感傷に浸ってるバヤイじゃないな。

さて、現状把握といくか。

藤原雪乃　ＬＰ＝２０００
手札　二枚　伏せカード　三枚

フィールド　『終焉の王デミス』　『マンジュ・ゴッド』

不動カイト　ＬＰ＝１６００
手札　四枚　伏せカード　一枚

フィールド　『シューティング・スター・ドラゴン』

こんなもんか？アイツの伏せカードが気になるけど……何となく読めたし。でも、保険は必要だな…

「手札より装備魔法、『白銀の翼』を発動し、『シューティング・スター・ドラゴン』に装備する」

『シューティング・スタ・ドラゴン』の翼が白く輝き、大きく躍動する。

「レベル8以上のドラゴン族シンクロモンスターに装備できるこのカードは、戦闘破壊を2回まで防ぐことが出来る。更に装備モンスターが破壊される代わりに、このカードを破壊できる」

「へぇ、装備しても攻撃力は変わらないのね……でも、私の場にはモンスターが二体。更に伏せカードが三枚あるのよ？これ以上焦らしたら…イジメてあ・げ・る」

な、何か全く違うお仕置きが待ってそうだな……勝っても負けても最悪な展開になる。
ではでは、

「『手札から魔法（マジック）カード、『貪欲な壺』を発動。墓地に存在するモンスターカード5枚を選択し、デッキに戻してシャッフルした後、二枚ドローする。選択するのは、『チューニング・サポーター』、『ジャンク・シンクロン』、『アンノウン・シンクロン』、『サルベージ・ウォリアー』、『ダンディ・ライオン』の五枚を選択する」

墓地から出てきた五枚をデッキに混ぜて、オートシャッフル。その後、デッキの一番上の二枚が迫り出す。ソレを引いたら、『ジャンク・シンクロン』と『調律』が出てきた。何故？

「『更に、『シューティング・スター・ドラゴン』の効果を発動！！」

「…！（やっぱり来たわね。でも、まだ私には『聖なるバリアーミラーフォース－』が残ってる）」

「自分のデッキの上から5枚までを確認し、その中にチューナーモンスターがいた場合、その枚数分だけ攻撃できる！」

すっごくギャンブル効果だけど、デッキトップ操作の効果カードを使うよりは、デッキ圧迫にならない。さっきの『貪欲な壺』で、消費したチューナーモンスターを補充すれば充分な保険だ。

「俺のダチが言っててな……『人生には刺激が必要』なんだとよ。これも悪く言えばギャンブル効果だけど、俺は違う。俺はデッキにいるこいつ等を…信じる！一枚目！……罠（トラップ）。二枚目！！……チューナーモンスター、『エフェクト・ヴェーラー』！」

今のところは1／2の確率。でもこっからは……本当の運試し！

「思い切った賭けだな…」

「何でだよ？」

「デッキの上から5枚、というのは少ないとはいえない枚数だ。

その中にチューナーモンスターがいても最低一回の攻撃…つまり通常通りの攻撃しか出来ない。逆に言うと、モンスターが一枚も引けなければ攻撃できないんだ。そして、藤原のフィールドには二体のモンスターに伏せカード。これ以上に危険な賭けはないぞ？」

「三枚目！！……よし、チューナーモンスター、『デブリ・ドラゴン』！」

「これで私のフィールドのモンスターを全て攻撃できるのね…ホント、ゾクゾクしちゃうわ」

「真面目にやってるか？」

「いつでも大真面目よ。で、一つ、”賭け”をしない？」

「賭け？」

「そこから先、一枚でもその『チューナーモンスター』が引けたなら、アナタの勝ち。何でも言うこと聞いてあげる。もし引けなかったら……明日から私のボディガードになってくれない？」

要は手元に置いて遊びたいってことだろ？魂胆見え見えだぜ？

「悪いが…先約があるんで、お断りっ！……ちっ、『スピード・ウォリアー』か」

これで後には引けない。効果を使った以上、最後まで使用しなければいけない。そして、アイツを倒すことができるのは…これがラストチャンス。

「どうしたの？最後は神頼みでも？」

それこそ冗談。俺の中では以ての外だ。

「五枚目！！！」

そして、五枚目のカードは……一つ目の鉄屑！

「チューナーモンスター、『アンノウン・シンクロン』！よって『シューティング・スター・ドラゴン』はこのターン、三回の攻撃が可能になる！！」

「ホントに引いちゃったし……賭けはアナタの勝ちね。さ、どうぞ？」

「なら、バトル！！『シューティング・スター・ドラゴン』で『終焉の王デミス』を攻撃！！『スターダスト・ミラージュ』！！！」

己の分身を二つ形成し、黄色の分身が『デミス』に向かっていく。
が、俺の視線は藤原の口元だ。ほくそ笑んでやがる。

「かかったわね、罠(トラップ)発動。『聖なるバリアー ミラーフォース ー』。これにより、そのドラゴンちゃんを破壊するわ」

それこそこっちの台詞だ!!見せてやるよ!

「『シューティング・スター・ドラゴン』の効果発動!!フィールド上のカードを破壊する効果を無効にし、破壊する!」

「でも、『リリース』…するんでしょ?」

「いいや、リリースは無い。ノーコストで破壊だ!!」

翼から溢れ出た光がカードを包み、霧散する。

「そ、そんな!!?」

防ぐものが無くなった『デミス』に直撃した分身の次に青い分身が『マンジュ・ゴッド』を睨みつける。アレ?俺まだ攻撃宣言してないんだけど?

「いっか…『シューティング・スター・ドラゴン』の二回目の攻撃。『マンジュ・ゴッド』を貫け!!」

しかも攻撃表示のまま放置するなよ。明らかにプレイミスだろ!?
万の手で受け止めるも、儚く散っていく『マンジュ・ゴッド』。交通事故みたい。

雪乃　ＬＰ＝２０００　↓　ＬＰ＝１００

一気にギリギリのラインまでＬＰ下がってるし。てか、ここまで減ったの見たことなんだけど？

「流石ね……私の負けだわ」

「こっちは逆に『ありがとう』だけどな」

「えっ？」

「『シューティング・スター・ドラゴン』で直接攻撃（ダイレクト・アタック）！！！」

そして銀色に輝く『シューティング・スター・ドラゴン』の一撃で、この戦いに終止符が打たれる。

雪乃　ＬＰ＝１００　↓　ＬＰ＝０

「勝者、シニョール不動なノ～ネ！！」

クロノス先生の宣言により、俺と藤原の実技試験は終了。ま、ライフは削られたけど、ここでは全戦全勝中。無敵？いいや、焦るときは焦るよ？流石にライフが後１００で勝ったとか、神業的な調整は出来ませんよ？ワタクシ。

「やっぱり、強いのね。身体が火照ったわよ」

「ったく、今度は試験云々じゃなく…純粋にデュエルしてみたいな」

「それは同感ね」

そこで握手と同時に惜しみない拍手が会場全体を包む。それにはお互いに驚いたけど、その客席の中に見慣れた人がいた。やっぱり見に来てたか。俺の視線に気付いたその人はそそくさと会場を後にする。

「悪いな、今日はここまでだ」

「で？勝ったんだから何か無いの？」

ああ、賭けの話か……う～ん、

「後で考える。今はちょっと忙しくて…」

「結局焦らすのね…良いわ、待ってるからね」

握手を終えると、走って会場を後にする。急がないと逆に腹を立てかねない。

廊下にて。

壁に背を預けていたシェリルがコチラに気付くと、笑顔で手を振っている。余程機嫌が良いらしい。

「見てたわよ。やっと使ったのね…見たのは二度目だけど、やっぱり綺麗ね」

「喜んでもらえて何よりだ。それに、こっちは約束と試練を一個クリアしたよ」

「試練？」

シェリルに義父さんからの伝言の事をありのままに伝える。

「ふ～ん、それで血気盛んになってたワケだ」

「ていうか、何時から居た？」

「勿論、最初からよ」

すまん、気付かなかった。

「ま、良いわ。こっちも逆にお礼したいし…」

ん？何かしたっけか？

「この後校長先生に話すんだけど、撮影が終わる日に小っちゃなライブでもやろうかなって……こんなサービス、滅多にしないんだから」

成程、騒いでた理由はソレか。どうせグレイスさん辺りと口論して

たんだろ？

「な、何で知ってるのよ！？」

「いや、隣が俺の部屋なんだが」

「……」

そこで驚いた顔するな。結構レアだけど、意外と…何つーか、可愛い。

その表情の後、凄く意地悪そうな顔に変わる。ヤバい、これは本能的にヤバいと告げている。ＭＡＸスピードで逃げろ、と。

「何で今まで言わなかったのかな？」

え～と、まったく目が笑ってないんですが……

「言う暇を与えなかったのは、誰だ？」

ここで軽く拳骨したいけど止めた方が良いようだ。この姫様は少しでも機嫌を損ねれば戻るのに一週間はかかる。

「で、話を戻すが…何時にやる気だ？門限や諸々あるだろ？結構厳しいんだぞ？」

「そこはこっちで調整するわよ。流石に規則までは融通して欲しくないし」

「だろうな……じゃあ、俺はいつも通りソデからみせてもらうかな」

「それでもいいんだけど……『アレ』、歌わないの？」

『アレ』……あぁ、『Ｂｕｒｎｉｎｇ　ｆｉｒｅ』か。アレはちょっと、な。

「俺を有名人にする気か？前みたいに見せびらかすのは勘弁な」

一度、彼女のライブにサプライズで出て一曲歌ったが……俺にとっては、酷かった。その後に他の事務所からオファーが多数来たのを俺は後から知った。勿論、グレイスさんが全て断ったらしいが。

「良いじゃない、これでアナタもデビュー出来るんだし」

「ランカで充分だろ！？お前の場合」

ランカ・リー……半年前のオーディションで優勝し、デビューしたシンデレラガール。アルバムの売り上げは早くもシェリルに追いつくところまで来ているらしい。ちなみに俺が会ったのは数ヶ月前、音楽番組でシェリルと共演した時からの付き合いだ。マネージャーであるお兄さんとはちょっと馬が合わない。

「ランカちゃんは今のところ成長途上だから、見守ってるだけ。アンタの場合は、ただおちょくってるだけ」

「なお質が悪いわ！！」

コイツ、やっぱり上機嫌だ。そのときだけに見せるクセは無いけど……嬉しいのは隠せないようだ。

「ちっ…今日は弄られ過ぎだな。もう戻るぜ？」

「うん。私も撮影に戻るから…勉強、サボらないでよ！？」

いたよ、ここにも母親のようなコメントする人……

カイトが見えなくなると、シェリルはポケットから携帯電話を取り出し、ある所に電話をかける。

「あ、もしもし？そう、シェリル。悪いんだけど…明日明後日のスケジュールって……そう、明日の夜からは一日空いてるのね？ちょっと、こっちに顔出せる？うん、ミニライブなんだけどね、出てくれるかな？ギャラはアイツが出すから、そうよ。カイト……え？アイツ今デュエルアカデミアに居るの。私はポスター撮影で来てるんだけどね。それで……うん、じゃあ明日の夜に来るのね。解った

わ…楽しみにしてる。じゃあね」

通話を終えると、一息ついて外へ向かう。

「さぁて、明日からが楽しみね」

第１４話　試験終了、饗宴へ……（後書き）

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第１５話　再会と饗宴、アタシの歌を聴けぇ！！（前書き）

さてさて、構成と登場シーンを考え続けた結果を投稿します。

今回のキーカードは、無いです。

カ「またかよ！？」

ス「仕方ないだろ。構成ばっかり考えてたんだから…」

カ「ま、いっか。どうせ何かサプライズでもあるんだろ？」

ス「……」

カ「おい」

第１５話　再会と饗宴、アタシの歌を聴けぇ！！

翌日、ようやくの休日。

試験も終わり、やっとのんびりできると思ったら…やっぱり撮影ですよ。ええ、解ってますよ。一応そういう契約だし。だけど、

「何でイメージアップのポスターなのに、海岸なんだ？」

そう、俺の目の前に広がるは青い海。ここで撮影しようって思ったスタッフ、手ぇ挙げろ。

「仕方ないじゃない。決まったものは」

当のシェリルは水着、ではなくオベリスクブルーの制服である。本人はオシリスレッドの方が気に入ってるようだが、寮の設備の所為か、着るのはＮＧらしい。

「それはそうだけど、何で俺まで制服？」

「それも仕方ないわ。撮影に協力的なのってアンタだけだし……それに、気兼ねなくいられるのってアンタ以外居ないし」

「…で、俺は何したらいいんだ？」

流石に勝手までは知らん。ボディガードだし、何より撮影に同行したのはこれが初めて。意外かもしれないが、撮影自体に興味が無か

ったのも理由の一つ。それ以外には……居ても手持ち無沙汰だから。

「デュエルしてる様子だけ撮影できればそれでいいって。適当にモンスター出してくれれば絵になるらしいし」

ちなみに、シェリルもデッキ持ってます。俗に言う『ロックバーン』を。幾度と無く泣かされかけた事がある。ウィジャ盤でロックは流石に泣いたわ。護封剣とハリケーンで6ターン位何も出来ませんでした、ハイ。

「そろそろ始めるわよ…ほら、準備なさい」

「へイへイ、人使いの荒い事で…」

そして一時間後。

良い絵が撮れたとの事で、スタッフもシェリルもご機嫌だ。撮影の

間には互いのデッキを見せ合ったり、飲み物を取り合ったりとつい最近までの事を繰り返した。そういえば、義父さんともこんなやり取りしてたっけ？
ガキの頃にはD・ホイールの調整を邪魔したり、食事の取り合いしたし……家族以外ではしたことなかったな。

「疲れた？」

「いや、こういうのも久しぶりだな、って……」

「え？」

「俺、義父さん以外でこんなに和気藹々としたのって無いんだよ。それまでは殺伐とした中に居たからな……何か、懐かしいって言うか」

「ねえ、アンタの本当の両親は？」

「親父の顔は見たこと無い。生きてるのか死んでるのか…お袋は去年、心臓の病気で……」

これは本当だ。親父の顔なんて実際に見た記憶はないし、物心付いてからは会った事なんて一度もない。ホントに放蕩し過ぎていて、お袋が癇癪起こしかけたっけ……その後俺は家を飛び出し、親父を見つけるために『サテライト』で喧嘩に明け暮れた。捕まりかけたことだって何度もある。でも、それでも親父に会いたかった。

「それよりも今が良いんだよ。こんなに楽しく過ごせて満足してるし」

「そう……アンタも…」

そこでシェリルが暗い表情をしているのに気付く。確かコイツも…

……

「シェリルさぁ～～～ん！！！」

暗い空気を吹き飛ばすような元気な声。その声には聞き覚えがあった。緑の髪に幼い顔立ち。アレ？何で居るの？

「ランカちゃん！！」

走りよった二人は手を取り合い、再会を喜び合っている……俺だけ置いてけぼりッスか？

「おい、何でランカが居るんだ？」

「久しぶり！！随分早く来たのね？」

「はいっ！収録が早く終わったので」

「おい！！話聞けよ！？」

ホント、空気になるって嫌だね。悲しくなってきた。

「邪魔してやるな、感動の再会ってヤツだよ」

そこに入ってきたのは、ランカのお兄さんである『ブレラ・スターン』。孤児院で引き取られた二人は別々の親に引き取られたらしく、別の性を名乗っているが、血の繋がった兄妹だ。

「ブレラ……」

「お前の馬鹿面を見るために来たんじゃない。ランカが来たいと言ったから来たんだ」

相変わらずの毒舌だこと…ま、オベリスクブルーの悪口よりかはまだ優しい方だ。

「こっちだって、お前みたいな能面ヤローに会う為に居るんじゃねえんだよ…」

「お兄ちゃんもカイト君も喧嘩しないでよ…」

「喧嘩するほど仲が良いって言うじゃない。放っておいて良いわよ」

それもそれで何か悲しい……

再会を喜んだ数分後、俺のＰＤＡにメールが届く。え～と、差出人は…何故藤原が？ブレラに見えないように内容を確認すると、

『何時になったら約束を守ってくれるのかしら？』

ヲイ……こっちはこっちで俺を急かすな。

「どうした？」

こっちを見るな女男。喧騒の絶えない日々をどうしてくれようか考えてるトコにそういう風に首突っ込むな。

「何でもない……なぁ、藤原って名前に憶えはあるか？」

視線の先では、シェリルとランカが撮影に臨んでいる。それにはブレラも俺も注視する。といっても、如何わしい事ではなくちょっとした不注意でもアイドルは怪我をするし病気になる。それを前以って知っておくのもマネージャーらしい。

「聞いた事はある。夫婦揃っての名優らしい。たしか娘がココに入学してるらしいが……興味があるのか？」

「いや、昨日の実技試験の相手だったんで気になったんだ」

「そうか……ボディガードを辞めたらしいな」

「辞めたんじゃなくて、一時的な休業だ。やる事はココにある」

そういえば、どうしたものか……サーチャーの再設置は終わったよ

うだし、まだ反応があったなんて聞かない。ただ……ちょっと不安だな。何時来るか、では無く、どうやって来るのか、だ。一歩間違えたらこっちでの騒動に紛れてやって来る、なんてことになったらどうすりゃ良いの？

「そうやって、目標があるなら…俺は口を出さないさ」

「随分と殊勝な…何か変な物でも食ったか？」

そこで俺達の会話は終わる。と同時に二人も撮影が終わったようだ。もうそろそろ昼だしな…てか、昼飯どうしよう？購買なんて空いてないだろうしな……。

そんなくだらない考え事をしてる俺の目の前にサンドイッチが差し出される。どうせシェリルが悪戯で渡しに来たんだろうと思って悪態をつこうとしたとき……そこにいたのはシェリルではなく、ミーアだ。

「サーチャー、異常無しです」

「あ、あぁ……ご苦労さん」

昨日は徹夜であぁだこうだ言っていたのに……いつ快眠してるんだよ、お前は。

「…知り合いか？」

「え？ああ……ちょっとした仕事仲間だよ」

「……そうか。邪魔なら向こうに行くが？」

「良いんだよ。俺が行けば良いだけなんだ……数分だけ抜ける」

「で？どうだった？」

「今のところは何も。ただ……」

「何だよ？」

「首の後ろ辺りが痛い、というか…疼く、というか……」

そう言ってミーアは首の後ろを擦るが、俺にも同じような事が起きてる。何か背中がムズムズする。痒いわけじゃなくて、痣、だよな？

「まぁ、何かが起こる兆候だと思って気ぃ配っとけ。俺もそれなりには気にしておく」

「世界の一大事の事なのに、よくのまあ」

「仕方ないだろ？何時来るかなんて解らないんだから…」

そこでミーアも閉口してしまう。いかんいかん、悪態つくために一緒に居るわけじゃないのに……

「たまには気晴らししろ。ちょうど明日の夜にちょっとした催し物があるからな…それでも見てろ」

そういえばライブは見たこと無いんだっけ？丁度良いからこちら側

のそういう空気でも経験してもらうか。

「ですが…」

「張り詰めた糸はいつかは切れる……そういう時だけは緩めても良いんじゃないか？」

経験者は語るってヤツです。悪しからず。

「……解りました」

何処か納得していないミーアだが、経験するに越したことは無い。それに、こういう息抜きもたまには良いか……

「はぁ～い、それじゃあ休憩入りま～す！」

ディレクターさんが大きな声でそう告げると、それぞれの仕事を切り上げて飲み物を取り出す。クーラーボックスの中身が空になったところで談笑が始まると、グレイスさんがこちらに近付いてくる。

「カイト君。午前中はこれで一段落したから、学園に戻っても大丈夫よ」

「いや、まだ午後もあるんだろ？居なきゃ意味無いだろうに…」

「それはそうだけど、学生は学業が本分でしょ？これ以上抜けてると単位に響くわ」

言われてみると、試験以外で授業に出た記憶が無い。ましてや部屋に帰っても誰もノートを取ってくれてないから実質授業としては皆に追いついていない。それを考えると後々が怖くなってきた。

「それじゃあ、行きますよ。何かあったらＰＤＡに連絡下さい」

「ええ、良いわよ。また後でね」

「『スターダスト・ドラゴン』で『首無し騎士』を攻撃！！響け！『シューティング・ソニック』！！」

「ぐわあああぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ブルー生徒　ＬＰ＝１２００　→　ＬＰ＝０

んでもって、授業後。

いきなり絡まれました。しかもこっちは朝から休憩無しで来たってのにいきなりデュエルかよ。こいつ等は……いかんいかん、ここで腹を立てても経験値の足しにならない。しかもこいつ相手じゃあ『クリア・マインド』なんて使ってる余裕ないし。

「くっそぉ!!こんなポット出の奴なんかに負けるなんて……」

ほぉう、良い度胸だな。本人を目の前にしてそんな口が叩けるのか。オーケイ、もう一戦やろうか?今度は何もさせずに倒してやる。

「相変わらずスゲェな。なあ、いつになったら俺とデュエルしてくれるんだ?」

ブルーの生徒が立ち去った後、十代が俺にそんな言葉を突きつけて来る。だから、気が向いたらだっつってんのに、コイツは……

「あのな、今は俺自身忙しいんだ。その申し出はまた今度受けてやるから」

「本当だな?約束だぜ?」

「十代もホント、諦めないわね。アナタもそろそろ受けてあげたら?」

一緒にやって来た明日香ですらそんな事をのたまってくる始末。俺に自由は無いのか……

「そういえば、校門の前で何か建ててたみたいだけど…何かしら？」

そうだ。こいつ等には言ってなかったっけ？

「ああ。あのお姫様が明日の夜、ミニライブをやるんだと。何でも場所を提供してくれた恩返しみたいだがな」

「ホントに！！？」

「…そこで何でお前が食いつくんだ？ジュンコ」

「だって、滅多に行けないシェリル・ノームのミニライブなんて……もう感涙モノよ？それを食いつかずにはいられないでしょ？」

そりゃそうだな。何せアイツのライブチケットは発売して僅か二十秒で完売してしまうほどの人気だ。ましてやプレミアチケットなんて一千万なんて値が付くほどだ。

「あ～……生でライブ見れるなんて…生きてて良かったぁ」

「「はいはい、おつおつ」」

「何でそんな呆れてんの？しかも明日香さんまで」

「え？何でかしら……自然に」

おいおい、そんなんで良いのか？一応友達だろ？

「まあ、今回はタダなんだし…ラッキーじゃないか？滅多に見れ

ないライブを満喫しろよ」

時は流れ、翌日の夜。

駄目だ、これは駄目だ。言ってみれば……こら嵐だ。

事前の告知は前以ってしてあったようだが、ほぼ全生徒集まってると思う。だって……

「うわ～…すごい人だね。カイト君」

「ほとんど全校生徒だと思って良いぞ。何せ、あの天下の歌姫『シェリル・ノーム』のライブだからな」

にしても、あんな短時間でよく会場作れたよな。ライブ会場だと大掛かりな仕掛けを作らなきゃいけないが、それはここじゃあ贅沢だよな……

「天下の、じゃないわ。宇宙の、でしょ？」

うわ、出たよ。白黒ウサギ。これでライブしようってんだから…ところどころセクシーになってるからこれはマズいだろ。

「綺麗です！！シェリルさん！」

「アリガト。あと、カイト。アンタにはライブに協力してもらうわよ？」

「あん？何でまた……」

「本場のライブみたいに音響効果とか用意してないのよ。だから、ソレの立体映像（ソリッド・ヴィジョン）使って盛り上げてもらおうと思って」

そういう事か…たしかにコッチの方がより大々的に効果使えるし、こういうミニライブではうってつけだな。

「じゃあ、協力しましょ」

「オッケー……ランカちゃんもスタンバイよろしくね？」

「はいっ！！」

「アタシの歌を聞けぇ！！！」

十六和音の音色と共に、複数のレーザーが会場を乱舞する。その中に俺はあるモンスターを忍ばせる。それは……『ロードランナー』、『ボルト・ヘッジホッグ』、『ジャンク・シンクロン』の三体。ディスクに展開したそれらのモンスターが独特の動きで中央まで行くと、スポットライトに照らされたシェリルの登場。そこでもう会場のボルテージは最高潮に。

（ここからは『ユニバーサル・バニー』を聞きながらご覧下さい。）

（俺……これ終わったら帰って寝ようかな…）

てか、帰って寝ないと…この後には俺が死ぬ。精神的な意味で……。

って向こうにいるのは……おいブレラ、何ディスク構えてんだ？俺のＰＤＡに送られてきたメールには驚くべき事が描かれていた。

『断りきれず、こうなってしまった。お前には申し訳ないが……俺も参加させてもらう』

おいおい、待て待て待て待て……まさか、デュエルではないだろうな？

『ちなみに、キミに間違いなく瞬殺されるだろうからキミのフォローだと思ってくれ』

追加が遅すぎ…ま、いいか。丁度人手が欲しかったんだ。

「さあ……派手に行くぜ！！！！」

『レッド・デーモンズ・ドラゴン』、『ブラック・ローズ・ドラゴン』、『ブラック・フェザー・ドラゴン』、『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』……そして、『スターダスト・ドラゴン』！！！

一気に五枚全てを展開すると同時に、五体の竜がライブ会場全てを飛び交う。

（来たわね……アタシも一気に飛ばすわよ！！！）

シェリルの歌声に呼応するかのように、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』が紅蓮の炎を纏い始める。って、お前が荒ぶってどうする!!?

「じゃあ、お前に応えてやるか……来たれ!!!『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』!!」

『レッド・デーモンズ』を外し、『スカーレッド・ノヴァ』に差し替えると同時に炎が会場内に巻き起こる。

「やるな…だが、こちらも!!」

ブレラも負けじと『魔王ディアボロス』を召喚すると、俺の時以上の歓声が沸き起こる。ってか、何で向こうが人気あるんだ?あんなチートカード使ってるのかよ、アイツ。

『ブラック・フェザー・ドラゴン』が黒い羽を撒き散らし、『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』が風を巻き起こす。『ブラック・ローズ・ドラゴン』がその花弁を羽ばたかせると、『スターダスト・ドラゴン』が光を照らす。
そして、『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』は現在、『魔王ディアボロス』と戦闘中。

何だ?このカオス……

「そろそろフィナーレだ……全てを照らせ!!!『シューティング・スター・ドラゴン』!!」

苦労して会得した『クリアマインド』を使い、流星の竜を召喚した瞬間、既に曲も佳境に入った。

「イタイのがスキ」

その時目にしたのは、シェリルの艶美な表情と、ブレラが召喚した『黒の魔法神官』。おい、何でお前がそのカードを持ってる。

「悪いが演出上、退いてもらう！『スターダスト・ミラージュ』！！」

「そうはいかない！！『セレスティアル・ブラック・バーニング』！！！」

二体のモンスターがぶつかり合った刹那、俺はサイドデッキからあるカードを取り出し、『シューティング・スター・ドラゴン』を強制リリース。そして、ブレラのカードも同じようにディスクから外れたのを見計らって、そのカードをディスクに展開する。

「締めはコイツだ！目ぇかっぽじってよ～く見な！！」

俺の召喚したモンスターがその光の中から出てくると、皆感嘆の声を上げ、歌にも聞き惚れる。そのモンスターは二対四枚の翼に、水晶の様な身体。更にそのモンスターはシンクロ素材が通常よりも難しい素材ばかり。こんな時じゃないとお目にかかれない。

「……」

当のブレラもその姿には流石に驚くと共に、その輝きに眼を奪われているようだ。てか、シンクロモンスターの中ではドラゴンなのに綺麗だよな……流石に『エンシェント・フェアリー』は負けるけど……

そしてシェリルの頭上に降り立ったと同時に一曲目が終了し、怒涛の様な歓声が会場内を包み込んだ。

第１５話　再会と饗宴、アタシの歌を聴けぇ！！（後書き）

ラストにあのシンクロモンスターが登場しました。想像力の豊かな方はもうご承知かと思われますが、まあお気になさらず。

感想、及びご指摘がありましたらお願いします。

第16話　来たりし者（前書き）

久々の遊戯王。久々の活躍。
恐らく期待していた方もいらっしゃることでしょう。
ですが申し訳ございません。デュエルはありません。

今回のキーカードは……『未来破壊』。

ス「手札と同じ枚数のカードを、デッキから墓地に送る通常魔法だな」

カ「この一枚でデッキ破壊の概念が変わったぞ」

第16話　来たりし者

一曲目終了後。

ソデに戻ってきた俺は一杯一杯。自分でも何が何やら……楽しかったから良いけどな。てか、

「ブレラ…お前が何でそのカードを持ってる？」

「ああ…このカードか？」

彼の手にあるのは『黒の魔法神官』。たしかレベル6以上の魔法使い族二体をリリースしなければ特殊召喚できないカードであり、レアリティが『デーモンの召喚』よりも遥かに高い。これを売れば家どころか別荘まで持てるほどの億万長者だろうに。

「気付いたら俺の手元にあったんだ。何故なのかは知らないし、俺自身のものであるかも判らない」

そういえば、コイツの記憶ってある時期からなくなってるんだっけ。ランカと再会してからは徐々に戻ってるらしいけど、そこまではまだのようだ。

「じゃあ、今のお前のエースカードなんだな？」

「エースかどうかは解らないが、俺はコイツに導かれているような気がするんだ。これを持ち始めてから、ランカと再会できたのかもしれないからな」

……それほど大事なカードなんだな。俺にもある。

『フルール・ド・シュヴァリエ』

義父さんのデッキにも入れているカード。これは俺の……本当の母さんから貰った大事なカード。これを持ち続けたお陰で義父さんにも会えたし、師匠（ジャック）や皆にも出逢えた……そう考えずにはいられない。

「お互い、そういうカードには恵まれてるんだな……」

「まさか、お前らしくない言葉をここで聞くとは思っていなかった」

「……貶してんのか、テメエ」

喧嘩腰になりかけたところにミーアが息を切らしてやってきた。というか、いつも以上に急いでやって来たようだ。神出鬼没なお前は何処行った？

「た、大変……です…」

「取り敢えず落ち着け。何があった？」

深呼吸でもさせようとしたが、それを拒むように次の言葉で俺も焦

り始める。

「『奴』が……アポリアが……来ました」

「はぁ～最っ高ね。一発目から良い仕事を…ってアレ？」

同じソデに帰ってきたシェリルの目の前には何故かブレラだけ。ステージに立ちたくなくて逃げたのかと思ったが、そうではないらしい。

「アイツ、何処行ったの？」

「さあ？ただ、『自分の仕事』とやらを片付けに行ったらしい…」

二人して森の中を走り抜ける。木々をすり抜け、木の根を飛び越え、そのまま飛び立てるんじゃないかってぐらいのスピードで。

「何処からだ!?」

「海岸です!でも、一定の場所からは動いていません!」

何だそりゃ?それじゃあ、俺が来るのを知ってるってのか…この先の未来を見てきたって言うのか。それはそれで困りものだな……でも、奴が一つの場所から動かないのは別の理由でもあるんじゃないのか…

すり抜けすり抜け、やっと海岸に到着。ったく、無駄に広いな…島にする理由でもあるのか?

「やっとこさ……か……どの、あたりからだ?」

「待って下さい……あっちです」

平然として両耳を澄ませると、崖下の洞窟あたりを指差す。あっちってたしか立ち入り禁止区域のはず…それに何で人気のない場所なんかに？

「……よし、行くぞ」

「…はい」

呼吸を整えた俺はミーアの後について洞窟を目指す。そこにはやはり立ち入り禁止の看板が。何だ？近付くほどに妙な音が聞こえる…何かが切れているような音。

恐る恐るではあるがその洞窟を覗き込むと……白い巨躯に銀髪。そして額には緑色のプログラムメモリ。間違いない！でも……なんでこんなにボロボロなんだ？

「ミーア、部屋のベッドの下から工具を持って来てくれ」

「な、何をする気ですか！？」

「コイツを……

直す」

SIDE　OF　アポリア

ここは何処だ?暗闇で何も見えない……暗い、暗い世界に落ちてしまったのか。ようやく『希望』を思い出した私にはこのような暗闇からは出ることは許されない、ということか。それでもいい…暗闇でも、希望をつかめるのだからな。

「ようやく起きたか」

その声に私は頭だけを動かし、少年を睨む。焚き火でもして暖を取っているような……

「ここは一体……」

「残念ながら地獄じゃねえよ。何でココにいる?」

「わ、私は…」

身体が思うように動かない…そうか、私は……あの少年が見せた希望に負け、遊星ギアから落ちたところまでは憶えている…だが、その先は。

「何処から来たか、なんて質問はしないぞ?聞くのは一つ。何でココに来た?」

「来た、だと?その前に聞かせろ、ココは何処だ?」

「ココはデュエルアカデミアのある島だ。言っておくが、陸はも

う見えない。夜だからな」

「島……だと？」

明るさに目が慣れてきたところで、身体の不自由さの原因がようやく解った。簡易的にではあるが修理されている。しかもメインプログラムには触れていない。

「何故だ……何故私を助けたのだ？」

「身体が機械でも解るだろ？そこまでボロボロな奴なんか放っておけるかよ」

それだけの理由で直したというのか！？全く、御人好しにも程がある。だが、これで……

「待てよ、動くにはまだ早い。それに一度頭を整理しろ」

「悪いがそんな時間は無い。私にはやらなければいけない事が出来たのだ」

「Ｚ－ＯＮＥを止める、か？」

っ！！？何故Ｚ－ＯＮＥの事を知っている！？この少年は一体……

「それこそ止めておけ。お前じゃあ勝てない」

この少年…全てを知っているような口振りだが、そんな事は関係ない。今は一刻も早く行かなければいけないのだ。いくら止めようと、それだけは譲れない。

「止めてくれるな、少年。理由を知っているのならばそのような義理はないはずだ」

「ああ、止める義理はない。けどな、身体に鞭打ってまで行くには早過ぎるって言ってるんだよ。自殺願望にも程があるぜ」

よく解らん少年だな。一方的に身体を直したのかと思えば、止める理由を勝手につけて縛ろうと言うんだからな。

「ならばデュエルだ。私が勝てばそのまま行かせてもらう。もし負ければお前の言う事を聞こう」

「結局そうなるのかよ……手加減しねえぞ？」

ＳＩＤＥ　ＯＵＴ

全く……こういう奴を止める為にデュエルはあるんじゃないんだよ。っていうか、コイツのデッキって聞いただけで何も対策してないんだけど？

「いいか、少年。手加減しないにはこちらも同じだ。だが、そうするだけの理由が私にはあるのだ。それだけは理解して欲しい」

「充分理解してるつもりだ。かといってそんな状態の奴を行かせるほど腐っちゃいねえつもりだ」

いい加減にしないとバラバラに分解するぞ、この野郎。

「私からも一つ、聞かせて欲しい。お前は……何者だ？」

「その質問には…コレで答えさせてもらう」

俺はサイドデッキから一枚のカードを奴に投げ渡す。そのカードは……『Ｚ－ＯＮＥ』。

「っ！！！何故少年がこのカードを！？これはＺ－ＯＮＥが奴に渡したはずの…」

「後で教えてやる。時間が無いんだろ？」

ディスクを構えると同時にシャッフルが開始。向こうも同じようにオートシャッフルの後、ディスクを構える。

「そうだ……私には時間が無い。Ｚ－ＯＮＥを止める為に、彼に希望を思い出させる為にも…負ける訳にはいかないのだ！！！」

「「決闘（デュエル）！！！！！」」

第１６話　来たりし者（後書き）

早くもアポリア登場！！

時間軸上ではジャック・龍亜・龍可とのデュエル後になります。

カイトの持っているカードで解った方もいらっしゃるのではないでしょうか？

彼の母親は……

感想、及びご指摘がありましたらお願いします。

第17話　決闘の序曲（前編）（前書き）

今回は少々短めに作りました。

進行内容は、随時更新していきます。

キーカードは、後編までのお楽しみ、です。

カ「ったく、お前はいつになったら真面目に…っていねぇ！！？
あんにゃろう、雲隠れしやがったな！？」

第17話　決闘の序曲（前編）

「「決闘（デュエル）！！」」

アポリア　ＬＰ＝４０００

カイト　ＬＰ＝４０００

さぁて、このデッキで吉と出るか凶と出るか……しかも未調整。これじゃあボコボコにしてくれって言ってるのと一緒だな。でもそれは向こうも同じ。

「先攻は私だ。私のターン！」

ドローしてから一時考察。お互いにどんなデッキかは判断できない。一手目で勝敗が決まるのと一緒だ。無闇に伏せカードを増やせない。

「私は手札から『機皇兵ワイゼル・アイン』を攻撃表示で召喚」

機皇兵ワイゼル・アイン　ＡＴＫ＝１８００　ＤＥＦ＝０

出てきたのは白い機械兵。さしずめ簡易型の機皇帝ってところか…しかもいきなりアタッカーの登場か。これは生半可な事じゃクリ

アできないな。

「カードを一枚伏せ、ターンエンド」

さてさて、こっちはどうするか……手札は悪くない。でもあっちは伏せカードが一枚。二枚伏せる事で揺さぶりをかけられるが、生憎とそんな手は通用しない。

「俺のターン！」

引いたのは、『クイック・シンクロン』。これだと……しかないか。

「カードを一枚伏せ、手札のモンスターカードを墓地に送り『クイック・シンクロン』を特殊召喚！」

カウボーイ風の機械人形が出てくると俺はその手を休めず、次に映る。

「更に手札から『ボルト・ヘッジホッグ』を通常召喚！」

その隣に出てきたハリネズミで準備完了。ここまで来たら後はいつも通りに先制する！

「レベル2の『ボルト・ヘッジホッグ』に、レベル5『クイック・シンクロン』をチューニング！」

「チューニングだと！！？まさか、貴様……」

「ご明察。『集いし思いが、ここに新たな力となる。光さす道と

なれ』！！」

『クイック・シンクロン』が回転する的を打ち抜く。それは『ニトロ・シンクロン』。『クイック・シンクロン』は自身をシンクロ素材とする時、『シンクロン』と名の付いたモンスターをシンクロ素材とするモンスターしかシンクロ召喚できない。つまり、何通りもある『シンクロン』のシンクロ素材をこのカード一枚で代用できる。

五つの輪を『ボルト・ヘッジホッグ』がくぐり抜け、星となった時、緑色の悪魔の様な戦士が轟く。

「シンクロ召喚！！！燃え上がれ、『ニトロ・ウォリアー』！！」

ニトロ・ウォリアー　ＡＴＫ＝２８００　ＤＥＦ＝１８００

「シンクロ召喚……貴様も未来の人間か」

「言っておくが、お前の様に全てを知っているわけじゃない。バトル！！『ニトロ・ウォリアー』で『機皇兵ワイゼル・アイン』を攻撃！！「罠（トラップ）発動！！『機限爆弾』」何！！？」

「自分の場の『機皇』と名の付くモンスターと、相手の場のカードを１体選択し、破壊する！！選択するのは『ニトロ・ウォリアー』！」

無限の記号が回転している爆弾が『ワイゼル・アイン』と『ニトロ・ウォリアー』を無理矢理繋ぎ、そしてそれと同時に記号が回転を早め、爆発する。

「ちっ！！！」

「更に、自分フィールド上のモンスターがカードの効果で破壊された事により、手札から『機皇帝スキエル∞』を特殊召喚！！」

その爆発を遮るように、今度は青い羽を羽ばたかせた機械の鳥が現れる。その中心には無限の記号。

機皇帝スキエル∞　ＡＴＫ＝２２００　ＤＥＦ＝２２００

「早速お出ましか……ならカードを一枚伏せ、ターンエンド！」

「シンクロモンスターと言えども、シンクロキラーとも呼ばれるこのモンスターでは太刀打ちできまい！？」

確かに、コイツは相手のシンクロモンスターを吸収して攻撃力を上げるモンスター効果がある。かといって、それだけで無闇に召喚しても、闇雲に吸収されるだけ……ん？待てよ…コイツの効果は確か…

「どうした？その程度で終わりか…私のターン！！」

アポリア…お前の過信と新たな目標。それを見定めるまでは終われない！！

「罠（トラップ）発動！！『威嚇する咆哮』！このターン、相手は攻撃宣言を行う事が出来ない！！」

「ちっ！小癪な真似を……ならば手札からフィールド魔法『機皇城』を発動。自分フィールド上に存在する『機皇帝』と名の付くモンスターは、相手のシンクロモンスターの効果対象にはならない」

くそ、厄介なカードを。一歩先に出てもまた追いつかれる。というより、それを読み合うのがデュエルの醍醐味、なんだろうな。

「少年、何を笑っている？」

「おっと、失礼」

無意識に笑っていたようだ。一応自覚してはいるが、どうしても・な。

「更にカードを一枚伏せて、ターンエンド。私は歩みを止められない……彼に、ＺＥＲＯＮＥに希望を…最後の人間足り得るほどの希望を取り戻させる為にも、私は負けられない！！！」

それほどまでの……普通ならそんな重すぎるほどの重圧は耐えられない。だからこそ、それを、『最後の』と言わせるほどの事が…こいつの中での特別なんだな。

「俺にも負けられない理由がある！！お前が『希望』を見つけたのなら、俺は……俺自身の『絆』を紡ぐ！！それを、おいそれと止める訳にはいかない！！」

「言うな、少年。だが、この『機皇帝』を崩せるものなら、崩してみせろ！！お前の言う『絆』の力とやらでな！！」

「ああ、やってやる！俺のターン！！！」

ライフは未だに変化無し。とはいえ、あっちにアドバンテージがある。加えてあの『機皇城』……破壊する手段と言えば…アレしかない、か。

「手札から魔法（マジック）カード、『おろかな埋葬』を発動し、デッキから『ダンディライオン』を墓地に送る。そして、『ダンディライオン』の効果を発動。墓地に送られた事により、自分フィールド上に『綿毛トークン』２体を守備表示で特殊召喚」

綿毛トークン　ＡＴＫ＝０　ＤＥＦ＝０　×２

「更に手札から『ブライ・シンクロン』を通常召喚」

ブライ・シンクロン　ＡＴＫ＝１５００　ＤＥＦ＝１１００

「そして魔法（マジック）カード、『死者蘇生』を発動。墓地に眠る『チューニング・サポーター』を特殊召喚」

「何時…そうか、最初の『クイック・シンクロン』か…」

「正解。レベル１の『綿毛トークン』２体と、『チューニング・サポーター』に、レベル４『ブライ・シンクロン』をチューニング！！！」

それぞれのレベルの数の星が、四つの輪をくぐり、妖精の龍と成す。

「『聖なる守護の光、今交わりて永久の命となる』！！」

「ぐうっ！！！この光は、まさか…」

「シンクロ召喚！！降誕せよ、『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』！！」

エンシェント・フェアリー・ドラゴン　ＡＴＫ＝２１００　ＤＥＦ＝３０００

龍可さん……申し訳ないです。貴女のデッキを崩してしまいました。皆の力を借りるにはこれしか……でも、後悔は無い。俺は、俺自身の力で、突き進む！！

「何故だ！！？何故少年がシグナーの竜を持っている！？答えろ！！！」

「じゃあ、お言葉に甘えて…名乗るとしますか」

「俺はカイト……『不動　カイト』だ」

「何……不動、だと!?」

「そう、『不動　遊星』の義理の息子…そして、

『シェリー・ルブラン』の、息子だ！！！」

第17話　決闘の序曲（前編）（後書き）

さてさて、いよいよデュエル開始です。

考えに考えた結果、短めでも分けて製作しよう・と。

それにしても短すぎたかな?

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第１８話　決闘の序曲（中編）（前書き）

中編でございます。これもちょっと短いですが、ご覧になって下さい。

キーカードは、本当に後編まで待って下さい。

第１８話　決闘の序曲（中編）

カイト　ＬＰ＝４０００
場　エンシェント・フェアリー・ドラゴン　ＡＴＫ＝２１００　ＤＥＦ＝３０００　↓　ＡＴＫ＝２７００　ＤＥＦ＝３０００
伏せ　無し
手札　０枚

アポリア　ＬＰ＝４０００
場　機皇帝スキエル∞　ＡＴＫ＝２２００　ＤＥＦ＝２２００
伏せ　１枚
手札　２枚

現状としてはむこうがボードアドバンテージ的に有利。『エンシェント・フェアリー』だけだと少々心許ないが、このターンだけはコッチが有利か……

「シェリーだと!!?何故だ……何故お前が」

「それには答えられない。いや、答えることが出来ない」

「それは些細な事・か……ならば何故『不動　遊星』の息子なのだ?」

それは色々あってね……思い出すだけで鬱になりそう。自分の事なのに。

「それは自分で考えな。『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』の効果発動。１ターンに１度、フィールド魔法を破壊する。頼む、『エンシェント・フェアリー・ドラゴン』！！『ブレイン・バック』！！」

妖竜の雄叫びと共に、フィールド全体が反響し、場のカード以外を崩壊させていく。そして俺のライフが回復。

カイト　ＬＰ＝４０００　→　ＬＰ＝５０００

「ただし、俺のデッキにフィールド魔法は無い」

「フィールド魔法『機皇城』の効果発動！！このカードが破壊された時、デッキから『機皇帝』と名の付くモンスター１体を手札に加える。私は『機皇帝ワイゼル∞』を手札に加える」

「このままターンエンド」

ライフ・アドバンテージすらも得ているが、それ以外は全くの不利。それでなくても『シンクロキラー』の如き効果を持っている『機皇帝』……こればっかりはマズいな。

「私のターン！！私は手札から魔法（マジック）カード、『サンダー・クラッシュ』を発動。自分フィールド上のモンスターを全て破壊し、モンスター１体につき３００ポイントのダメージを与える」

天からの雷によりスキエルが砕け散ると、その衝撃波が俺に伝わってくる。

カイト　ＬＰ＝５０００　↓　ＬＰ＝４７００

「更に自分フィールド上のモンスターがカードの効果によって破壊された時、手札から『機皇帝ワイゼル∞』を特殊召喚！！」

出てきたのは先程の『ワイゼル・アイン』を大型化したようなモンスター。うわぁ、二体目が来ちゃったよ……

機皇帝ワイゼル∞　ＡＴＫ＝２５００　ＤＥＦ＝２５００

スキエルを戦闘破壊しなかったのが一番のプレイングミス。けど、一番の救いは上昇した攻撃力のままで吸収されない事だ。これならギリギリ１００残る。

「更に魔法（マジック）カード、『リミッター解除』を発動！」

おい待て、アポリア。そんなカード持ってるのか？って、『機皇』モンスターって全部機械族だったよな……入ってない方がおかしいか。

「これにより『機皇帝ワイゼル∞』の攻撃力は倍の５０００にアップ。更に『ワイゼル』の効果を発動！！相手のシンクロモンスター１体を装備カード扱いとして装備できる。そして、そのモンスターの攻撃力分だけ攻撃力はアップする！」

機皇帝ワイゼル∞　ＡＴＫ＝２５００　ＤＥＦ＝２５００　↓　ＡＴＫ＝５０００　ＤＥＦ＝２５００　↓ＡＴＫ＝７１００　ＤＥ

F＝２５００

最早無理です。伏せカードも手札もありません。厳密に言えば、『全部』ありません。

「これで終わりだ。『機皇帝ワイゼル∞』で直接攻撃（ダイレクト・アタック）！！！」

「くっ、あああああああぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！」

カイト　ＬＰ＝４７００　→　ＬＰ＝０

「くっそぉ！！！負けた！！」

デュエルの後、思いっ切り大の字に寝転ぶと、アポリアはディスク

をしまい始める。ってか、こんな奴と戦って勝ったのかよ、義父さんは……まだまだだな、俺も。

「……少年、いや『不動　カイト』」

「あん？」

「さっきの表情が気になったのだが……何故あの状況で笑っていられる？ただの普通のデュエルならまだしも、お前は自らの使命を果たす為に闘ったのではないのか？」

それは解ってる。けど、それより何より一番に考えていた事を口にする。

「んな事関係無ぇよ。ただ純粋に…デュエルしたかったのさ」

「何？」

「確かにお前は、希望を見つけた。でもそれはお前自身が見つけたものだ。アイツのじゃない」

希望と言う名の絶望、っていうのを何処かで聞いたことがある。それは自身に与えられたモノであればそうなる。けど、自分で見つけた希望であれば、どんな事でも乗り越えられる。

これも何かの台詞だったな……何かこういうのは性に合わない。

「泣いたり笑ったり、怒ったりする事。そして過去を見つめ直し、未来を見据える。そんな人間らしさがお前の希望に繋がるんじゃないのか？『アポリア』」

「人間、らしさ……」

彼の鸚鵡返しに黙って頷く。俺自身もそれに救われた。義父さんに教えられ、そして機械である彼にそれを教える。これも『絆』の一つ・か……うん、悪くない。それにはアポリアも笑顔になりかけるが、すぐに表情を戻す。彼なりの結論があるのだ。黙って見過ごすのも礼儀だな。

「たしかにそうだな。だが、それをＺ－ＯＮＥに聞かせるのは私の自由だ。これで失礼する」

「あ、ちょっと待った」

立ち去ろうとするアポリアを、俺は二枚のカードを渡す事で止める。そのカードは『未来破壊』と…『アフター・グロー』。

「このカードは……」

「それがお前の言う『希望』へと繋げてくれるはずだ。持っていけ」

正直、このデッキじゃ使えない。墓地肥やしを主とするこいつ等じゃ使おうにも使えないから。そのカードを黙って受け取るとデッキにしまう。

「……」

「っ！！」

立ち去り際、小さい声だか彼なりの言葉を聞いた。それは紛れもなく、数分前には聞けなかったであろう言葉だ。

「アポリア！！！」

「…？」

「また…デュエルしようぜ！！？俺は待ってる！！」

光と共に消え行く彼の表情は、笑っていた。これは承諾って事で良いんだよな？俺を除いて、誰もいなくなった海岸で空を見上げる。使命云々よりも、アイツとデュエルできて楽しかった。次は簡単には終わらせないぜ。

「にしても、『ありがとう』ってか……お前には似合わない言葉だな」

第１８話　決闘の序曲（中編）（後書き）

速攻でデュエルが終わりました。

カイト君、気張りすぎです。

感想、及びご指摘ありましたらお願いします。

第１９話　決闘の序曲（後編）　【軌跡の残照】（前書き）

これにて三部完結でございます。

一応サプライズもあり、って事で。

さてさて、キーカードは『ダブル・サイクロン』

カ「やっとか……効果は、互いのフィールドの魔法・罠ゾーンにあるカードを一枚ずつ選択して破壊するんだったか」

ス「通常の『サイクロン』のようにエンドフェイズ時には使えないけど、『リミット・リバース』や『リビングデッドの呼び声』のように効果適用外で残ったカードを処理できるし、相手の永続魔法・永続罠も同時に破壊できるメリット付き」

カ「使いどころの難しさはあるけど、自分側の邪魔なカードを破壊できるのは利点だな。それに制限掛かってないし」

第１９話　決闘の序曲（後編）　【軌跡の残照】

海岸・アポリアとのデュエル後、

一人立ちつくす俺はいなくなったアポリアを、空を見上げる事で見送った。たった数分しか話していないけど、それでもやりきったかのような達成感はある。しかし、腑に落ちないのは確かだ。これで本当に危機を回避したのだろうか……という『呪い』のような、言いようのない違和感。

（今は良い……これで一応のケジメはついた。それでいい…）

立ち去ろうとした俺の目の前にあるモノが落ちている。そこはアポリアが先程までいた場所だ。黒いアタッシュケースほどの大きさの箱と、一つのデッキ。それらを見つけると何故か手にとって確認してしまう。

「奴の忘れ物か？意外に抜けてるな……っ！！？」

黒い箱を手に取った瞬間、それは光を放ち、変形していく。黒い板はモンスターカードゾーンに、そしてその中に入っていた円形の物はソリッド・ヴィジョンシステム。その中のドライヴが回転を始めると同時に、墓地のゾーンの上にデッキスペースがせり上がる。取っ手に当たる部分が手札のホルダーになり、デッキスペースの上に移動して変形を止める。宙に浮く形で展開されたそれはすでに既存のデュエルディスクを逸脱していた。

「コイツは……デッキはもしかして」

落ちていたデッキを確認すると、そのイラスト名は…『機皇神マシニクル∞』。中も全て確認すると、『機皇帝』シリーズと『機皇兵』、そして『機皇神龍アステリスク』まで入っている。

「何故……これは自分のデッキなんじゃないのか？」

このシリーズは間違いなくアポリアのメインデッキのはず…なのに、それを手放してまでＺ－ＯＮＥに挑もうとしているのか。あるいは、これらを手放す事こそが奴の決意の証なのか。

（それを知っているのは…アポリアだけ・か……）

「使わせてもらうぜ。ディスクも一緒にな！」

そのデッキを掲げると、空に向かって誓う。決して迷わないように…託された者の礼儀であるように。

収納したディスクとデッキを持って、ライブ会場へ向かう。その足取りは軽快とも重いとも言えないほどだが、気持ちは落ちてはいない。でも……

（流石にお姫様の機嫌を戻さない事には、一段落とは言えないな……さあ、どうするか）

何も言わずに来てしまった手前、平謝りだけで済むのならめっけモンだ。奇跡としかいえないだろうけど、引っ叩かれても文句は言えないか。何時の間にかミーアはいないし……。

ライブ会場が見えてきたと同時に、ライトアップが音を立てて消える。既にライブは終了…か。もうちょっと見たかったんだけどな…始まってから一時間。終わってもおかしくない時間だな。

ソデまで戻ると、そこにはランカ、ブレラとシェリルにグレイスさん、そしてミーアが立っていた。

「ミーア、何時の間に……」

「貴方の事です。何も言わずに行ってしまったのを考慮して言い訳でも考えていたんでしょう」

はい。仰る通りです。

「心配しないで下さい、下手な事は言ってませんよ。手が放せない仕事が急に入ったことしか言っていませんから」

（ただし、仕事内容に関しては話していませんので……）

「では、私はこれで。グレイスさん、有難うございました」

丁寧にお辞儀をしたミーアに対して、グレイスさんは手をヒラヒラとさせるだけで返事を返す。アイツのフォローに関しては正直お手上げだな。流石は俺のパートナーだ。それにしても…

「珍しいな、シェリル。お前が不機嫌じゃないなんて」

「あら？人の仕事を邪魔する程、鬼じゃないわ。急ぎならしょうがないでしょうし」

意外と素直でビックリ。ま、仕事に関してはコイツも思う所があるんだろ。しかし、ここまで寛容だと後が怖いな……

「それなら良かった。流石に学園辞めてボディガードになれ、って言ったんなら抵抗したけどな。そうしなくても進路はそうするつもりだし」

「「「え！？」」」

「本気か？不動…」

「本気も何も、そういう約束だったろ？特にそっちの二人はすっかり忘れてるじゃねえか？」

シェリルとグレイスさんを指差すと、二人から乾いた笑いが聞こえてくる。完全に忘れてやがるな……。

「カイト君がボディガード……すっごく似合ってるよ！！」

何を想像したのか、嬉しそうなランカ。取り敢えず妄想的なことだろうけど、ヤメテクダサイ。本当に。

「アリガトな、ランカ。お前とは同じ立場になりそうだ」

「ふざけるな、それに俺はマネージャーだ。一緒にするな」

「仕事の内容は半分一緒だろ？よろしくな、先輩」

「止めろ、気色悪い」

ポーカーフェイスで嫌悪感を出しても解らないって。

「取り敢えず、皆は明日まで滞在だろ？ちゃんとゆっくり休めよ？」

「「「「了解」」」」

所変わって、ブルー寮・自室前。

なにやら女子が二人、部屋の前で話し合っている。言い合いにも聞こえるけど、見過ごすのは出来ない。自分の部屋の前で何してんだか。

「そこの！何してんだ？」

「あ、やっと来た」

「……」

こちらを見た瞬間、一人には見覚えがあった。というより、数日前に相手したばっかりじゃん。

藤原雪乃。

そしてもう一人は赤に近いオレンジの髪の女の子。大人びた表情なんだけど……ちょっと無表情に近いな。興味なさそうな顔してる。

「メール返してくれても良かったんじゃない？あれから二日ぐらい経ってるんだけど」

「悪いな……返事返せるほどの余裕がなかったんだよ」

「そう。で？女を二人も立ちっ放しにして、部屋にも通してくれないの？」

今何時だと思ってやがる。思いっ切り消灯時間近いのに、しかも女

の子二人で男子寮に入ってくるとは……失礼猛々しい。
とは言えず、溜息交じりの二つ返事で部屋に通す事を決める。

「解ったよ。ただし、珈琲しか出せないがそれでも？」

「良いわ。貴女も良いでしょ？」

「構わない」

どうやら無口ではなさそうで安心した。手には何も持っていないのでデュエルするワケではないか。

部屋に通すと、二人はやはりミーアの存在に驚いたようで、仕事上の付き合いであることは伝える。それには納得がいかない藤原だったが珈琲を三つ取りに行く頃にはそれは落ち着いた。
ちっ、高いんだぞ？『ブルーアイズ・マウンテン』……一杯３００円という破格さから、パックタイプは無いだろうと思ったがありやがった。しかも五杯分入って１２０００円。コッチ来る前の痛い出費だが、来客時に出すだけなら充分だ。でも流石に二人いっぺんに来ると半分に減るな。

「で、何の用だ？まさか……何か企んでるのか？」

「企んでる、なんて人聞きの悪い。ただ、何時になったら約束を守ってくれるのかな、って思っただけよ」

「ああ、そうかい。それとアンタの隣のとどんな関係が？」

たった数秒で蚊帳の外の彼女を指差すと、口をつけていたカップを静かに置いた。

「私はただ、お前の戦略に興味を持っただけだ。それ以外は無い」

まあ、淡白なお言葉。

「私の一つ上の先輩なんだけど、っていっても貴方とは同い年ね、かなりぶっ飛んだ戦略に負けましたって言ったら、会ってみたいって」

そういうことか……まあ、シンクロ召喚絡めた戦略はコチラでは常軌を逸してるようだしな。誰も彼も驚きばっかりでこっちの心臓が保たないったらない。

「試しにデュエルしたいのだが、お前の都合を聞いてからでないとな。この時間に来たことに関しては申し訳ないが」

「デュエルでも、人間関係でも、礼儀は必要だしな。弁えていれば気にしない」

「そうか。それは助かる」

自分の礼儀とデュエルは、その人の人間性がそのまま出るからな。ガチデッキだって同じ。たった一体のモンスターを召喚するのに特化したデッキと戦っても面白くも無い。それを召喚して一撃で終わるならそれは自己満足でしかない。

エースモンスター＋それ専用のサポートカード＝デッキじゃなければ、コンセプト＋エースモンスター＝デッキでもない。

実のところ、多種多様な戦略＋使用モンスター＝デッキじゃないのか？その為にサイドデッキがあり、何千種類のカードがあるんだ。

「驚いた……そんな考えを持った奴が、オベリスクブルーにいるとは」

「自己満足の大馬鹿野郎だと思ってたか？」

「いや、頭の螺子が一つ外れたような人間か・と……失礼だったかな」

それは失礼だな。流石に機械に関しては俺でもそうじゃないかと思ったさ。

「それで……受けてくれないだろうか？」

どうしようかな……俺自身もデッキ構築してみたいし、試したい事が幾つかあるし…一応受けても損はしないか。

「解った。時間の指定とかあるか？」

「いや、そこはそちらに任せよう」

「じゃあ、明日の放課後ってのはどうだ？それまでにはやっておきたいことあるし、時間掛かりそうだからな」

「場所はここの前で良いんじゃない？終わればすぐ夕食になるだろうしね」

成程、考察も出来るし一石二鳥だな。

「決まりだな。まずは握手からだ。デュエルの前に互いに名乗るのも礼儀の一つ、って事で」

「そうだな」

互いに堅く握手を交わす。これが俺の『運命』という名のデュエルになろうとはこの時、欠片ほども考えていなかった。

「俺はカイト。不動カイト」

「私はマリーダ。マリーダ・クルスだ。よろしく」

第１９話　決闘の序曲（後編）　【軌跡の残照】（後書き）

これで三部完結。そして、運命の序章へ。

感想及び、ご指摘ありましたらお願いします。

第２０話　運命（前書き）

今回のデュエルですが…はっきりいってお約束と言われてもおかしくない内容です。

今回の対戦デッキは、『デュアル』です！！

回し方は過去に使っていたストラクチャーデッキ『ウォリアーズ・ストライク』を参考にしています。

使っていてこんな言い方はアレですが、正直恐ろしいです。使い方を一歩間違えるとボード・アドバンテージがこっちに……そのまんまでも１００％力を発揮します。

今は少ないですが、買って損は無い筈です。オススメのストラクチャーデッキですよ。

第２０話　運命

翌日・ブルー寮前、デュエルフィールド

「さて、準備は？」

「出来ている。それで、ディスクはどうした？」

既にセットされているディスクを構え、臨戦態勢のマリーダだが、見た目は出掛ける装いの俺に疑問を投げかけてくる。

「あるぜ。今持ってる」

「それがか？」

「まあ、見てな」

水平にケースを腰の辺りに持ってくると、デッキスペース、カードゾーン、墓地の順に展開するとシステムが起動。宙に浮いた状態で静止する。デッキをセットしてオートシャッフル。これで準備完了。

「凄いな……そんなデュエルディスクは見た事がない」

「そいつはどうも。ま、これは昨日貰ったばかりだけどな」

「それとデュエルは関係無いか…では始めよう」

「ああ」

「「決闘（デュエル）！！！」」

カイト　ＬＰ＝４０００

マリーダ　ＬＰ＝４０００

「さて、どんなデュエルになるのやら……」

「先攻は俺か…俺のターン！」

こっちでデュエルを始めてから初めて先攻で来たな。手札はちと厳しいけど、１ターン目にする事は限られている。

「モンスターをセット、カードを一枚伏せてターンエンド」

「様子見か……ならば先制しよう。私のターン！！」

お手並み拝見だな。コッチの情報は与えられている。加えて戦略も。だとしたら情報戦ではこちらが不利か……。

「私は『デュアル・ソルジャー』を攻撃表示で召喚！更にカードを三枚伏せてターンエンド」

デュアル・ソルジャー　ＡＴＫ＝５００　ＤＥＦ＝３００

向こうは『デュアル』か……だとしたら伏せは『フォース・リリース』あたりか。そうくると、先制されたも同じだな…。

「俺のターン！」

その瞬間、マリーダの口元は僅かに動く。

「罠（トラップ）発動！！『強烈なはたき落とし』。ドローしたカードを手札に加えず、墓地に送る」

「残念だったな。今ドローしたのは……『ダンディライオン』だ」

「しまった！！」

「墓地に送られた『ダンディライオン』の効果発動！！このカードが墓地に送られた時、『綿毛トークン』を二体特殊召喚できる。ただし、特殊召喚されたこのターン、このトークンをアドバンス召喚の為のリリースとして使用できない！」

綿毛トークン　ＡＴＫ＝０　ＤＥＦ＝０　×２

早計だったな。序盤でキーカードが引けたらソイツは十代並みのドロー運だ。そこまで引きは良くないし、人並みの感性しかないので。でも何だ？デュエルが始まってからずっと違和感を感じる……場の空気ではなくて、俺達の間にある何かしらの…まあ、違和感っていうのは既視感と同じだと思うけどな。

「集中集中。セットモンスター、『ボルト・ヘッジホッグ』を反転召喚。そして手札から『エフェクト・ヴェーラー』を通常召喚。そして、レベル１の『綿毛トークン』とレベル２の『ボルト・ヘッジホッグ』に、レベル１『エフェクト・ヴェーラー』をチューニング！！」

「それが……」

「ああ、お前が見たがっていたシンクロ召喚だ。今から召喚するモンスターのレベルは４。来い！！『アームズ・エイド』！！」

アームズ・エイド　ＡＴＫ＝１８００　ＤＥＦ＝１２００

「成程。レベルによって召喚出来るモンスターが変わる、ということか」

単純な考えであればそうだな。バーンでは出来る限りそれを抑制できるカードで牽制、ビートでは攻撃力の変化をつける。そんなに便利なモンスターはいないけど、助け合って戦うのがこのデッキのテーマだな。

「当然、バトルはするんだろう？」

「ＹＥＳ！『アームズ・エイド』で『デュアル・ソルジャー』を攻撃！『パワーギア・アタック』！！」

腕だけのモンスターが拳で緑色の戦士を攻撃しようとした瞬間、『デュアル・ソルジャー』を光が包む。

「何！？」

「罠（トラップ）発動！！『和睦の使者』を発動！戦闘ダメージを０にしてモンスターを戦闘破壊から護る！！それにチェーンして速攻魔法、『フォース・リリース』を発動。フィールド上に存在するデュアルモンスターを再度召喚状態にする」

『デュアル・ソルジャー』の色素が薄くなり、力を解放し始める。そして、クナイで描いた円から他のモンスターが姿を見せる。

「『デュアル・ソルジャー』の効果発動！！このカードが戦闘を行う場合、そのダメージ計算後に自分のデッキから、『デュアル・ソルジャー』以外のレベル４以下のデュアルモンスターを特殊召喚する事ができる！！私は『エヴォルテクター・シュバリエ』を特殊

召喚！」

エヴォルテクター・シュバリエ　ＡＴＫ＝１９００　ＤＥＦ＝９００

炎を纏った、赤い騎士が舞い降りる。戦闘で破壊できず、更に相手に特殊召喚を許すとは…デュアルモンスターをちょっとナメてた。

「恐ろしいな……そのコンボははっきり言って凶悪だ」

「それは褒め言葉として受け取っておくよ。他に何かあるかな？」

「無い。ターンエンドだ」

「そして『フォース・リリース』の効果によって再度召喚状態の『デュアル・ソルジャー』は裏側守備表示になる。私のターン！！」

ヤバイな…これでアイツのフィールド上のモンスターはデュアルモンスターが二枚。流石に救いは二体共『デュアル』状態じゃないことだな。

「今日のデッキ周りは自分でも怖いな……手札から装備魔法、『神剣－フェニックス・ブレード－』を『エヴォルテクター・シュバリエ』に装備。これにより攻撃力は３００ポイントアップする」

エヴォルテクター・シュバリエ　ＡＴＫ＝１９００　ＤＥＦ＝９００　↓ＡＴＫ＝２２００　ＤＥＦ＝９００

上級モンスターに匹敵する程の攻撃力に上がったモンスターほど手に負えないものは無い。理由としては、下級モンスターならではのリクルート手段、攻撃耐性等の補助が豊富な事。これに効果モンスターだったらえげつない事この上ない。

「更に私は『エヴォルテクター・シュバリエ』を再度召喚。これにより効果モンスターに変わる。そして効果を発動！」

おいおい、間髪入れずに発動するのか……

「自分フィールド上に表側表示で存在する装備カードを墓地に送る事で、相手フィールド上のカード１枚を破壊する！破壊対象は『アームズ・エイド』だ、行け！『パラライズ・フレイム』！！」

『フェニックス・ブレード』を投げつけると、『アームズ・エイド』に突き刺さり、爆弾の如く爆発する。

「つっ！！！だが、『エヴォルテクター・シュバリエ』の攻撃力は下がる！」

エヴォルテクター・シュバリエ　ＡＴＫ＝２２００　ＤＥＦ＝９

００　↓　ＡＴＫ＝１９００　ＤＥＦ＝９００

「なに、そんな事は承知の上だ。『デュアル・ソルジャー』を反転召喚して、バトル！！二体で直接攻撃（ダイレクト・アタック）！！「させるか！！罠（トラップ）発動！！『くず鉄のかかし』！！『シュバリエ』の攻撃を無効にする！！」だが、『デュアル・ソルジャー』の攻撃は受けてもらう！！」

カイト　ＬＰ＝４０００　↓　ＬＰ＝３５００

「そして、『くず鉄のかかし』は発動後、再びセットされる」

「ちっ、複数回の攻撃でなければ有効打にはならない・か……ターンエンド」

いかんせん場持ちが良くない……効果破壊だと発動しない効果ばかりだからか。それにしても気になるのがあの伏せカード。おそらく『リビングデッドの呼び声』あたりの蘇生カードだろうな。それに今の俺の手札……有効な手段は今のところ『ジャンク・シンクロン』あたりだがこれでは駄目。これが『奈落の落とし穴』だったら除外されておしまいだな。このデッキの弱点は除外耐性がゼロであることだ。

「俺のターン！」

手札はこれで四枚。温存していると痛い目を見るからな。攻撃あるのみ！

「手札から魔法（マジック）カード、『調律』を発動。デッキから『シンクロン』と名の付くモンスター1体を手札に加えてシャッフルし、デッキの一番上のカードを墓地に送る。俺が加えるのは『ターボ・シンクロン』」

そして墓地に落ちたのは『レベル・スティーラー』。よし、これなら。

「そして手札に加わった『ターボ・シンクロン』を攻撃表示で通常召喚！」

ターボ・シンクロン　ＡＴＫ＝１００　ＤＥＦ＝５００

「な……攻撃力１００だと！！？」

「そしてバトル！『ターボ・シンクロン』で『エヴォルテクター・シュバリエ』を攻撃！！」

「血迷ったか！！それでは大ダメージを受けるぞ！！」

「ここで『ターボ・シンクロン』の効果を発動！！このカードが戦闘を行う時、攻撃対象のモンスターを守備表示にする事ができる！！『クイック・イジェクション』！！」

剣を逆手に防御する『シュバリエ』に対して、拳を放った『ターボ・シンクロン』は簡単にはね返されてしまう。

カイト　ＬＰ＝３５００　→　ＬＰ＝２７００

「い、一体何を……」

「まだだ！更に『ターボ・シンクロン』の効果！このカードの攻撃によって発生した戦闘ダメージ以下の攻撃力のモンスターを手札から特殊召喚できる！手札から『ジャンク・ディフェンダー』を特殊召喚！」

ジャンク・ディフェンダー　ＡＴＫ＝５００　ＤＥＦ＝１８００

何だか気味悪いメンツが揃ったな。ほとんどが頭だけとかＦ１の身体とか、趣味悪いとか言われても反論できない。

「更に墓地にいる『ボルト・ヘッジホッグ』の効果発動。自分フィールド上にチューナーモンスターが存在する時、このカードを墓地から特殊召喚出来る！来い！」

ボルト・ヘッジホッグ　ＡＴＫ＝８００　ＤＥＦ＝８００

「そしてメインフェイズ２！レベル２『ボルト・ヘッジホッグ』とレベル３『ジャンク・ディフェンダー』に、レベル１『ターボ・

シンクロン』をチューニング！！」

「今度はレベル６・か……」

「『集いし絆が、更なる力を紡ぎだす。光さす道となれ』！」

一つの輪の中に、五つの星が列を成す。そして光の道とともに現れたのは、真紅の戦士。

「シンクロ召喚！！轟け、『ターボ・ウォリアー』！！」

ターボ・ウォリアー　ＡＴＫ＝２５００　ＤＥＦ＝１５００

「面白いな、シンクロ召喚は……っ！！」

「どうした！？……っ！！？」

お互いに右腕を押さえて苦悶する。何だ…この熱は！？よく見ると俺の腕には……竜の頭の痣。これは……義父さんの持っていた痣？

「何故この痣が……な！！！？」

マリーダに視線を移すと、彼女にも……

竜の腕の痣が赤々と燈っていた。

第２０話　運命（後書き）

はい、やってしまいました。

展開が中途半端で申し訳ありませんが、一応一区切りでございます。

『ウォリアーズ・ストライク』購入時、そのままでも恐ろしいほどの完成度だったのを憶えています。

ストラクチャーデッキのまんまでデュエルしたら相手が「もう止めて」って顔になってました。あれに『ライジング・エナジー』があったら恐怖の一言です。

感想及び、ご指摘ありましたらお願いします。

第２１話　運命　？（前書き）

運命の第二章でございます。

訳在ってキーカードは当分お休みいたしますのでご容赦下さい。

第２１話　運命　？

「こ、この痣は……何だ!?」

何故マリーダにシグナーの痣が…

「痣が分かれた、だと?どういう事だ!!?」

元々シグナーの痣は一つに集約されて初めて力を発揮するものだ。
それが分かれたということは、彼女にシグナーとしての資質があるということか…

「これを知ってるのか?……っ!!」

「何…っ!!?何だ…」

頭の中に…何か入ってくる……いくつもの光景が頭の中を入っては出て行く。滝のように入ってくるそれらに抵抗も出来ず蹲ってしまう。

「こ……これは!!!!?」

「い、一体……何だ!?」

それは彼女も同じで、耐えられないように頭を抱えている。

（まさか…シグナーとしての記憶…なのか）

これ以上は……マズい！！！

「「あ、あああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」」

絶叫とともに、二人共糸が切れたようにその場に倒れる。その場に居合わせた雪乃は慌てて二人に駆け寄るも、まったく返事をしてくれない。頭の中に駆け巡ったのはお互いの記憶という名の情報。それの奔流は互いに耐えられるものではなく頭が追いつかなかったのだ。

かくして二人のデュエルは、このような形で中断となってしまった。

ここは……何処だ？確かデュエルしてたはずだけど。

天井も床も真っ白いタイルに覆われた部屋。何処まで続くとも知れず、どの辺りに立っているのかも解らない。歩き出そうにもどちらに行ったらいいのか……。その先に点…否、子供が座り込んでいる。膝を抱えたった一人で。

「……キミ」

声をかけると、その子供は顔を上げてこちらを見る。涙の跡が見て取れる悲しい表情。何処かで見た事があるけど……何処だっけ？

「どうしたの？」

「あ、あのね……パパとママがね、私を虐めるの……外にも出してくれなくてね…誰ともお話させて、くれないの……」

鼻を啜りながら途切れ途切れに話してくれると、また泣き出してしまう。こうなった子供にはどうしたらいいんだろう……義父さんだったらどうするのかな…取り敢えず、

「ハイ」

「？」

「立てるかな？お兄さんと一緒に「マリーダ」…？」

声をかけられた方を向くと、金髪の男性が子供に歩み寄ってくる。そうか……この子はマリーダ…彼女の過去の姿か。

「一緒に行こう…ここではまた寂しい思いをしてしまう」

「マスター…」

マスターと呼ばれた男性の手を取り、彼と共に去って行く。彼女もまた……俺と同じように誰かに引き取られたのだろうか……それを知るのは……

「あれ？」

目を覚ますと、そこは乳白色の天井。自分の部屋じゃないのは解る。頭だけを動かすと、両脇にはカーテンで仕切られており、色味の無いベッドに寝かされているようだ。

「ここは……」

「保健室よ」

上体だけを起こした俺に声をかけてきたのは藤原だ。どうやらカーテンの向こう側から話しかけてきている。影だけを見ると、その視界の脇に自分の制服が畳まれていた。

「何でここに？」

「それはご挨拶ね。私が折角運んであげたのに」

「藤原がか？」

「っていうのは冗談。先輩を運んだのは私で、貴方は他の男子生徒に」

そりゃそうだろうよ。何が悲しくて女に運ばれにゃならんのだ。

「そういえば、マリーダは？」

「貴方の隣のベッドよ。二人共気を失ってるだけだって……あと、変な痣が腕にあるぐらい」

やっぱり……見間違いじゃなかったんだな。彼女がシグナーに……

「今、鮎川先生呼んでくるから大人しくしててね。それじゃ」

影が立ち去った後に、引き戸を開け閉めする音が聞こえ、部屋の中に静寂が戻る。それにしても、アレは一体……

「過去、か……」

「どうやらそのようだな」

左隣から聞こえてきた凛とした声。ホントに隣にいたのか……制服を持ってカーテンを開けると、Yシャツ姿でベッドに寝ているマリーダを見つける。

「って事は、お前も見たのか……過去を」

「ああ、私の場合は男の子だったが……アレは」

「恐らく、お互いの過去の姿だろうな。俺が会ったのは女の子だった」

「っ！！……そうか…」

あの情報は全て彼女の記憶ということか。つまりお互いの記憶が交錯して、ごちゃ混ぜになったようだな。頭が耐え切れなくなったのはそれが原因か。

「私は……実の親に蔑まされ、疎まれ、傷付けられた。それに耐えられずに逃げ出そうとしたが、逆にそれが彼等の逆鱗に触れたのだろう。煙草を押し付けられもした。虐待ではなく、ほとんど暴行に近かったな。それでも何とか逃げ出したが、子供一人では誰も相手にしてくれなかっただろう。そんな時に手を差し伸べてくれたのが、マスターだった。あの時助けてくれなかったら今頃、私は……」

記憶の通りだ。逆光で顔は解らなかったが、怒り狂った男と女がその女の子に殴りかかっている光景を何度も目にした。そして、逃げ出す様子も。

「それからは幸福の日々だった。マスターは身寄りの無い私に衣食住全てを用意してくれた。私の様な子供達を何人も養いながら、忙しい合間を縫って遊んでもくれた。その時にデュエルモンスターズを教えてくれたのもマスターだ」

全く視線を逸らすことなく、ただ一点を見つめながら話す彼女の過去は想像だに出来ない。でも、こんな凛とした彼女を育てたマスターという人には俺も会ってみたくなった。興味ではなく、ただ……本当にそう思えた。

「アカデミアの入学までの間、私は恩返しの為にマスターの仕事を手伝った。恩返しの他に理由は無い。私に出来る事で、マスターを助けてあげたかった」

「それが、今のお前を作ったんだな？」

「そうだ。誰かの為に、助けてくれたマスターに少しでも尽力できればと、そう思ったんだ……お前にはいないのか？そういう人が」

やっと視線を俺に移した彼女の眼はとても印象的だった。問い質すではなく尋問でもなく、興味でもない。俺の過去を知った上で俺にはどんな人が支えてくれたのか、という事だ。

「俺には…居る。何人もだ。十になる少し前、俺は実家を出た。本当の父親を探しに」

「親が居なかったのか？」

「片親がな。俺を産んですぐ居なくなったって聞いてたから。そ

れで探しに出たのさ。大都市に着いた頃にはもうフラフラだったから、盗みもしたし、喧嘩もした。捕まらなかった方が不思議なくらいだ」

今でも憶えてる。喧嘩で負けなしだったにも拘らず警察のお世話には一度もなってない。正確には勝ったその場ですぐに逃げたからだ。

「路地裏でコソコソ生き延びてた俺に手を差し伸べてくれたのは今の義理の父さんだった。俺に食べ物をくれたり、デュエルを教えてくれたんだ。そして、そのデュエルで一番強かった人『キング』にも会わせてくれて、その人の元でデュエルの修行をさせてくれた」

師匠の修行はホント、逃げたかったな。矢継ぎ早にくるデュエリストを片っ端から倒していき、十人連続で倒せなかったらメシ抜きとか地獄だよ。何日食えなかった事か。

「それから二年して、母親が入院したって聞いてすっ飛んで帰った。心臓の病気だったよ。後何ヶ月も持たないってぐらいの。その時にやっと父親の所在がわかったけど……俺は行かなかった」

「何故？」

「俺にはかけがえの無い人達がいたからだ。それに、そんな弱ってる親を見捨てて会いに行くのも嫌だった」

ガキらしい理由だろうけど、母親……シェリーの余命が解って、片時も離れる余裕なんて無かった。吐血しながらも俺に父親との思い出を語ってくれたあの人を放ってはおけなかった。

「それから二週間して、母が亡くなった。早過ぎたようだけど、

最後に俺に会えて良かったって…十五になってすぐに義父さんの元に戻って、また修行した。その時に渡してくれたデッキが『コイツ』だ。俺達の絆の証……俺と、義父さんの、皆との絆の結晶。義父さんは『集いし絆の結晶』だって」

「集いし……絆…」

「ああ、お前がマスターって人を大事に思うように、俺にも大事な、大切な仲間との絆を大事に思ってる。それがこのデッキなんだ。月一試験の時もこのデッキを使って、その時にようやく俺の物になった」

『スターダスト・ドラゴン』を見つめる俺に、デッキを持つ俺の手に自分の手を重ねるマリーダ。彼女も自分自身の絆を確認するように目を閉じる。

「感じる……このデッキの持ち主の温かい気持ちが…繋がった思いが…これが『絆』か」

「ああ、そして…この痣も」

そういうと、袖をまくって痣を見せる……竜の頭の痣を。それには彼女もまだ疑念が晴れないような顔になった。

「教えてくれ。この痣は何だ？先程から赤く光っては消えるを繰り返している」

「それについては明日教えるよ。今日はこんな事があって疲れただろ？ゆっくり休め」

ベッドの脇に座り、彼女の頭を撫でる。寝付けなかった俺にアキさんがよくやってくれた。こうしてると良く寝れるらしい。流石医者だ。

「……」

それにはマリーダも顔を赤くしてソッポを向く。ま、この歳でやられるのは恥ずかしいか。

「子供じゃないんだ……よしてくれ」

「解ったよ。悪かったな」

そう言って立ち上がると、そそくさと部屋を出ようとする。アレ…何か忘れてるような……そうだ、鮎川先生だ。どうしよ？

「鮎川先生には、俺は部屋に戻ったって伝えておいてくれ」

「ああ、伝えておこう」

「じゃあな」

「お休み」

時間は……八時五分を過ぎた辺りか。これじゃあメシは無しか。ま、今すぐ死ぬ訳じゃないし良いか。

「そうか。その少年と接触したのか」

「はい。デュエルは中断しましたが、彼は相当のデュエリストです」

ＰＤＡで連絡を取っているのはマリーダのマスターだった。確信を持ったかのような彼の言葉に対し、彼女は何かを案じている様だ。

「中断とはいえ、デュエルしたのならば充分だ。彼と接触したいのだが……出来るかな？」

「鮫島校長にお話すれば、あるいは」

「そうだな。こちらから連絡を取ってみよう。マリーダは少し休んでいるといい」

「わかりました」

マスターと呼ばれている人物が電話を切ると椅子にもたれかかり、溜息をつく。

「興味が湧いてきたな。その少年……不動カイトに」

第２１話　運命　？（後書き）

中途半端で申し訳ありませんが、野暮用があるのでこれにて終了です。

感想及び、ご指摘ありましたらお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3005y/

遊戯王 trust of world

2011年12月28日03時45分発行